
きつねとアメと探し物。

碧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きつねとアメと探し物。

【Nコード】

N5829W

【作者名】

碧月

【あらすじ】

高校2年の夏。

僕はふと思い立って、かつて住んでいた田舎街を訪れた。

そこで再会したのは、変わらない笑顔を向けてくれる幼馴染と、自らを”かみさま”だと名乗る狐耳と狐しっぽの幼い少女で

恋もシリアスもないけれど、僕らが過ごした夏の日々がここにある。

0・旅立ちの始まり

これは『彼女の物語』だ。

物語　または日記だと思ってくれて構わない。

僕と幼馴染の少女、そして不思議なきつね少女との三人で過ごした夏の数日をつづったもの。

手探りで進み、立ち止まり、ときに後戻りしながらも懸命になにかをつかもうとしたココ。

その隣で、自分の探していたものを見つけた僕。

僕らの不器用な姿が、ここには記されている。

そんな日々を、また思い出せるようにするために。

今、僕はページをめくり、この物語を辿ることにしよう。

主な登場人（神）物

・ 姫木明
ひめぎあかる

僕。夏休みを利用して昔住んでいた天^{あめ}が丘町に帰る。

・月代未咲^{つきしろみさき}

あたし。明の幼馴染。

・ココ

わたし。きつねのかみさま。

壹 変わらない街と彼女

電車の音をかき消すほど大きなセミの合唱だった。

長いトンネルを抜けた瞬間、二時間以上座ったことで石造のように硬くなった身体が、のけぞった。そのあまりの大きさにだ。

窓から外を覗くと、夏の田園風景が目飛び込んできた。規則的な揺れを与える単線を進む電車。二人掛けシートが向かい合った固定式クロスシートには、自分一人だけだった。車両の中にしても、平日の昼間なのに両手ほどの客しかない。

通路を挟んだ反対側も空席で、深い青色の座席がさびしげに硬くなっていた。

中学二年だった三年前まではよく利用していた車両なのに、この三年で今住んでいる街のものに慣れてしまったからか、錆びれが目につく。あっちの路線は地方の数県を貫く本線だから、二年置きに新型車両が導入され、徐々にその本数が増えていくのだった。

それでも、僕にはこの電車を嫌いにならない確信があった。

多分、懐かしい、こういうことなんだろう。

目的地が近くなり、外の景色が僕の心を懐古の思いで満たし始めた。目に映った景色が、砂糖をすくうスプーンのように僕の記憶を拾い上げていく。

砂糖粒みたいにきらきらした思い出の映像が蘇っては、甘く溶けていった。

「まもなく、天が丘、天が丘です」

くぐもった車内放送に続き、長い歳月を重ねたブレーキの甲高い金属音が響く。

本来なら決して聞き心地がよいとは言えないそれらも、子守唄のように耳を撫でる。

電車はスピードを落とし、放送からほぼ一分後、クン　と僕の背を押すように停車した。

昔と変わらず手動ドアだった。ドア横の赤い「開」ボタンを押すと、シュ、ガコンという音とともに、ドアが左右に広がる。

はやる気持ちを抑えて一步を踏み出すと、夏の日差しが僕を出迎えた。目を細めて見上げれば、絵に描いたような青空が浮かんでいる。

逆に視線を落とせば、かすれた白線だけがホームに横たわっていた。

「行くか」

顔を上げ、左右を見る。最後尾車両に乗ってきたから、後ろには人はいない。前側にも、電車の窓に向かって手を振るおじいさんとおばあさんだけだった。

ホーム半ばにある小さな駅舎に足を向ける。

改札は、ホームと同じ高さにある。まだ自動改札が普及していないようで、記憶通りの有人改札だった。駅員さんの確認を要するその非効率な作業は、けれど都会よりもはるかに温もりに満ちている。改札を抜ければ、古びた駅舎の中。

無骨な石畳、左手に小さな売店と待ち合いスペース、右手に自動券売機があるだけ。さも当然といった風にかけられた振り子時計が刻む鼓動が耳に響く。

時刻は十二時前だった。

深呼吸とともに日差しの下に晒される覚悟を決め、僕は駅舎を抜けた。

そしてその二十分後、僕は路頭に迷っていた。

ここ、天が丘町には父方の祖父母が暮らしている　はずだった。姫木のおじいちゃんとおばあちゃんねえ、ごめんなさい」

訪ねた実家は閑散としていて、珍しく鍵までかかっていた。

ただごとじゃない、そう思ったとき、向かいの家のおばさん（今

ではない歳だが、顔を見せ、申し訳なさそうに言ったのだった。姫木というのは祖父父母の名字であり、つまり僕の名字でもある。

「あの……二人は？」

「そのね、三日くらい前から温泉に行かれちゃってるのよ。温泉。ほら、県境の」

なんでも、その温泉近くに引越した同級生の家に遊びに行っらしい。高校時代から続けていた囲碁勝負に決着をつけるんだ、と張り切っていたとか。

期間は半月。田舎の時間間隔を思い出して、背中には暑さと関係のない汗が流れた。

……………困った。

以上がことの次第だ。

記憶だと泊まれるような施設もなかったはずだから、選択肢は三つ。

帰るか、祖父宅に忍びこむか、誰かの家に厄介になるか。

悩んだ末、帰るにしてもせつかくだから街を見てまわろうと、僕は住宅街を後にした。あくまで僕も、この田舎街で十四年を過ごした。危機感に乏しい所以だろう。

少し大きい通り（かろうじて舗装されている）に戻る。右手の方はさつき通った道で、向こうに青い三角屋根を構えた駅舎が見える。左手側、北にある山に目をやると、深い緑の中に埋もれた赤色が見えた。確か、神社の鳥居だ。別に神様を信じてるわけでもないけど、帰ってきたことを報告する人がいなかったさびしさを紛らわせようかと、足を向けることにした。

そこ天里あまり神社は、正式には天里稻荷神社という。きつねの神社だ。ふもとにある灰色の鳥居を一礼の後にくぐると、すぐ前に小さな四角いスペースがある。右前には土肌に馴染んだ色の、年季を感じさせる小さな祠。

手を合わせて、それから左に身体を向けた。

妥協しかけた。

神社が山の中腹くらいにあることを思い出したからだ。年季の入った石造りの階段に、朱色の鳥居が列を成している。下からでも暴力的な数が見える。

「……」

それでも、僕は一步を踏み出した。

右に「奉」、左に「納」と黒字で書かれた鳥居は、長い歳月を超えたというのに、まぶしいほどの朱を灯し、気が遠くなりかける僕の視界を染めてくれる。

子供の頃に、よく駆け上がって遊んでいたことを思い出した。

同時に、一緒にいた幼馴染のことも。

最後の鳥居をくぐれば、一気に視界が広がり、右手奥にある拝殿の上には明るい空が伸びていた。

拝殿を背にする形で左を向けば、眼下の街を眺めることができる。そうやって、しばらく呼吸を整えている間にも、幼馴染の少女のことが頭に浮かんだ。

彼女は今、元気だろうか。週一でメールをくれる彼女だが、ここ三年会っていないから、どんな姿に成長しているのかはわからない。僕と同じで高校二年になった彼女。

「まあ、いっしょか」

……あまり変わっていないなさそうだという結論に落ち着いた。

拝殿に向き直り、左にあった手水舎での清めを省いて（心中でこめんなさいと言っておいた）、石畳を進んだ。左右の狛きつね（？）の視線を通り抜けて、拝殿前へ。神様に挨拶をする。

さていよいよどうしようか、と迫り来る現実を見据えようとしたところで、

階段を駆け上がってくる足音が聞こえた。

ふり返れば、

とん

と、その人影が軽やかに着地した。

女の子だ。

白いワンピースの裾が大きく揺れて、青色の半ズボンが丸見えになった。そこから突き出した二本の足は細く、その白さが目にまぶしい。

「うーん！ とうちゃ……」

言葉の途中でくりつとした黒い瞳が僕を捕えた。それに一瞬遅れて、黒色のポニーテールが少女の首を叩き、ワンピースの裾が小さなお尻を隠す。

「……く？」

少女がぴくりと肩を震わせた。

同い年か、少し下だろう。なかなか整った顔だが、わずかに残ったあどけなさが幼く見せる。胸に関しては平均を……それなりに下回っているようだけど、バランスのとれた小柄だ。

まん丸にした目を何度もしばたたかせ、薄く色づいた口元は薄く開いたままで。

ただそれだけなのに、僕はどきりとしていた。

「えっと」

なにか言わないと、そう思い口を開いたのだけれど、その後が続かない。

と、

「……あーちゃん？」

少女がつぶやいた。かかすれていたけれど、どこか聞き覚えのある声。

「……みさ、き？」

頭に浮かんだ、あの幼馴染の名前が口をついていた。

彼女の顔が、雲間から零れ出るときの太陽のように、ぱっと輝いた。

「あーちゃんだあーちゃんだっ」

まるで飼い主と再会したきつねみたいに、ぱたぱたと駆け寄ってきた。ポニーテールがしっぽのように弾む。

ぼふり、ぎゅっ　と、ためらいも恥ずかしげもなく抱きついてくる。僕の左肩に鼻を押し当てられた。すぐ隣で黒髪が跳ね、温かな太陽の匂いが交じった香りが鼻をついた。

「えへへ、久しぶりっ」

一歩下がって、僕の腰に両手を当てる。

見ているこつちがくすぐったくなるくらいの満面の笑み。かつての僕が大好きだったものと寸分も変わらず、でもちよっとだけ大人びた笑顔。

これが、

僕　　姫木明と、幼馴染の彼女　　月代未咲との再会だった。

貳 きつねの子(1)

参道の下り道を僕らは歩いていた。

未咲は日陰になっっていない、右の斜面側をとんとんとん、とリズムよく歩いてきた。日焼けとかにもっと気を遣うべきだと忠告したけれど、言ったところで「えー」とか「あーちゃんも大変だね」とか気のない返事しかしないだろうからやめておいた。

「来るんならメールしてくれたらよかったのに」

僕の葛藤は、これっぽっちも気にされない。

「でも、来ようって思ったの昨日だったし」

「ええっ　じゃあ、昨日決めて、今日やっちゃったの？」

「いや、やっちゃったじゃなくて……」

語彙選択も昔と変わらず適当だった。

未咲とは小学校前からの付き合いだから、性格については大抵わかっている。

明るく活発、真面目だけどめんどくさがり。考えてから発言、行動するものの、気が置けない仲に対しては突拍子もないことを言ったりする。読書と散歩が主な時間のつぶし方。好みの小説はSFやサスペンスを除いたほぼオールジャンル。スプラッタホラーは大丈夫なのに、怪奇系のホラーは大の苦手。

「ふふっ」

唐突に未咲が微笑んだ。

「なに？」

「んーん。あーちゃんは昔とちっとも変わらないなーと思って」

言っただけ、僕の右手首を握る。未咲だって変わっていない。笑った顔も、甘えるように手首をつかんでくるところも。それに僕の呼び方もだ。

「それより、あーちゃんっていうの、そろそろ恥ずかしいんだけど」

「あたしは恥ずかしくないからいいよ？」

「いや、僕が恥ずかしい」

「あーちゃん」

急に立ち止まって、手首に両手を伸ばしてきた。それを自身の薄い胸元に持っていった。

「……あたし、あーちゃんにならなんて呼ばれても　いいよ？」
まっすぐな瞳が訴えかけてきた。

薄く染まった頬は恥じらいだろうか。少しうるんで弱気になった目を、それでも逸らすまいとする健気さと、木漏れ日の弱い日差しの下ですら溶けてしまいそうな儂げな微笑み。

「……」

なんと言うか間違った感情を抱いてしまいそう……なんてことはなく。

「話をそらさない」

「あつっ、あーちゃんってばほんとに変わんないね」

僕の中の未咲耐性は健在だったらしい。まあ、間違ってもそんな感情を芽生えさせることなんてないのだろうけど、未咲は満足そうに僕の手を引き始めた。

「うーん。でもあーちゃんはあーちゃんって感じだし、今だってやっぱりずつととってもあーちゃんだから、あーちゃんはあーちゃんじゃないと、って思わない？」

「あんまり連呼されるのやなんだけど。あと僕に訊かないでよ」

「えー」

口をとがらせた途端に子どもっぽく見えるところも、変わっていなかった。

「でもほら、りんごはりんごだし、鎌倉幕府はイイクニって感じだよ」

「素晴らしくイメージな話だね」

「だからあーちゃんはあーちゃんなの」

「……せめて呼び捨てとかに」

「あー」

誰があだ名を呼び捨てにしると言った。

「でもでも、あーくんじゃ変過ぎるから、やっぱりあーちゃん」

そしてやっぱり僕の話は聞いてくれないらしい。僕もほとんど期待せずに言ったから、どうということはないのだけど。

「それに」

未咲は再び立ち止まり、

「いいじゃない。幼馴染なんだし。ね？」

にっこり。

と夏の木漏れ日のように温かな笑顔を浮かべた。

僕は昔から、この笑顔に勝てないでいた。未咲のそれが、完全に純然たる天然による本能的笑みだからだ。

要するに、僕は素直すぎる感情に弱い。そんな僕を、未咲は「不器用なお人よし」と評した。不器用というのは、恥ずかしがり屋のことらしい。

非常に不服だったけど、甘い性格だという自覚はあった。にっこり顔で「恥ずかしがり屋さんってことだよ」などと言われたら、口を閉ざすしかなかった。

そして数年経った今でも、僕は未咲の笑みには勝てなかった。

「……好きにしていよいよ」

最後のあがきとしてため息を吐いてもみたけれど、果たして彼女に伝わるか。

「それにしても、あーちゃんはおっきくなつたね」

予想通りの完全スルーだ。

そして相変わらず話題があつちこつちに飛んでいく。さっきの悔しさ（自分が原因だけど）もあって、ちょっと反撃してみることにした。

「未咲は大きくなってないの？」

「あつっ」

空いていた右手で胸を隠す未咲。

いや、最初にそこに発想がいくのか。……足りてないことは確か

だけど。

「むー、いいもん。未咲だもん。未来咲く、の未咲だもん」

拗ねるように左腕を振る。そしたら握られた僕の右腕も振られることになり。ちよつど参道を上つてきた神様にアツパーを入れてしまつたりするんじゃないかと、どうでもいい考えが浮かんだけれど、避けれない神様はきつと偽物だろう。とりあえず全部未咲のせいだと弁明しておいた。

それにお賽銭も五円きつかり入れてきたことだし、駄菓子屋の五円菓子とかで機嫌を直してくれるといい。浮かんだ雑念は、木漏れ日の下でチヨコレートのように溶けていった。

「とうちゃーく」

僕の腕を離して最後の一段をぴよんと跳び下りる。

もつ少しいいから女の子としての自覚を持つべきだと思う。下にズボンな時点で色気もなんにもあつたものじゃないけれど、だ。もちろん口にはしない。

「あ」

唐突に、未咲の口から微妙に可愛らしい音が漏れた。

「どつ」

したの、訊ねようとして、彼女の視線を辿つた先のそれに気づいて、言葉が途切れる。

一匹のきつねが鳥居の外に倒れていた。

「たいへんっ」

慌てて駆け寄る未咲。僕も続く。

「おーい、きつねー。きつねー？ あれ、いたち？ でもきつね色だし。なんかきらきらしてるし。金色きつね？ きんきつねかな。おーい、生きてる……？？」

つんつん。ゆさゆさ。つんゆさ。

びくり。

「はわっ」

しゃがんだ未咲の目の前で、金色毛並みのしっぽが波打った。耳も若干動いたけれど、目は開かない。

「あーちゃん」

「とりあえず未咲の家に連れて行ったら？ 近くでしょ？」

引越したという話は聞いてないから、ここから十分くらいの住宅街にあるはずだ。

「おっそれだっ」

と、そこで僕の腕を引っ張る。

「なに？」

「えっと、あーちゃんがだっこしてあげてほしいな、と」

「……なぜ？」

「あたしじゃちょっと母性が足りないというか」

「どうやら根に持っていらっしやるようだ。」

でも、きつねって病気とか いや、言ってる場合じゃないか。

それでも不器用で恥ずかしがり屋らしい僕は、

「べつにいいけど、荷物重いよ？」

と、左肩にかけていたリュックを示した。

「うん。仕方ないね」

受け取った未咲が「う、軽い……」なんて笑い返してくる。

「ほらっあーちゃんはやくっ」

くるりとまわって声をかけてくる未咲。その声に導かれるように、僕も歩き出していた。

天が丘町は、北の天弧山あめこと線路に挟まれるようにして、東西に細長く広がっている。線路の南側も町の敷地だが、そっちには広大な田んぼと、送電鉄塔があるだけだ。

町の中心を北から南に貫いた天里川と、町のほぼ西端を流れる小川の間、天が丘町の住宅街の半分以上が固まっている。天里川よ

り東は、役場や消防署、商店街や残りの家などだ。

住宅街の真ん中にはまっすぐな道路が伸び、天が丘駅と天里神社の鳥居とを結んでいる。

駅から鳥居を見て、左側が旧住宅街、右側が新住宅街だ。

旧住宅街には僕の実家があり、未舗装の道や無駄に広い敷地を持つ木造、瓦屋根の家々がある。一方の新住宅街は、元は畑だったところを、十数年前に開発したもので、比較的新しい家が軒を連ねている。

未咲の一家もその開発に合わせて引越してきたのだった。

新住宅街を東西に通る生活道路は、車通りなどなくて、子どもの遊び場にもなる。けれど、今は昼時だからか、子どもの姿は見えなかった。

アスファルトに書かれた薄い通学路という白文字を超えた先で、未咲が左に曲がった。丁寧に剪定された深い緑の垣根の向こうに、白い壁と光沢のない黒瓦屋根の一軒家。

幾度となく遊びに来た未咲の家だ。

年中開きっぱなしの門を抜けると、左には前庭が広がっている。縁側があり、垣根に寄り添うように、手入れされた花壇がある。記憶のままだった。

「あーちゃん？」

未咲が玄関からひよっこりと顔を出し、首を傾げた。

「ううん、なんでもない。おじやます」

きつねをもう一度抱き直してから、玄関をくぐる。家の奥は暗く、靴を脱ぐときにふり返れば外のまぶしさに目がくらんだ。

「あ、言っただけか、しばらく誰もいないから」

「……………はい？」

何気ない未咲の言葉に、僕は数秒ほど立ちつくした。

貳 きつねの子(2)

居間も昔と同じだった。廊下が上がってすぐ左にある畳敷きの居間は、未咲家の食卓でもある。中央の四角いテーブル（冬はこたつ）と、周囲におかれた座布団。

未咲が開けた掃き出し窓の向こうには、さっき見えた縁側と花壇がある。

その右隣の角には、新しそうな薄型テレビが置かれていた。

「テレビ買っても、ケーブルテレビじゃないと映らないんだけどね

」

未咲が笑って言い、麦茶のコップを二つ、テーブルに置いた。

きつねの子を隣の座布団に寝かせてから、麦茶に手を伸ばす。懐かしい味がした。

「あーちゃんとお茶するのも久しぶりだね。なんだか和むよ」

「和むというか、平和だね」

「そだね。そういえば、平和と和平ってどう違うんだっけ」

「さあ？ 麦茶と緑茶みたいなものじゃないかな」

「ふうん。手を放したら取り返しがつかないってことだね」

何気に重くなってしまった。

「……で？」

「なに？」

「なにじゃなくて、どうして未咲ひとりなのさ」

「……ん」

ちょっと訊いてみただけなのに、未咲は途端に暗い顔になった。

コップがテーブルに戻される音がいやに大きく響いた。

「おじさんとおばさんまでは話がいつてるかもしれないけど」

「う、うん」

「温泉旅行に行っちゃいました！」

「……」

未咲のおじいさんはうちの祖父と同級生だった。つまり、うちの祖父らが泊まりに行った先の人とも同級生。さらには、その人の息子夫婦というのが未咲の両親のクラスメートらしい。

補足しておく、僕の両親も未咲の両親と同級生だ。

そう言えば、「温泉に誘われたけど忙しくて行けないから代わりに行かない?」「なんで僕が……」みたいな会話を母さんとした気もする。

「というか、仕事は?」

「高校の先生は夏休みだよ?」

いや違うだろ。それに泊まりつて半月とかじゃないのか?

「部活は代理の先生に任せさせて言ってた」

そんなんでいいのか。

「なんていうか、平和だ」

「うん、あたしもそう思うよ」

大仰にため息をつく未咲。

「仮にも年頃の女の子なんだからさー。大事な一人娘を置き去りにするとかひどいよねー」

「……」

「な、なにあーちゃん。もしかして『自分で、大事なとか言っつな!』とか思ってる?」

「ううん。年頃って自覚があつたんだな、とか思ってる」

「ひどっ」

言つて、未咲は麦茶を一気にあおつた。

「ふう。それであーちゃんは泊まっていくんだよね?」

「えっど?」

「だから。うちに誰もいないから、泊まれるよって言ってるの!

文脈でわかってよ」

脈絡を作つてから言つてくれ。

「つまり未咲は、大事な年頃の娘さんが、幼馴染という理由だけで、両親の留守中に、泊まらせる。と言いたいのか?」

「いやでもあーちゃんだし」

「……どういう意味？」

「うん？ だってほら、あたしから襲わない限り絶対に手出さないでしょ？」

「いやそりゃまあ。」

「べつに襲ってくれてもいいんだよ？」

「興味ない」

「どういう意味かな？」

「発育不良」

「あうっ」

「ばたーん、と畳に倒れこむ。」

泊まるあてもなくて、ほんとは泣きついてでも泊まらせていただけきたい所存であるところの僕がついつい未咲をいじめてしまったり、余計なことを口走ってしまうのは、強固な信頼関係に基づいているゆえだ。それだけは明言しておこう。

「と、明は言った。略して明げ」

「略すな」

「あうー」

「あうーじゃない！」

「こーん」

「……きつね？」

「とりあえず、あーちゃんがつんつんするのは飼い主に構ってほしにゃんこの心情ってやつだね」

「……あながち間違いでもない気がしなくもないのがなんとも言えない。」

「またそんな遠回しに認めなくても」

「……」

未咲は意外と鋭い。ときどき、ぴしゃりと読んでくる。少し悔しいものがあるけど、長い付き合いだから致し方ないと割りきることになっている。

読まれるのも、それはそれで気楽なものだからだ。

「大切な妹を差し置いて？」

「ごめん。こういう場合は家族を除くものだと思ってる」

「うん、知ってる」

無駄話も相変わらず。

さて、話を戻すことにして。

「という事で、三食お昼寝ときどきお菓子、掃除洗濯手伝い買い物荷物持ちきつねの世話つき、の無期限宿泊、でどうかな」

「……お世話になります」

即決だった。

親しき仲でも、きちんと頭を下げておく。

任せなさい、と胸を張る彼女の態度はさすががしいほどで、そういうところが未咲の魅力でもある。気楽というか、呑気というか。

「ところで」

「うん」

「きつねの世話って、未咲一人でできるの？」

「もう、なに言ってるのさ」

失礼だな、と笑って。

「あたしいるところに、あーちゃんあり、でしょ？」

「とりあえずお昼にしようか」

時間はすでに一時をまわっていた。その理由の大半は無駄話にある。

「なにか手伝おうか？」

居間で待ってるだけなのも落ちつかなくて、縁側の反対側にくっついた台所に顔を出す。

真ん中にある木製テーブル（食器、果物置きと化していた）を挟んで、調理場に向かった未咲がふり返る。

「んつと、じゃあお皿出して欲しいな。おそうめんのつゆ入れっばいやっ」

「うん」

うなずいたものの、人の家の食器がどれ用かなんてさっぱりわからない。

とりあえず、味噌汁用じゃない青い模様のお皿を出した。肉じゃがとかシチュー皿っぽいやつだ。

「これでいいの？」

「うむ。あとお箸は棚の一番左の引き出しに入ってるから、好きなを選んでね」

小さい頃に泊まりに来たときに使ったはずの可愛いのがあったけど、無難な茶色いを選んでおいた。

「他には？」

「だいじょうぶ。きつねの子見てくれたらいいよ？」

「あ、うん」

あんまり役に立たなかった。

「暑いときはやっぱりおそうめんだよね」

居間のテーブルで、向かい合つての昼食。廊下側が僕で、壁側が未咲だ。

同じ中学のときはいつも一緒にお弁当を食べていたけど、家での食事は久しぶりになる。

「暑いときって……あんまり暑そうには見えないけど」

クーラーも扇風機も使わず、窓を開け放しただけ。テレビはつけてないから、セミの声がやたらと聞こえるけど、気分的にも暑いというともない。

「そんなことないよ。なんなら脱がせていただきます！」

「女の子」

「あい」

でもあーちゃんだし、なんて言ってるのは、聞こえないふりをした。

「しちそうさま」

「お粗末さま」

あつさりしていておいしかった。

「つゆ、上手にできてた？」

「そうだね。おいしかったよ」

学校のお弁当にときどき入っていた未咲作のおかずを思い出す。

あの頃から、なかなかおいしかった。これは食事には期待できそう
だ。

「あーちゃんにほめられたー。のはいいとして、起きないね」

テーブルの台所側に、間違つて踏まないようにと、三枚重ねの座
布団に危なげなバランスできつねの子が寝かされていた。

「お腹すいたら起きるでしょ」

「おお、ならおいしいものを出しておこう」

台所に消え、戻ってきた未咲の手には大皿が載っていた。

「なにそれ」

「お隣さんがくれた手作りいちご大福。郵便局のハウス栽培いちご
がたくさん届いたからって、おすそ分けてくれたの」
なるほど。

「あ、おいしいね」

ちよつとお腹が気になったけれど、一個くらいならと手を伸ばし
た。

「だよね！　どんどん食べてね」

そう言った未咲はすでに三個目に突入。

いやまあ、身体の管理は自分持ちということ。

テーブルの上に、大福の皿と水をいれた浅い皿を置いて、二階に
行くことにした。

僕用の客間を掃除するためだ。

家の奥から玄関向きに伸びる階段に足をかけると、ぎいぎいと懐
かしく軋んだ。未咲が上るときより大きい音がしたような気がして、
ちよつと嫌だった。

上りきって右に折り返す廊下を進むと、突き当たり左の客間に明かりが点いた。台所の真上に当たる部屋だ。

開いた引き戸の向こうは、すっきりした和室。家の裏を向いたベランダに続く掃き出し窓が開けられ、夏の香りが風に乗って入ってきた。

「適度に掃除はしてあるけど一応した方がいいかも」

未咲の言に従って、僕が掃除機をかけることにした。未咲はベランダに出て、布団を干してくれている。

「ねー、あーちゃん。こうしてるとさ、なんだか昔を思」

「じゅっ」

「……………」

顔を見合わせた。お互いが首をふった。

「下？」

「なんかすごい音だったね」

「テーブルに頭ぶつけたのかもっ」

未咲が急いで作業を終わらせ、下へ向かう。僕も続いた。

畳の上が水びだしやら、大福の粉だらけなんてことを想像しながら下りる。

廊下を玄関の方に駆け、覗きこんでいた未咲に追いつく。覗いた。

「……………」

それは僕らに気づいた。

「あ、れ……………」

未咲が首を傾げ、声を漏らす。

僕も同じだった。言葉が出ない。

目の前の光景が理解できなかった。

だって、テーブルの上にぺたりと座りこんでいたのは、

金の髪を背中にまっすぐ流した、白ワンピースなきつね耳、きつね
ねしっぽ少女、

だったからだ。

参 ちいさなかみさま

「う……」

テーブル上の少女。たぶん十代の半ばには達していないだろう。
未咲よりもさらに小柄だ。

「うっ……」

幼い小顔に警戒の色を浮かべ、釣り目がちな目が素早く左右を探
った。

「えっと？」

未咲が口を開いた瞬間、

少女が、ばっ と跳んだ。

両手に一個ずつのいちご大福を掴んだまま。

で、バランスを崩した。テーブルの上にこぼれた水が原因だった
らしい。

顔から落ちて、べちん と畳を叩く。

「……お？」

未咲が近づいて行って、

「捕まえたっ」

少女の両脇に手を入れて、ネコでも見せるようにして僕に示した。
薄くオレンジがかった蛍光灯の明かりにきらきら光る、実った麦
畑を思い起こさせる金色の髪。ちょこんと乗った三角の耳は、しょ
んぼりと力なく垂れ下がる。小さめの顔に比べて大きな、お日様色
の目には涙が浮かび、少し赤くなった鼻が見た目相応の子供っぽさを
を露わにしていた。

身体の線は細く、肌は昼のそうめんのように透き通る白さ。きれ
いな曲線を描く肢体はどうしようもなく子供のみままで、両手に握ら
れているいちご大福が、身体だけでなく心の未成熟をも表している
ようだった。

「うっ……」

抵抗も見せず、ワンピースの裾から出た、つやのある金毛のしっぽがふらふら揺れている。

「……とりあえず下ろしてあげたら？」

なんだかかわいいそうさ。

「うん」

とん、と畳に足がつくと、すぐさまテレビがある隅に逃げた。

「……………」

敵意の眼差し。

「えっと、きつね……ちゃん？ さっきのきんきつねは？」

ひるみながらも、未咲が友好的に口を開いた。

未咲の社交的な性格を尊敬する一方で、よく犬とかに吠えられていたことを思い出した。案の定、きつね少女はがるりとも吠えそうな顔になった。手にある大福を一瞥して背中に隠し、険しい目を未咲に向ける。

「こっこれはわたしがもらったんだっ。いまさらあげないとか、そういうのは、なしだからな！」

けれど口から出てきたのは、僕らが思ってもいない言葉だった。

「どうしよう」と未咲が目で訊ねてきたから、

「僕に訊くな」と目で返しておいた。

すると、「可愛すぎる！」と表情で訴えてきた。

「……………」僕は視線をきつねっ子に移すことで、未咲に無言の命を下した。

未咲は少女に向き直り、

「えっと……………オレンジジュースあるけど、飲む？」

「っ……………」

耳としっぽが瞬間的に跳ね上がった。それはもう針金で補強してあるのかと思えるくらいにまっすぐにピンと、だ。

目は爛々と輝き、頬もうっすらと染まっている。

「はい、あーちゃん」

と、ありえない速さで台所まで往復してきた未咲が、コップをくれた。

「なんで僕？」

「いや、なんていうかちょっと可愛すぎて」

「うん」

「渡したすきにむぎゅっとしちやいそうじゃない？」

「……そう？」

「わかってないなあ。ほら、よぉーく見てよ」

きつね少女の視線を辿る。二つのくりっとした目が、コップにくぎづけだった。試しにコップを水平に動かしてみると、正直に目が追ってきた。

「あーちゃんあれ買って！」

「おもちゃじゃないから！」

自分でやっておいてなんだけど、つつこんでおいた。

「ほんとに僕がやるの？」

「だって、待ってるよ？ あの子」

餌に釣られてなんでも言うことを聞いてしまいそうな催眠状態のきつね少女は、「待て」状態。今か今かとわくわくどきどき。

なんで僕が……と思いつつも一歩近づく。

ぴくりと条件反射的に反応。警戒の色に目が染まった。けれど、少女には逃げ場がなかったから、少し困り顔になった。

……そんな目で見られてもどうしようもない。

もう一歩近寄れば、鼻をひくひくと震わせ、僕の顔とオレンジ液体を交互に見始めた。

瞳が揺れる。しっぽがもどかしげにぴこぴこ動く。そんな微笑みさを見せられると、これを与えなければならぬという謎の思いにかられた。

「はい」

すぐそばまで行って、差し出した。だけど少女の瞳には、じわりと涙が浮かんだ。

「え……えっと、どうしたの？」

「……い」

「え？」

「だって だから両手がふさがってて持てないっ」

真っ赤な顔。

どうするべきか、ふり返った。

「ん？ 口移しじゃないの？」

「……」

未咲はだめな子になっていた。自分でストローかを取りに行くしかなさそうだ。

心中でため息をつきつつ、足を台所に向け、

「……きゅう」

小さな声で呼びとめられた。顔をくちやくちやにして、視線はコップ。

「……」

畳にコップを置いてから、その場を離れた。

ひきだしから見つけたストローを手に戻ってくる。

居間は静かになっていた。未咲も相変わらず働かない人のまま。

で、例の小動物は、

両手の大福を畳につけてしまわないようにか、うさぎ跳びスタイルでしゃがみ、一生懸命に舌でコップの中身を舐めていた。

しかし舌はわずかにしか届かず、液面を波立たせるだけ。ふわりと柑橘系の香りが鼻をくすぐる中で、空気を舐め続けている。

「あのがんばってる感がたまらないっ」

「……ほら」

未咲を無視して、ストローが少女の方を向くようにして差す。

ぱちぱちとまばたきをして、おもむろに口を近づけ、つつ、と吸い始めた。白い管が下から染まっていく。

ちゅー。こくん、こくん。

喉が鳴った。ぱあ、と涙で乱れた顔に笑顔を浮かぶ。

なにかを言おうとしたのか口を開きかけて、けれど、視線はジュースに戻り。そのまま、じゅずすと勢いよく吸い始める。数秒後にはコップは空になっていた。

よほどおいしかったのか、ほわ〜とした目で、ぺたりと座りこんでしまう。

未咲と二人して眺めていると、はっと我に返った。

今度は右手の大福へと小さくな口を近づけた。

もきゅもきゅ……んぐんぐ。

また驚いた顔になって、それからためらいなく大きな口を開く。

八重歯がきらりと覗いた。あつという間にふたつを食べきってしま

う。残りも勧めると、テーブルにかみつかんばかりの勢いで跳びついた。で、またこけた。

「どうするの、あーちゃん」

「どうしようか」

テーブルについた少女を見やる。コップにジュースを注ぐことを覚え、一心不乱に水分と食物を摂取していた。

「……？」

僕らの視線を感じて顔を上げる。まぶたをしばたたかせ、それからはっとしたようにお皿を腕と身体で隠す。

「っ〜」

目で威嚇してくる小動物。

そういえば昔の未咲もこんな感じだったかも。

「失礼な。あたしはもう少しだけわずかにかろっじておしとやかだつたもん」

「どんぐりのなんとかだね」

「っ〜」

少女の目がどんぐりになった。

……きつねって木の实食べるっけ。

「取らないからゆっくり食べなよ」

そう言ったものの、うくと唸ることをやめない。でもしばらくしたら食事を再開。しっぱは、ぱたぱた絶好調だ。

「ねえねえ、きみはあのきんきつねの子？」

テーブル越しに目の高さを合わせて未咲が訊ねた。

すると手を止め、開きかけた口を閉じてへの字にした。むっと頬が膨らむ。

「きつねじゃないっかみさまだっ」

「……………」

顔を見合わせる僕らに、さらにむくれる。むうっ、という感じだ。

「なっなんだその顔っ信じてないなっ！」

「……最近はいさいかみさまが流行ってるの？」

訊ねると、ずびしっといちご大福を突きつけてきた。

「ちっこいってゆーなっ」

「発育不良」

「うぎゅっ」「うっ」

二つの声が漏れる。胸を隠すように押さえる未咲。尊い犠牲だ。仕方なかったんだ。

「とりあえずかみさま」

「うむ」

かみさまと呼ばれると嬉しいらしい。しっぱがひとり、ぱしりと畳を叩いた。

「こんなところでなにしてるの？」

「う、……………」

「いや、だつてかみさまでしょ？ 違うの？」

「ぱっ馬鹿にするなっわたしはれっきとした天里あまじ稻荷のかみさまな

のっ

「……………」

じとつとした目で見てみる。うつ、とたじろぐも、かみさまの威厳っぽいものを示すように見つめ返してくる。でも口元が大福の粉で白くなっていて、威厳もへったくれもない。

「あーちゃん。へったくれってなに？」

「……知ってる？」

かみさま（仮）に訊いてみた。

「（お腹が）減った、（もっと）くれ。の略だな」

かみさま（暫定）は、のたまった。

「あーちゃん。お腹がすいてるみたいだよ？」

「……」

未咲がへったくれたことを言うから話がずれていくんだけどね。

「いいや。じゃあ、かみさまが偶然お腹をすかせていたでしょう」

「つ……そ、そうそうそのとおりだ。わたしはかみさまだけど偶然たまたま奇遇で珍しいことにお腹をすかせてちょこつと倒れてただけなんだ。べつに喧嘩して家に帰りづらいつかそんなんじゃないんだからな！」

喧嘩？

かみさまが？

かみさまなのに？

謎だった。

そんな気持ち顔に出ていたらしい。

かみさま（棒読み）が気まずそうに目を背けた。耳もしっぽもしょんぼりと垂れてしまつて、捨て猫ならぬ捨てきつねみたいだ。

「そっか。なら、しばらくお泊りする？」

「……。」

「いや、ちよつと待って未咲」

「うん？ なにか言いたいことがあるのかな、居候さん」

「……」

「ということ、どうかな？」

僕をなにも言えないようにしてから、未咲が再び訊ねた。

「そ、その……いじめない……なら」

さつきまでの威勢からうってかわって、もぐもぐと口もる。

「じゃあ決まりだね!」

未咲が笑顔で言った。だから僕は、無駄だと知りつつも待ったをかけた。

「いやいやちよつと待って!」

「やだ」

「やだじゃなくて!」

「じゃあ、なに?」

「居候であるところの僕の意見とか」

すると、未咲はいたずらっぽいなを浮かべた。

「だって。即答で文句を言わなかった時点であーちゃんは賛成でし

よ?」

と。

なににせよ。

短い夏の同居生活が始まりを告げたのだった。

肆 家（1）

依然として居間。いちご大福を片づけ終えて、温かいお茶が、テーブルについた各自の前に並ぶ。湯のみから立ち上がる湯気は、この街に帰ってきたときと同じような安心感を与えてくれる。しかし、それよりも重要かもしれないものが目の前にいて。

「お名前は？」

未咲の問い。

「あるぞっ。めちやくちゃ可愛い名前だっ」

「なんてお名前？」

少女の即答に、にっこりと未咲が訊ねた。

きつね耳少女は即座に口を開き、けれど言葉は出てこなかった。

薄い桃色の唇が、小さく震えただけだった。謎の沈黙が降り、外のセミの声が大きく響いた。

「えっと？」

「な、ないしょっ」

「……………」

ほんとにあるんだろうか。疑わしい。僕と未咲は顔を見合わせた。

「うっ、信じてないだろおっ」

「じゃあ最初の文字は？」

「え……………」

「え、から始まるの？」

「ちっ違っぞ。こ、だ！ こー！」

「そっか。その次は？ 教えてくれたら、おいしいお菓子あげるよ？」

「う……………そ、そんなのにだまされないんだからなっ」

「というか、嘘の名前を教えるとかはなかったの？」

つい、口を挟んでしまう。すると、畳がぱしりと音を立てた。少女のしっぽが叩いたようだ。

でも、少女は口を開かなかつた。

「もしかして思いつかないとか」

「うっ」

凶星だっ たらしい。

きつねも嘘はつけない体質なんだろうか。素直さに好感を抱きながら見ていると、

「ちっ違うぞっわたしだって名前くらいちゃんと考えられるんだからなっ！」

慌ててつけ加えた。そうは言うものの、目玉はぐるぐるとまわり、全然思いつかないぞオーラが漂っている。

「じゃあ、きみのお名前は？」

未咲が訊ね直す。

「えっ……っとだな、こ……こ。こ、こ……」

「コココ？」

助け舟を出してみると、顔をぱっと明るくする。

でもすぐに不満げな顔になって、

「うっ、でもそれってなんか、小さいきつねって言うてるみたいじゃないか？」

小狐ココ、か。

ちなみに僕は、この街の西を流れる小来川ここからとつた。内緒だけ。

「可愛いと思うけどな」

文句を言いつつも、ちよっと心が揺らいでいる様子の少女に追い打ちをかけてみた。

ほわっ はっきりわかるほどに頬が朱色に染まる。

「い、いま可愛いって言ったか!？」

「え、言ったけど？」

「ほんと？」

「うっ、うん。可愛いと思うよっ。」

「うんうんうん。めっちゃめっちゃかわいいーよ!」

未咲は、可愛いと言われて照れる様子に対して言ったのだけど、それに気づくこともなく、ココ（仮）はさらに嬉しそうな顔になる。「そっかー。なら仕方ないな。わたしのことは今日からココって呼んでいいぞっ?」

というところで、名づけ完了。

「そうそう、あたしは未咲、ね。ココちゃん」

えへへー、と微笑む。ついでに、「僕は明」と名乗っておいた。

「えっと……おっきい方があかるで、ちっさい方がみさきだなっ」
「覚えた！ 誇らしげにうなづくココ」。

「ちっさい……………ちっさい、ちっさい。そっかあたしって、かみさまから見てもちっさいんだ。うっ」

対照的に畳に沈みそうな未咲。ちょっと不憫だったからフォロ―しておく。

「ココ。あまりいじめないようにね」

「うっ、あかるはおっきいからってわたしにそんなこと言うのかっ」
マイペースなことにココも頬を膨らませて言い返してきた。

「この身体は擬態だから、やろうと思えばおっきくなるんだぞっ！
胸だっっていっぱいいっぱい成長するんだからなっ！！ 例えばほらあれだあの和服が似合うよにゃ」
「囁んだ。」

「……………」
「と、なぜかココの表情が暗くなった。まさか落ちこんでる…………?」

「ココ?」

そっと呼びかける。力なく顔が向けられたけれど、明るい色をした瞳の奥に、小さな不安が覗いたような気がした。

「……………」
「なにかを言いかけて、でもなにも言わずに首をふった。」

それから、ぱっと目を細めて、
「とりあえずよろしくだっ。みさき、あかるっ」

そのときのココに浮かべられただろっ一番の笑みを、未咲家の居

間に咲かせてくれた。

夕食はカレーだった。

甘いのと辛いのとどっちがいいか訊ねた（両方のストックがある不思議）ところ、

「べつべつに辛くたって水があつたら食べられるぞっ」

ということだったから、甘いのになった。素直なのかそうじゃないのか、いまひとつわからない。

あーちゃんにそっくりだね、と言われたのだけど、僕としては、ココと未咲が似た者同士に思える。二人とも同じようなテンションだし。

夜七時。三人での夕食も、昼食と同じように居間の四角テーブルを使っている。庭に面した掃き出し窓を背に座るココ。その左手に未咲で、右手に僕。僕と未咲が向かい合う形だ。

未咲はあんな性格だけどびしっと正座してるし、ココも予想外にきれいに正座しているから、僕も同じように座布団の上で姿勢を正している。

ココは最初はおそろおそろだったのだけど、今は普通に食べられているようだ。スプーンにルーをすくっては、ふうふうと冷ましているのは愛嬌ということだ。

「……なあ、あかる。この得体の知れない物体はなんだ？」

なにやら真面目な顔でスプーンを見ていた。

オレンジ色で、丸みを帯びた四角。野菜の一つであるアレが乗っている。

「苦手だからって、得体の知れないもの呼ばわりしないの」

注意すると、うつと声を漏らす。明らかに嫌そうな顔。

「で、でも……だな」

「でもじゃないの。ほら、なんて野菜？」

「うづ〜っ」

名前を口にするものおぞましいオーラ。

「に」

「に?」

「……………に、にしん」

「おいしい!」

「音的におしいけど、食べ物的にはかけ離れてるからね?」

未咲につつこんでおく。なんだか未咲が二人に増えたみたいな気分になってきた。

「で、実際のところは?」

「う、えつと、だな……………に」

「うん。に?」

「ああもう! にんじんだにんじんっ
開き直った。」

声と同時にわつと涙が少しだけ散った。

「セリ科で、大根のちっさくてオレンジ色でうさぎが食べてるイメージがあるあれだあれっ! キャロットでもズボンみたいなスカートだろうとなんだっていいんだっ」

「……………。ココちゃん。スカートなら、キュロット、だよ?」

「……………」

「……………わ、わざとだっ! ちょっと間違えてみたら反応するかと思
って言ってみただけなの!!」

そんな言葉とは裏腹に、頬は薄く染まっている。

とりあえず話を戻そう。

「それでココは人参が食べられないの?」

魔法の言葉「かみさま、なのにな?」を唱えれば、やはり気まずそうに視線をそらす。

横顔を覗けば、頬がさらに染まっていた。べつに嫌いなものがあるのは悪いことじゃないし、子供っぽいわけでもないのだけだ。

「むしろそれがいいよねー」

「未咲は好き嫌いないでしょ……………」

欠点の少ない彼女だった。

「うう、みさきは嫌いなものないのか。……べ、べつにわたしも食べられないわけじゃなくて……だな」

「ごによごによとココが続ける。畳に這ったしっぽがその表面を力なく撫でていた。」

「その、えつと……ちよ、ちよつとだけ口に合わないだけだ」

「それを世間では、好きじゃない、と言う」

「そ、そんなことないぞっ！？ ちゃんと食べられるんだからなっ」

「そっか。じゃあ、見てるね」

「……………うう」

まだ手に持ったままのスプーンに目を向けた。一瞬で目をそらす。仕方ないなあ。

「ほら、口開けて」

そのスプーンを取って、少しルーをすくう。十分に冷ましてから口元へ。

「う……………」

「う、じゃない。ほら、あーん」

「た、食べなきゃだめ、か？」

「未咲が作ってくれたんだからね。一緒に住むなら、残さないのが礼儀だと思うよ」

「うう……あかるはいじわるだな」

「そうかもね。はい。あーん」

「あ、あ　ん。んぐんぐ……………ん」

「くくくく、くくん。じわり、とまた涙が浮かぶ。」

「ほ、ほらちゃんと食べたぞっ」

「どうだっ、と言いたげに胸を張る。ただし口元にはカレーのルー。つけた犯人は実は僕。もちろんんわざとじゃない。」

「でも微妙な罪悪感(?)もあって、」

「うん。えらいよ」

「ココの髪を撫でる。ふわりとやわらかく、少し温かい。撫でてい

るこつちも気持ちよくなる撫で心地だった。

「く、くすぐりたいぞおっ」

□ではそう言うものの、ココは目を細め、抵抗もしない。

「あーほら、□元についてるよ」

気づいた未咲がふきんで拭ってやる。すると、なでなでとむぐむぐで嬉し嫌そうな顔になった。

「ということ次ね。あーん」

「う……さっきも食べたぞ」

「まだあるからね」

「う〜、あかるはわたしをいじめて楽しいのかっ？」

「楽しくはないけど……その、なんだろう。さっき、ココ頑張って食べたでしょ？」

「うん……？」

「そのときの、食べられたっていう、嬉しそうな顔がとっても可愛かったからさ」

「むっ」

「だから、そのとっても可愛い顔を見るためなら、心を鬼にしないといけないのかと、涙を飲んでるわけなんだけど」

「あーん」

「ん？」

「なにしてるあかるっはやく食べさせろっ」

「あ、うん。あーん」

「あーん」

そしてココは見事、オレンジ土中植物の殲滅に成功した。

「えらいえらい」

褒め褒めすると、ん〜、と寄ってきて、頬を擦り寄せてくる。

と、そんな様子をもの言いたげに見てくる視線。

「なにか」

「ううん。あーちゃんはいつの間に小さい子を手なずけるのが上手くなっただろう、ってさ」

「人聞きの悪い。というか、ほら、アレがいるし」

「実家に置き去りにしてきた妹のことだ。」

「ああ、そういえばそうだね。元気にしてる？」

「連れてつてくれないとか人間として終わればいいのに。とか言いそうだったから、書き置きだけして逃げた」

「ほー。なんとというかいつも通り仲良しさん？」

「未咲の方が知ってるでしょ」

「アレはやたらと未咲に懐いてるのだった。」

「そうだけど。あーちゃんはやちゃんと知つとかないとだめなの」

「そうか。改めて言われると荷が重い。」

「うん？ どうしたんだあかる。悩みごとか？」

「ぱちぱちとまばたき二回。まん丸な目が見上げてきたから、くしやりともうひと撫でて誤魔化しておいた。」

肆 家(2)

十時。やっと僕は布団の上でゆったり息をつくことができた。
食事の後、

「わたしだつてお皿くらい洗えるんだからなっ」

と、流しに届かないココをイスに載せたり、お皿を割らないか、ココ自身が落ちないかはらはらしたり、完遂して、「見たか!」と胸を張る興奮気味のココを数分えらいえらいしたり。

「あかるとお風呂に入るぞっ」

「……大きさに無理」

「大丈夫だ。わたしはこう見えてもちっちゃいからな!」

「……」

「そーいえば、昔はあーちゃんと二人で入ったねー」

「そうなのかつ? じゃあ、三人で入ろう」

「おお!」

と、やかましい二人だけをお風呂に放りこんだり。

一人でお風呂に入れるのがとても至福だったりと。

こんな感じで色々あった。

未咲のパジャマを着せられたココは、すでに眠ってしまったようだ。すうすうくうくう、と穏やかな表情をして、同じ布団で丸くなっている。

全ては、ココのことで忙しくて、布団を干し忘れていた自分たちに非がある。

まあ、夏だから畳の上でも寝られるし。

ということ、僕とココが同じ布団で寝ることになった。

ちなみに未咲だけ別室。というか自室で寝ている。寝相の素晴らしさが相変わらずであるらしい。そのことを暗に告げた未咲がちょっと照れていたのは、彼女の成長ゆえと信じたい。

それにしても……。

暗さに慣れた目を凝らして、ココを観察する。

きつね耳、きつねしっぽ。

人間じゃなくてかみさま。

ぴんと立ったままの耳が少し気になって、つついてみた。

「……………んん。あかるう」

あ、と思ったけれどすぐに寝息を立て始めた。ただの寝言だったらしい。無邪気そのものの寝顔。

自分がここに来た意味を忘れてしまいそうになる。

探し物。

数日くらいしかいられないだろうけど、その中で見つけることができるだろうか。ずしりと見えない重みが心を抑えつけた。その圧迫感から逃れるように深く息をついて、それから静かに目を閉じた。

「……………あかるう」

「……………」

「……………あ、あかるう」

ゆさゆさ揺らされる。薄く目を開けると、ココだった。

枕元に置いた腕時計を見れば、一時を過ぎたくらい。まだ朝じゃない。

「……………どうしたの？」

「……………そ、そのだな」

「……………うん？」

「……………と、といれに、連れてって……………」

頭をぼーっとさせながら、ココの手を取って暗い階段を下りる。

足を次の段に乗せるたびに、ぎい、ぎい、と不気味な音が響く。

その度に小さな悲鳴を上げるココをなだめ、同時に、すぐに垂れ下がるズボンの裾を折り曲げる。ふと見えた足の細さに、ついどきりとしてしまった。

「あかる」

やることを済ませ、手を拭いてから戻ってきたココが僕を見上げた。夕方とは打って変わって、どこか元気のない様子だった。

「どうしたの？」

「……………いいのかな」

「うん？」

「わたしは、ほんとにここにいてもいい？」

廊下に灯った明かりが、彼女の顔に影を落としていた。声にも元気がない。

「どうしたの突然。寝ぼけてる？」

「違うっ」

「……………ごめん」

「いいけど。なあ、あかる」

「いいんじゃないかな」

「え？」

「未咲は適当に見えてしつかり考えてやってるし、僕も迷惑じゃない。だから、ココがいたいって思うんなら、いたらいいんじゃないかなって」

「……………それは本心？」

「え？」

「わたしは……………その、きつねだから。あかるにだけ言うけど、ほんとには内緒なんだけど、わたしはそんなりっぱなかみさまじゃないんだ」

「つまり？」

「だからっ……………相手のこと考えるのとか、苦手、なんだ
いきなりの告白だった。」

「感情が読めないってこと？」

「少しくらいならわかるけど……………怒ってる顔してるのに怒ってないとか、あんまり感情を出さない声とか。そうというのが、わからない」
「うーん」

(見た目)年上としてアドバイスしたかったけれど、難しい問題だった。そもそも僕だって、人づきあいが上手い方じゃない。未咲に不器用と言われるレベルだ。

それが多分原因になって、僕は今ここにいるんだろう。引越先で、ちゃんと友だちはできたのだけど、親友と呼べるほどに自分をさらけ出せる仲にはならない。

そういう考えは甘えかもしれないけれど、未咲や、それに妹といるときは、限りなく自分の素に近い部分が表に出ている。それは恥ずかしいことでもあったけど、居心地はいい。

自分が自分であることを許してもらえる相手がいることは、とても嬉しいことだ。

……ココには、そういう相手がいなかったんだろうか。と。

かみさまと喧嘩したとか言ってたけれど、そのかみさまはどうだったのだろうか。

「でもまあ、慣れ、かな」

「うう、慣れなのか」

ぺたんこ耳が垂れ下がる。

多分、この子は人間と触れ合う機会がほとんどなかったんだろう。人の姿をとれようが、人でない彼女は、人との付き合いの距離がわからない。たぶん圧倒的な経験値不足で。

「でもほら、未咲は普段は顔と感情が一致してるし。ここにいる間にちよつとずつ練習してみたらいいと思うよ。僕も手伝えることは手伝うからさ」

僕はしゃがんで目線を合わせた。

それは、ココの助けになりたいと思ったから？

それもある。でも、違う。本当はもっと別の理由だった。

昔の自分を思い出した、という。

未咲と出会うまで、どうしようもなく無愛想で、人づきあいも苦手だった自分。未咲と仲良くなって、少しずつ自分が生まれ始めたような気がする。

少しずつ、自分を表に出せるようになった。とても嬉しいことだった。

ココにも、その気持ちを知ってほしかった。知らないで生きることの寂しさを怖いと思ったから、自分にできることをしたいと思った。

そしたら、一つの思いが頭に浮かんだ。

僕の探し物。それは自分探しなのかもしれない。そしてそのヒントは、目の前の少女が持っているのかもしれない。

ほふり、とココの頭に手を乗せた。

「あ、あかる」

「うん？」

「がと」

「え？」

よく聞こえなかった。なぜかココの顔は赤くなっていた。

「うっ、なんでもない！」

目を吊り上げ、ふるふる首をふって、一人で行ってしまおう。

そして、無防備なまま階段に足をかけた。

「ぎい。」

戻ってきた。跳ぶように戻ってきた。

「……あ、あかる」

そんなココは、こういうところは上手く口にできなくて。僕も、多分同じだ。今でも、お願いするのは苦手だった。

「ほら、行くよ」

ココに左手を差し出す。

それは優しさなのか、甘さなのか。ふと頭をよぎったけれど、決めるのは自分じゃなくて、周りの人だ。だから、どっちだっていい。僕がするべきは、手を差し伸べるか否かを決めること。その意志だけで十分だ。

「……ん」

ココはおずおずと握り返してきた。触れ合えた小さな右手から、

無意識の温もりが伝わってくる。未咲の温もりと、少し違う温かさ。「つまずかないようにね」

そう言ったら、答えの代わりに、少しだけ力が強くなった。

こういうところは不器用だ。

でも、それでいい。最初は伝えられてるかわからなくても、いつかはわかるようになる。少しずつ、歩み寄っていけばいい。歩み寄ることの大切さを学べればいい。

こうして僕らは出会えたのだから。

僕だけじゃなくて、ココの探し物も見つかりますように　握っ
てくる小さな手のひらに、僕は願った。

壹 きつね色の朝

「……あかるう」

「……」

「……あ、あかるう」

ゆさゆさ揺らされる。まだ眠い。

「寝るなっ」

ゆさゆさゆさ。いい加減寝心地が悪くなって、目を開けた。が、まぶしさにすかさず閉じた。正直なところ、もう少し寝ていたい。

「もお起きろつてば！ 未咲が待ってるんだぞ！」

未咲？ なんで未咲がここに？

疑問が浮かぶ。でも頭がはつきりし始めるにつれ、少しずつ昨日のことを思い出した。

そういえば、未咲の家に泊まってるんだったか。それで、確かもう一人……。

「おおっ起きたっ？」

もう一度目を開く。ぴこぴこ動くきつね耳。ココだった。口元はちよつとだけへの字に折れ曲がってるけど、怒ってるわけじゃないようだ。

「いま何時……？？」

「七時！ 朝ご飯の時間だぞ、ご、は、んっ」

「へえ、ココつてちゃんと時計読めるんだね。えらいえらい」

「ばっそれくらいできるっ！ じゃなくてだな 寝ぼけてないで起きるおっ」

ゆさゆさゆさゆさゆさつ。眠い……。というかちよつと気持ちわるい。

「お、起きないと悪戯するんだからな！」

「やだ」

「ヤダじゃないのっ覚悟おっ」

ふさ。

くしゆくくしゆくしゆ。……なんだか温かいクッションが顔に押しつけられた。

「うあっ……わっわたしのしっぽは枕じゃないってばっ！ あーもーこうなったら最後の手段使っちゃうんだからなっ後悔したって遅いんだぞっ？」

「早いね、もう手がないんだ」

「うるさいだみゃ」

……かんだ？

「うっ あ、あかるが起きないのがわるいんだからなっ」

「だって眠いし」

「うっ~~~~っ」

「うん？ どうしたのココちゃん。……あー、まだ寝てるんだ」

未咲が様子を見に来たらしい。呆れられてるのが気になったけど、寝たふりは継続した。

「みさきい、あかるがぜんっぜん起きないんだ」

「昔っから朝弱かったからねー。仕方がない、最後の手段だ」

「おお！ 最後の手段なのかっ!？」

「ココちゃん。実はね、あーちゃんって中学一年の夏休みに海」

「うわちよつと待って！ 起きる、起きるからってほら起きた」

慌てて身体を起こせば、ココと未咲の視線が注がれていた。少しずつぐったかっただけれど悪くない。カーテンは全開で、窓越しに朝の薄い青空が見えた。

「おお、あかるが起きたぞっ」

「でしょー？ あーちゃんの弱点なんて全部お見通しだからね」

「で？ まだ七時だよ」

髪に手櫛を入れながら目覚まし時計を見やる。せつかくの夏休みにしては早い。それに気温も上がりきってないから、寝苦しいということもない。

「もう七時なの。ご飯できるから着替えて下りてきなよ」

エプロン姿の未咲がそう言い残して、一人、部屋を出ていった。珍しくスカートかと思っただら、キュロットみたいだ。白いカットソーに、青いキュロット。髪はきちんとポニーテールにまとめられてて、そういうところはまめだけど、いまいち女の子っぽくない。

で、もう一人。白ワンピース（未咲のを借りている）に身を包んだココは、じっと座って僕を見ていた。

「……どうかした？」

「うんっ。あかるはお寝坊さんなんだなって思ってたただけだ」

「なんか朝は弱いんだよ。ふぁう……おはよ、ココ」

「うん。おはようだ、あかる。今日もいい天気だぞ。だからあとで遊びに行くの！」

「どこに？」

「ん？……うんとだなっえつとだなっそのだなっ……む、む」

目はきらきらしていたけど、言葉は出てこない。とりあえず、天気がよかつたら外に行きたくなるらしい。

「っそうだ、ご飯を食べてから考えよう！ だから早く着替えるあかるっ」

「ちょ、ちよつと待って！ いやなんでココが脱がすのさっ！？」

「うるさいおとなしく脱がされるお！」

「……で、なんであーちゃんの頭にたんこぶができての？」

テーブルを囲って、いただきますをしたところで、未咲が口を開いた。

「う……」と、犯人であるココが目をそらす。

まあ、おでことか顔じゃなかったしいだろう。たんこぶといっても少しふくらんでる気がしなくもないくらい。ココの某箇所と同じで申し訳程度といった感じだ。

「む、ちよつとあかる。いまとっても失礼なこと考えなかったか？」

野生のカンだろうか、ココがまゆをひそめた。でも、失礼なことを思ってもおあいこだ。

「ココちゃん。おつけものたくさんあるからご飯おかわりしてね」
「ほんとかつ おかわりっ！」

未咲の意図にも気づかず、ココは素直にお茶碗を突き出した。
おかわりをおいしそうに頬張るココに、未咲は満足そうな顔を向けていたが、笑顔はそのままに僕を見た。

「ふふ、あーちゃんてば、大人気ないんだから」

返す言葉がなかった。

「ま、そのほうがあーちゃんっぽくて好きだけどねー」
「……」

やっぱり返事はできなくて、味噌汁を口に含んで誤魔化しておいた。

そしたら未咲も食事に戻った。ココは、たくあん（きつね色）を真っ白ご飯と食べていて、噛むたびにおいしそうなお音がする。

朝だからか、セミはまだ静かだった。窓から見える空は青一色。昼からは暑くなりそうだ。

「むぐむぐ……んぐ。ところで、あかるとみさきはどっいう関係なんだ？」

さっきの僕らの会話が理由か、ココが訊ねた。

「うーん、あーちゃんとあたしは……えっと、将来を誓い合った仲間？」

「ただの幼馴染ね」

「ひどっ」「幼馴染か、仲良しなんだな」

なんだか嬉しそうな顔をしたココに、僕は「まあ、ね」とだけ答ええておいた。

未咲は「ココちゃんも幼馴染になる？」なんて訊いたけど、ココは首を傾げるだけだった。

「ん？ あかるはなんでいるんだっけ？」

「うん？」

「あ、えっと、どうして未咲の家にお泊りしてるんだ？ 家出とか？」

それはココだ。心の中でつつこみを入れた。喧嘩の末の家出。まあ、きつねの家出ならそれほど問題にはならないはずだけど。いや、かみさまか？……まあいい。

「家出でも喧嘩でもなくて、久しぶりに帰ってきただけだよ」「昔この街に住んでいたことと、夏休みを利用して遊びに来たことを手短かに説明した。

「じゃ、じゃあ、あかるは帰っちゃうのか？」

急にしゅんとするココ。耳が力なく垂れてしまう。

「べつにすぐ帰るわけじゃないよ。追い出されない限りは」

「ん？ あたしが追い出すの？ なんで？」

「いやなんでって……。いつまでもいたら困るでしょ」

「ん…………でもココちゃんがついてくるなら問題ないよ！」「にっこり。

そうですか、ココのいない僕一人はそんなにいららない人ですか。

「ココ。未咲が、僕は、いてもいなくても同じだったさ」

「だっただめだぞ！ あかるがいないと夜困るんだからなっ」

「夜？」

怪訝な目が向けられた。

「気にしないでいいよ。寝相みたいなものだから」

「あ、あたし寝相悪くないもんっ」

「そうだぞあかるっわたしだっって別に一人じゃ行けないわけじゃないんだからなっ」

「じゃあ今日は未咲とココと一緒に寝る？」

「……………」

二人が考え始めた。

「ココちゃん、タオルケットの代わりにあたしでもだいじょうぶ？」

「みさき、つつついたら起きてくれる？」

さらに考える。

「……………」

鏡みたいに、同じタイミングでうなずいた。

「あーちゃんっ」「あかるっ」

謎の剣幕で迫ってくる。

「な、なに？」

「なみだを飲んで譲るよっ」「抱き枕にしていから一緒に寝させてくれっ」

「できれば後で抱き心地とかつ」「できればぎゅっとするとかっ」

「ほんとの一生のお願いっ」「ほんとのかみさまのお願いだっ」

……なんだか楽しそうだ。

「まあ、二人が言うならいいけどさ」

「あーちゃんっ」「あかるっ」

二人して抱きついてくる。食事中に行儀の悪い。

それに抱きつくのはいいけど、決定的に不足してるものがある気がする。

「「なあっ!?!?」「」」

奇声を発し、ぱつと離れる。右の未咲も左のココもそろって視線を自身のそこに下げる。

「「ひどいっ」「」」

とまあ、こんな感じでにぎやかに時間は進んでいった。

立ち直ったココがご飯を喉に詰まらせたというお約束もあったそんな朝のことだ。

貳 めくもり色のきもち（1）

朝食の片づけ（僕とココ）と軽い掃除（未咲）を終わらせてから、三人で二階のベランダに洗濯物を干した。

それが終わって、時間は九時。

お昼までは十分に時間があるから、居間の縁側に三人並んで、澄んだ青空を見上げていた。ココは未咲に膝枕してもらいながら寝っ転がって、僕はそんな二人を眺める。気温が上がりきってなくて、空気もどこかすがすがしい。セミの鳴き声がBGMのように耳に届く。

ほのぼのとした平和な時間だった。こんなこととしていいんだろうかと心が訴えてくるけれど、焦ったところで答えは出ないだろう。それにまだ時間だって残っている。第一、この場に持ちこんで空気を壊してしまうほど重要度も高くない。

それに、気になっていることもあった。

「うんっ」

ぴよこん、と僕が向けた視線の先で、ココが起き上がった。

「あかるつみさきっおでかけしようー!!」

「いいよ」

未咲の即答。

僕だって答えようとしなかったわけじゃない。だけど、未咲の返事の速さについ閉口してしまったというか、天邪鬼な気分になってしまったというか。

「あ、あかるは?」

「べつに嫌でもないけどね」

それだけ言って、でも立ち上がらない。さてココはどんな反応を示すか。

すると、にやり、とした笑みが浮かんだ。

「あかるにくすぐりの相が出てるぞ?」

窓辺にもたれていた僕に覆いかぶさってきた。

「こちょこちょこちょっ」

腰のあたりに微妙な感触。

「あ、あれっ」

ダメージを受けないのを見て、抱きつかんばかりにぐいぐいと、くすぐってるのかぎゅうぎゅうしてるのか、わかんないからね…

…

「う……なんでくすぐったくないんだっ卑怯だぞ!」

「残念ながらあーちゃんはそういうのめっちゃめっちゃ強いんだよね…めっちゃつよ的な」

シヨックを受けてるココに、未咲が補足した。ちなみに未咲はめっちゃめっちゃ弱い。めっちゃよわだ。というか、くすぐる前から笑い出す。条件反射らしい。

あと未咲、さりげなくココのしっぽをくすぐるのをやめなさい。

「さて」

まだがんばってるココの両脇に手を入れて、よいしょとどかす。

「うあっ!?!」

ココが抵抗した。

「あ」

ころんと後ろ向きに転がり、縁側下に消えた。

「ああっココちゃんだいじょうぶっ!?!」

慌てて未咲が顔を出した。僕もすぐに覗きこむ。

後ろ回りを失敗したときみたいにお尻が顔の上あたりで止まっていた。ひざとつま先が地面について、両手はばんざい。両足の間から見えたココの目には、涙が浮かんでいた。白雲みたいなワンピースがお腹辺りまでめくれあがって、すべすべしてそうな肌も、形のいいおへそも、青いホットパンツに包まれたおしりのまるみも、丸見えだった。

……ちよつと罪悪感。

「あーちゃん」

いつもより若干低い声が、隣から飛んできた。

「あー、ごめん。ほら」

抱っこするようにして縁側に戻して、背中と髪についた砂を払ってやる。太陽の光の下できらきら見える長い髪を指で梳いていると、ふと思った。

「ココってブラッシ……櫛いれたりしてるの？」

「……なんかいま失礼なこと言おうとしただろ」

ばれてる。ブラッシングはさすがにまずそうだから言い直したというのに。

「いやいや。それで」

「えっとだな」

「うん」

「長いとめんどくさくないか？」

「めんどくさいだろうね」

「ああ、めんどくさいんだ
開き直った。

「昨日の夜はやったよ？」

しつぽを梳いていた未咲が口を開いた。僕がお風呂に入ってる間に、未咲がココにやってやったということだった。

「普段はどうしてるの？」

「えっ？ えっと……だな」

あからさまに顔をそらす。

やってません、といった様子だ。

「……やってくれた」

いや、喧嘩中の誰かさんにやってもらっていたらしい。

「そっか。じゃ、夜にでもやったげるよ」

確認はせず、それだけ言うと、ココのしつぽがぴこんと跳ねた。砂が飛ぶ。しつぽと戯れていた未咲が「あうっ」と鳴いた。

「……（どうせまた汚れるだろうから）帰ってからね」

「ついまたまた失礼なこと思ってたっ！」

「そ、そんなことないよ？」

「嘘だろっいまのは絶対嘘に決まってる！」

懲りずにくすぐり攻撃が始まった。軽くあしらっていると、未咲の声が庭からやってきた。いつの間にか外に出たらしい。

「はい、あーちゃんの靴と……ごめんね、ココちゃんのはあたしのになっちゃうけど」

と、白いスニーカーを示した。

今ココが着てる白のワンピースも、下のホットパンツも未咲のだし、未咲が気にしないならいいだろう。

僕のじゃ大きすぎるから貸せないし。というよりは、ココが小さい。

「ああつまた失礼なことっ」

「……」

「あのさ、そろそろ行かないとお昼になっちゃうよ？」

「そうだね」

ということ、財布と腕時計だけ二階に取りに行った。

縁側に戻ってくると、待ちわびた顔で二人が並んでいた。って、

ちよっと待てよ？

「ねえ未咲」

「うん？ また忘れ物？」

「いや。どうやってここの鍵締めるの？」

玄関から出た未咲。僕らの靴はここ。

「えと……かみさまパワー………？」

「わたしはかわたしなのかつ」

「できるの？」

「できるか……！」

だよ。

というこゝで縁側の掃き出し窓を閉めて、鍵はかけずに出た。さすが田舎。

家を出てから、とりあえず右手方向、駅と神社を結ぶ通りに向かうことにした。ココは地元の子だから、街の案内なんて必要ないくらいに知っているらしい。散歩好きな未咲よりも詳しいのだから。夏空から降ってくる日差しは、朝だというのに、容赦なく襲いかかってくる。その下を歩く物好きが三人。もちろん自分も含まれているのだけど。

残りの二人はといえば。

「おっでかけ、おっでかけー」（ココの行進）

「ふんふふーん」（未咲のコーラス）

とても思ったら大間違いで。

「うっ……暑いぞあかるう！ なんとかしろおっ」（やつあたり）
「地面に近い方が暑いんだよね」（未咲のココに向けた援護射撃）
「んなつ未咲までちっこいって思ってる！？」（味方に背中から撃たれた感じ）

なんて会話が繰り広げられることもなく。

ココも未咲も静かだった。

ココが、みかんアメを頬張っているからだ。とても幸せそうに口の中で転がす。天使みたいにまぶしい笑顔だった。

未咲と僕は、間に挟んだココを眺めていた。正確には、ココのしっぽを見ている。歩みに合わせて、ゆらり。アメが右に転がれば、しっぽも右に。左も同じ。なんとも単純な構造だった。未咲もそれに注目しているから静かになっていた。

「で、どこに行くの？」

十字路が見えたから口を開く。

「ココちゃんは街のこと知ってるんだよね」

「（こくこく）」

ココがうなずくのに合わせて、しっぽも二回、縦にふられた。しっぽにも意志があるみたいに見える。

「川に行ってもいいんだけどね」

「（ふるふるふる）」

左右にすばやく三度ふられた。川はお好みじゃないらしい。

「うーん。じゃあどこに行」

ガリ。

「……………」

突然の音。未咲と顔を見合わせて、示し合わせたようにココを見た。

やってしまったという顔だった。しっぱはしょんぼりと下を向いてしまい、歩みに合わせてふらふら揺れるだけになっていた。

「アメ、かんじゃった？」

「うう、せっかく最後まで舐めようと思ったのに」

「だよねっ。あたしもアメとかチョコは全部舐めようって挑戦するよー！」

「みさきもかっ？」

「うんうん。でも難しいよね。あのじれったさに勝てなくなっちゃうというか」

「みさきはやっぱりわかってる！ そっか、みさきもかー。…………あかるは？」

いやなにその、「どうせわかってくれないだろうけど、この場にいたからとりあえず訊いてみましたよ？」的な訊き方。

「…………とくに気にしない」

「なっ!?! あかるっ、それはアメのかみさまに失礼だぞ？」

アメのかみさま？ なにを言い出すのやら。

「あんな、ご飯粒にかみさまがいるのと一緒に、アメの中にもかみさまがいるんだ」

なめまくりだね。

というより、どっちのかみさまも食べちゃっていいんだろっか。などと考えていけば、十字路に着いてしまった。右か前か左か。

「あかる、あかる。あそこに…………ちよっち行ってみていい？」

小さく言ったココの視線を辿る。右の先には、赤色の鳥居があった。

「神社に行きたいの？」

未咲が訊く。

「というよりココの家じゃないの？」

かみさまなら神社だろう。

けれど、ココは「シツレイな」みたいな顔をした。

「あかる、違うぞ。確かにわたしはあそこに住んでたけど、なんていうか居候みたいな感じだったから……。今のあかるみたいな感じだ」

つまり、今のココみたいな感じらしい。

でも、ココは家出中じゃなかったか。……あれか。家出してみたのはいいけど、様子が気になって仕方がない、というやつ。

案の定、階段の一番上に近づくとつれココはそわそわし始めた。

非常にわかりやすい。

「にしても、なんでこの階段ってこんなにしんどいんだ。かみさまいじめて楽しいのか……」

気を紛らわすためか話題をふってきた。

「ココはいつもどうやって上ってたのさ」

「きつね姿でびゅーん、って」

「というか、かみさまがそんなにいいの？」

「いいの！ だいたいかみさまだって思ってるんなら、もっとかみさまにやさしい場所に造るべきだし。バリアフリーが全然ないじゃないか」

「行きやすいところに造ったら、人がたくさん来て願い聞くの大変じゃない？」

「いいの。どうせ叶えるわけじゃないし、人間なんてかみさまがいてもいなくても知らんぷりで勝手にお願いするんだから」

「へえ……」

微妙に心当たりがある。きつね姿のココが鳥居のところにいるのに、願い事をした自分とか。

「だいたい、気持ちよくお昼寝してるのになら鳴らすとかひどいと思うだろ？」

いや、真昼間なのに仕事してないかみさまもどうかと思う。

「お昼寝じゃないときは？」

未咲が訊くと、ココがいい笑顔で答えた。

「きつね姿で散歩してた！」

かみさまあつ！

「あれ？ お散歩帰りはきつねの姿でここ上るんだよね？」

「そうだけど……。あれはどっちかっていうとわたしの本質に近い姿だから、かみさまパワーがたくさん使えるというか、あんまり疲れないんだ」

いやかみさまパワーできないとか言ってたよね！？

「というか、なんであかるとみさきは疲れてないんだ……？」

ココほんとにしんどそうだった。いつも元気な尾なんてたるーんとして、つけてるだけで重そうだ。しまえばいいのに（できるのか知らないけど）。

「ほら、手」

右手をココに差し出すと、

「……うん」

きゅ、控え目に握り返してきた。それを見て未咲がなにか言いたそうに微笑んだから、視線を向けると、ますます楽しそうに笑った。未咲を見たんじゃなくて、ココを見ようとして未咲の顔を寄り道したということにした。

貳 めくもり色のきもち(2)

「よし、着いたぞっ」

最後の赤色の鳥居をくぐると同時にココが両手を上げた。ちょっと元気になったようだ。

「おおっあれが御手洗ってやつだなずっとやりたいって思ったんだ！」

ぱたぱたと左隅の手水舎に駆けていく。

不安を抱きながら後ろから見ていたけれど、ココは慣れた手つきで清め終えた。

「さすがかみさまだね」

ちよっとだけ尊敬の念をこめて言つと、ふり返ったココのしっぽがくねつと宙を叩いた。

「ちゃんと夜、誰も見てないときに練習したんだっ」

と、お日様のような笑み。

「……夜？」

「うん。だって、昼間だと目に着いちゃうから」

耳としっぽを小さく動かす。なるほど。

「ココちゃん、暗いの強いんだね。あたしじゃ勇気ないよ」

「うんっ。ちゃんとしっぽの先に小さな灯りを点けたからそんなに怖くなかったぞ」

灯り？ ……それは世にいうきつね火ですか？

「一応訊いておくけど、誰か悲鳴を上げたりとかなかった？」

「うん？ そんなことはなかったぞ？ 怒られたことはあった

……けど」

言葉尻が急に小さくなった。

「ココ？」

「よし、次はあっち！」

なんでもないとはいいたげに、狛きつねの向こうを示す。灰色の鳥

居の前で一礼してから、ちょっとだけ緊張した様子でお賽銭箱の前へ。

からんからんからん。

「おおつ鳴ったぞっ」

……。お昼寝してるかみさまがいたらごめんなさい。ココが犯狐です。

「あ、お金がない……。うう、でも世の中お金じゃなくて気持ちだしな。うんうん」

と、かみさまを呼び出し、一方的に願いごとをしてからココは戻ってきた。ちなみに、呼び出されるはずのかみさまは、興奮収まらない様子で鈴の方をちらちらとふり返っている。

誰もいないならもう一回くらい鳴らしてもいいと思うけど。

「願いごとできた？」

「うん！ いっぱいしてきた」

満面の笑顔でうなずいた。満足そうだ。

「それでココちゃんはどんなお願いしたのかな？」

「えへへ、内緒だっ」

いたずらっぽく言って、それから左の方を見て。

「最後はあれ！」

脇にあったごちんまりとした社務所に向かっていった。おみくじでもしたいのだろうか。

未咲と一緒に追いかけると、でもココが残念そうな顔でふり返った。

「いない……」

留守だった。

「うう、職務怠慢だな」

ココには言われたくないだろう。

「あーちゃん。これ押してもいいの？」

そう言って、未咲は僕の返事も待たずに、「マークのボタンを押した。」

ややあつて、社務所の向こうの建物　住居だろうか、そこから巫女服の女性が出てきた。僕らを見つけて、軽く会釈してから歩いてくる。近くから見れば意外と若く、僕らとあまり変わらないように思う。長い黒髪が印象的だった。

「お待たせしました。こんにちは」

少女がぺこりと頭を下げると、つられてココも「こ、こんにちは」と頭を下げた。

ちなみに朝だ。

「ええと、どういったご用件でしょうか？」

「うんと、お守り袋が欲しいんだ」

ココが答えると、巫女少女は人懐こく微笑んで、ちよん、としゃがんだ。目の高さをココに合わせる。

「お守り袋？　お守りじゃなくて？」

「うん。中に入れたいものがあつて、それでできれば袋だけほしい……んだけど」

「容れ物ね。ちょっと待っていてくれる？　探してみるから」

社務所の中にまわる。がさごそと音がして、「ちよつと待っていてくださいね」と声。

数分待てば、

「ありましたありました」

手に薄い黄色のそれを持っていた。袋の口には、とても長い紫の紐。

「はい、ここに入れたいもの、入れてくれる？」

「？　うん」

ワンピースのポケットに手を入れて、なにかを取り出した。

「五円玉？」

「とっても大切な五円玉なんだっ」

誇らしげに言つて、巫女さんの手にある袋にすんと入れる。すると彼女は、きゅつと口を締めて、長いわっかをココの頭に通した。お守りを首から下げる格好だ。長い後ろ髪を丁寧な手つきでわっか

の外へ。

「はい、できました」

なでりなでり。ごく自然にココの頭を撫でた。

「おおっ、ありがとっ」

ぱあ、と顔を輝かせて、お辞儀してから、駆けていった。砂利の上でくるりとまわって、

「あかる、みさき。似合ってるかっ?」

なんて訊いてきた。

「うん」「とっても似合ってるよ」

答えて、未咲はココを追いかけていく。そしたらココはぱたぱたと逃げていった。未咲がさらに追いかける。楽しそうだけど、神社で鬼ごっこすると鬼退治されそうだ。

「えっと、いくらでしょうか?」

そんな二人は無視するとして、僕は財布を取り出した。けれど、彼女は控え目に微笑んで首をふった。

「いいですよ」

と。「でも」「そう言えば、

「だってあの子、きつねの姿をしています」
優しい瞳だった。

「私、夏休みを利用して祖母の実家であるここに手伝いに来たんです」

「えっと?」

「ここ、稲荷でしょう? 祖母が幼い私によく話してくれました。

『ここのかみさまは、ちょっと変わった子だけど、とても素直ない子なんだって。きつねの耳があるけど、そういうことは気にせず、自然なまま接することが大切ですよ』と。あの耳、飾りじゃないですよね?」

さっき頭を撫でてたけどあれって……。

「なんて」

くすりと笑った。

「あの子が本物かなんていうのは関係ないんです。大切なのは、あの子のことをどう思うか、でしょう？」

失礼します、と頭を下げて、彼女は緋袴を揺らして戻っていった。なんていうか、きつねにつままれた気分になった。でも不思議と心が軽い。ふり返れば、うちのきつねは、参道と玉砂利の段差で転んでしまっていた。

ため息を一つ。僕はココのもとへ歩き始めた。そしてこの手を差し伸べるのだろう。

彼女が本物かどうかなんて、そんなことは関係なしに。

お昼ということで、一旦未咲の家に戻る。

ココは少し疲れたようで、縁側にべたーっとなって、ころころしていた。板間が冷たさが気持ちいいみたいで、ときどき身体の位置を変えてはほつぺをすりすりさせていた。それから、何度も胸の位置にあるお守りを手にとって微笑んでいる。

が、僕の視線に気づくと照れたように顔をそらす。

そんなことを繰り返していると、ふとココが呼んだ。

「お昼ごはんはなに？」

「冷やしうどんだったさ」

うどん。漢字にしてしまうと、書くことはもちろん読むことすら危うい白色細長食物。

「うどんかつ」

なぜかその場で、でんぐり返りして近づいてくるココ。ホットパンツのおかげで下着が見えることはなかったけど、おへそは丸見え。「おしとやかにできないココは一本減らすね」

「うっ！？」

つまったココに背を向け、未咲に報告しに行こうとしたら、ジーンズの裾が引つ張られた。

「うっ、ほ、ほら、いい子にしてるだろう……？」

ふり返れば、おすわりポーズなココがいた。いや、なんだか力エ
ルっぽい？ あーでも、神社の駒狐もそんな座り方だった気がしな
くもない。口に油揚げはくわえていないけれど。

「ほら、とつてもいい子だよ？」

……。とりあえず、頭を撫でてみた。

すると、気持ちよさそうに目を細めた。しっぽが跳ねる。

「ほこりがたつたから、さらに二本」

「ううっ！？ ひ、ひどいぞあかる！ いじめだっ動物虐待だっ」

動物だったらしい。まあ、人間も動物だから、かみさまも動物か
もしれない。植物ではないだろう。はずだ。

「なんだか楽しそうだねー。あたしも混ぜてほしいな」

居間に入ってきた未咲が笑った。手にはネギとかが盛られたお皿
を持っている。

「手伝うよ」

ココをその場に捨て置いて、キッチンへ。そこにあった冷やしう
どんが入ったお皿を持つ。どれも同じ量だけ入っていたから、迷う
こともない。

「青色のいい」

きつねさんは青色のお皿を所望した。

「あたしはどつちでもいいよ？」

ということ、赤いのをもらって、未咲のところには白いのを置
いた。

つゆの入ったお椀をおいて準備は終わり。各々席につく。

「よし、食べよう」

「だね」

「……」

主にココが待ちに待っていたお昼ご飯。なのだけど、なぜかココ
は黙りこんでしまった。

「どうかしたの？」

「……これがうどんなのか？」

「コロが訊き返してきた。「そうだよ」と返せば、

「うう、そ、そんなはずはないぞっ？ うどんっていうのはもっとう黄色くておいしそうで味わい深い欠かせないあれがのってるはずなんだ！」

「……にんじん？」

「あれ黄色くない！」

「……じゃあきいろにんじんかな？」

「う……っ」

僕と未咲の連続攻撃にひるんだ。ということでちゃんと話を進めることにする。

「きつね？」

「それ！」

なるほど、きつねの例に漏れず、稲荷が好きらしい。稲荷好きなのは管狐の方かとも思いつながら。

「ないものはないんだから」と、口にしようとしたところで未咲がくすりと笑い、

「じゃーん」

テーブルの下からお皿を取り出した。三角に切られたきつねがたんまり盛りされていた。

「こんなこともあるつかと隠しておいたんだよっ！」

「おおっすごいなみさきっ！……」

「でしょでしょー？」

きつね盛りを掲げる未咲と、しつぽをばたばたさせるコロ。……いやまあ、楽しそうだからいいけどさ。そんなことを思いながら合掌。

「えへへ、あかる」

「うん？」

「ほら、あーん」

「……。あーん」

かまぼこだった。

「いや、ひどいねっ」

思わずつつこんでしまった。

「じゃあ、とっておきのこれを……。うう、あ、あーん」
今後はきつね。普通においしかった。

「ほら、おかえし。あーん」

ということで、きつねを小さな口に放りこんでおいた。両頬を幸せで膨らませながら食べる。一生懸命さがやたらと可愛らしい。

今日のお昼も、この家は平和なままだ。

参 アメ色てるてるぼつず

お昼過ぎ。夏真っ盛り。

本来の暑さを取り戻した空気が、じつとりと身体にのしかかってくる。人間ですら暑いのがから、きつねのココはそれ以上だろう。

いや、まがりなりにもかみさまだから実は暑くないのだとか。

果たしてココは、

「ふきゆう……暑さのばか」

前者の期待を裏切ることなく、死にかけているといった様相。おつきな人型ぬいぐるみが畳の上に転がってる感じた。

ちなみに未咲は、ココのしっぽのところスィカのぬいぐるみを転がして遊んでいた。それがきつねの本能（一応、狩猟動物だし）をかき立てるのが、しっぽが鎌首（？）をもたげる。が、いまいちやる気のない狩りの図だった。猫でさえも少しまともな反応を示しそうだ。

「うつつ……暑いぞあかる」

壁際に腰を下ろして読書にいそしんでいた僕に向かって口をとがらせた。

「僕の名前呼んだって涼しくならないからね」

「うつつ」

恨めしげに見られても困る。

今の僕にできることがあるだろうか。いや、うちわであおぐとかじゃなくて。

「ふんっだ！ アメ食べるからなっ！ あかるにはあげないんだからなっ」

びよこんと起き上がって、よつんばいで僕に顔を向ける。

「いいよ」

「うつつ……あ、あげないんだからなっ？」

「わかったって」

「だ、だからあげないって言ってるじゃないかあつ」

だんだんまゆが下がっていく。口に覗いた八重歯が力ない白さを浮かべた。

「……じゃあ、一個」

「も、もういつかいっ」

「アメ、くれる？」

「あつ　こ、こほん。し、仕方ないな、ほらちゃんと味わって食べるんだぞっ」

「はいはい、わかってるよ」

頭をよしよししてやる。笑顔が咲いた。

「はい、みさきも」

「ふふ、ありがとう、ココちゃん」

未咲がしっぽのつけ根辺りをかきかきすると、にゅっと、転がる。

「あかるう」

足にじゃれついてきた。……ワンプーヌ乱れてるし。かみさまだって身だしなみには気をつけるべきだ。

「ほら乱れちゃってるから」

「ちよっ　ちよっとくすぐりたいぞっ」

「大人しくしなさい」

「うっ……あかるはそういつとこ真面目すぎるぞ」

「あーちゃんはいいい子だからね。女の子には厳しいんだよ」

「それ、褒めてるの？」

「なんだかんだいって最後は甘いけどね」

……そうですか。まあ、わかってることだけだ。

四時。

暑さもだいぶ和らいで、各々好きなように過ごしていた。

ココは鼻歌を歌いながら、テーブルに向かって手元に集中している。アメの包み紙でてるてるぼうずを作っていた。みかん色の頭と

スカート、首のところにも同じ色のリボン。そんな可愛らしい小物が三つ並んでいる。

「器用だね」

「うん、昔から練習してたんだ」

「晴れるといいね」

「そうだな。雨はあんまり好きじゃない」

「晴れるよ」

僕が微笑みかければ、少し驚いたような顔で見つめてきた。手元が完全に止まっている。

「……あかるは優しいな」

にっこり。

もう一度、てるてる三兄弟（姉妹？）に目を移す。

「そういえば」

「うん？」

「どうしたの、あーちゃん」

「ココってすごいかみさまってわけじゃないんだよね？」

「なっわたしはすごいかみさまだぞっ？」

両手と耳、しっぽを突き上げて、憤慨した。ただ怖さは微塵もなく、むしろ可愛い。

「じゃなくて。天照大神とか全国的に知られてるみたいなのは違っ……」

「ローカルかみさまかってことか？」

「そうそれ」

ローカルかみさまなんて呼称あるのか知らないけど。要はニュアンスだ。

「土着神というか土地神様というか氏神というか、そういうあれだね」

未咲がフオローを入れてくれる。あってるのかは判断できないけど、それっぽいニュアンス。

「ココは地元だけのかみさまなの？」

「うん。地元……わたしはこの辺りだけだけど」

「この街ってこと？」

「それくらい。えっと、かみさまって実はもう一人いて、そっちの子が元々いた……というかわたしより偉い立場だから。あっちは山で囲まれてるくらいの範囲で、わたしはちょっとだけだな」

「かみさま見習いみたいな感じかな」

「ちょ、ちょっと気になるけどそんな感じた。あと？」

「見習いだけど、あかるたちよりもずっとずっとたくさん生きてるんだからなっ」

「……」

「な、なんだその顔は疑ってるのかっ？」

「そんなつもりはないけど。そう見えるのならココに心当たりがあるんじゃないの？」

「そ、そんなことはないぞ？」

「うん、断じてない」言えは言うほどに信憑性がなくなっていることにも気づかない。べつに何歳だって気にしないんだけど。

「ココちゃんが何歳だろうと関係ない！ あたしたちはずっとココちゃんと一緒だよっ」

「っ みさきいっ！……」

「ココちゃんっ」

抱き合う二人。

「「暑い……」」

当然の結果だった。

「で、ココってきつねのかみさまなんだよね？」

「ううん」

「そっか。って、今否定した？」

「したぞ。わたしはきつねっばい姿だけどきつねのかみさまじゃないもん」

なにそれまぎらわしい。

「でもでも、ご飯粒の中の人だつて全部が全部ご飯のかみさまつてわけじゃないだろ？」

「そりゃそうかもしれないけど」

「いいじゃない、あーちゃん」

と、未咲。悟りを開いたような笑顔だ。器が大きい、素直に感心した。

「きつね耳のココちゃんめっちゃかわいいもんっ！」

「みさきっ」

「ココちゃんっ」

で、だ。

「じゃあ、ヒント。この街は田舎……あ、えつと発展してないといつか」

「いや、田舎でいいよ」

間違つてないし。むしろそこはさらつと流すべきところだ。

「田舎だから、農作物多いだろ？ 田んぼもあるし。……昔と比べたら減つたらしいけど」

そりゃまあ減りもするだろう。

「ということは、農業にとって重要な位置を占めるものがかみさまとして崇められるようになったわけだ」

「天気とか土とか？」

「おいしいね」

そう相づちを打つたのは未咲だった。

「あれ、未咲は知ってるの？」

「田舎者だから地域信仰くらい知ってるんじゃない？ あーちゃんもおじいちゃんと一緒に住んでたんだから聞いたことくらいあると思っよ」

と、言われてもだ。

神社なんて七五三と初詣と受験のときにしか行った記憶がない。

ワンピースに半ズボンで神社まで散歩する方が珍しいんじゃないだろうか。

でも……、と。

言われてみれば、そんな話を聞かされたことがあるようにも思う。
確か、

「雨」

だったか。

「ほら、やつぱり覚えてる」

「さすがだな、あかる」

「……。あれ、でもさ」

と、思い出しついでに訊いてみた。

「僕の記憶だと、ここのかみさまには角があつたんじゃなかった？
で、昔々に村の子供に指摘されて、傷ついたかみさまの涙が雨に
なつて洪水になつたとか」

「それから村の人が謝りに行つて、かみさまは村人の願い　とい
うかこのままじゃ農作物がだめになつてしまふからつてのもあつた
んだっけ、とにかく最後は許したんだよね」

「そしたら、空はたちまち晴れ渡つて、きれいな虹がかかつて。っ
ていうのはなんとなく覚えてる気がする」

そんな話を聞いたはずだ。

「ちなみに調べてみたら意外なことに」

「なに？」

「その後、かみさまは三角のきつね耳を生やして村に遊びに行くよ
うになつたらしいよ」

「……。なんでまたきつね？」

「き、きつねをばかにするなっ」
怒られた。

「べつにきつねは悪くないよ。どこからきつねが出てきたのかつて
話」

「うーん、それは調べたけどわかんなかった。でも稲荷神社だから
きつねなんじゃないかって」

「それ絶対おかしいよね」

「……？ なんでおかしいんだ、あかる。稲荷だからきつねなんじやないのか」

「いやだって、きつねだから稲荷神社になるんであって、そのかみさまが耳を生やす前は稲荷神社じゃないでしょ？」

「……そうなのか？ みさき」

「よくわかんないね」

「そうだな」

それでいいのか。というかココはそれでいいのか？

「まあいいや。きつね耳になってどうなったの？」

「子供たちに怖いって言われなくなって、仲良しになっただって」

「おお、めでたしだな」

「うん」

めでたしめでたし。

「で、なんの話してたんだけ」

未咲が首を傾げる。まねっこココも傾げた。

二人ともが僕に顔を向けた。ココだけ可愛いと言っておこう。いや、未咲も十分に可愛いんだけど。身内（幼馴染）ゆえの厳しい評価基準ということだ。

「だから、ココがなんのかみさまかって話でしょ」

「そういえば」

「そんな話だったかもしれないな」

「……で？」

「うん。雨降らして晴れにして虹架けたから、雨のかみさまだよな」

「うん！ みさきの言うとおりだ。基本的に雨のかみさまだな」

「なんで雨って限定してるの？」

「ん。だってほら、雨が降ってなかったら晴れだろ？」

曇りはどうした……。

「じゃあ、晴れたらいいなって思ったたら晴れだ」

「……適当だね」

「そんなことないぞ？ ちゃんと晴れてほしかったら儀式するんだ」

「からな」

「儀式？」

「そつだ」

胸を張るココ。なんだかそこにはかみさま的威厳が漂っているよ
うな気がした。

「こんな感じだっ」

アメの包みのてるてるぼうず。

下駄占い（表なら晴れ。じゃあ横は？）並に怪しい儀式だった。

あと、それから。

「言っておくけど、わたしはその角生えたかみさまじゃないからな」と。ココはつけたした。苦い顔で。

「あんまり、角のことは言わない方がいい」

悪く言うことに耐えられない、とそんな物言いだった。きっとココも苦労したんだろう、ねぎらいの言葉は心の中だけでつぶやいて、黙ってココの髪に手を伸ばした。

肆 小さな七色流れ星(1)

夕方になった。

「ということでお買い物に行こう！」

「おお！ わたしもっ」

相変わらず脈絡もなんにもない唐突な滑り出し。いや、夕方だからというそれ以上でもそれ以下でもない理由はあるのか。……なんにせよ、三人で出かけることになった。

「どこ行くの？」

「うん？ アマリだよ」

アマリというのはスーパーマーケットのこと。昔からあったけど、まだ現役のようだ。

「えっと、どっちに行けばいいんだ？」

「東。川の向こう」

「おお、じゃあこっちだなっ」

家を出て左手に進む。駅から見ると右手側だ。つきあたったところにある天里川を超えれば、役場や消防署、スーパーなどが固まった地区に入る。

「ココちゃんはおうちにはあんまり行かないの？」

ふと、未咲が訊いた。確かに、この街に住んでいてスーパーの場所を知らないというのはまずない話だ。それくらい店の少ない田舎なわけ。

「あつちは車が多いから一人で行くなんて言われてる」

少しだけさみしげな感情がにじんでいた。

確かにきつねが散歩するには少し危ないかもしれない。住宅街は車もほとんど来ないけど、あつち側には二車線の県道が南北に走ってるから、車通りも多い。もっと東に行けば工場とかもある。

「今日は三人だからだいじょうぶだね」

未咲の言葉に、しっぽがぴんと立った。ワンピースの裾が上がっ

て、ホットパンツに包まれた曲線が露わになる。

「……。ほら、手」

「うん？ 握ってほしいのか？」

「飛び出しそうだからね」

「わたしが？」

「未咲も飛び出しそうで怖いけどさ」

「じゃああかるは真ん中だな！」

「でもそれじゃココちゃんと手がつなげないよ？」

「あつ……。そ、そうか。みさきい」

「うーん。あーちゃんが」

「身体が半分に分れたりしないからね」

う……。とココみたいに言葉に詰まる未咲。というかあやうく想像しかけたじゃないか。気持ちわるい。

「仕方がない。今日はココちゃんに譲るよ！」

「ほっほんとか、みさきっ」

大げさに喜んで、僕の左手を握ってくる。もう何度も触れた、小さな手だ。未咲に上手く乗せられたことにも気づいていない風なのは……。まあいい。

まあいいが、……。前に伸びる自身の影を踏もつとするは、できればやめてほしかった。

天里川は土手を抱えた天井川になっている。川の水面が周囲の土地より高いため、土手もそれなりの高さになっている。川幅五メートルほどで、浅く、また水がきれいなこともあって、土手の砂道はの散歩者や水遊びによく使われる。

また、北の上流側にある高校への通学路としても機能している。

さつき、遊び帰りらしい小学生くらいの子たちとすれ違い、ココに視線が集中した。耳とかしっぱを見ただろうけど、夕方の見間違いだっただなんて形で落ちつくんじゃないだろうか。たとえ田舎とい

え、神社の女の子みたいなケースは稀なはずだ。

「みさき、あれかつ？」

「そうだよ。あれがスーパー」

「……ちよつとまぶしいな」

なんて当の本人は、ガラスから漏れてくる光を避けるように左手をかざしていた。と、今になってふと思ったこと。

「耳としっぽはいいの？」

さっきの子供はまだしも、スーパーに行けば少なからず人の目に晒される。

「だ、だめなのか？」

シヨックを受けた顔。

「いや、だめじゃないけどさ。普通はないよね？」

「でもあーちゃんが連れてるんだし」

ちよつと待て。それはなに？ 僕に全責任を押しつけよう、と？
つまり……。

年下の女の子を自分好みに改悪して表を連れまわしている高校生の凶。しかも、近所のスーパー。もしかしなくても、僕を覚えているおばさんたちに出会う。

「未咲、帰っていい？」

「か、帰っちゃうのか？」

言ったのは、ココの真似をした未咲だ。そこでボケはいらない。

「この年で変質者には、なりたくないんだけど」

「あかる。元気出して？」

なにもわからずに慰めてくれる元凶。というか帽子をかぶせる的な選択肢はなかったのか？

「あー、野球帽とかかぶってるのって可愛いよね」

「いや、知らないけど。普通に麦わら帽子とかさ。」

「ココは耳としっぽ、しまえないの？」

「あかるは耳しまえるのか？」

「……やっぱり？」

「いやー困ったね、あーちゃん」

ほんとに困ったよ！

そしたら未咲が、

「でもあーちゃんは田舎クオリティを甘く見過ぎだよ？」

と、無駄に頼もしい笑顔を浮かべてくれた。かみさまパワーみたいな和洋混淆単語はマツクス怪しさだ。

「なんとかならないのか？」

「ココが大人しくしてくれれば……なんとかなるかもしれないかもないかも」

「ほ、ほんとか？ それであかるが喜ぶんならたくさん大人しくするぞっ？」

真摯なココの目。それを信じることにした。

のこ。

「あかるあかるっ」

……。いや、どうせこうなるってわかってたけどさ。

「で、なに？」

「いなりが落ちてる！」

「置いてあるの。陳列。売り物だから食べたらだめだよ」

「そ、それくらい知ってるぞ？」

「でもココちゃん。それおすし用のだよ？」

「そ……それくらいわかってるんだからな？」

「じゃあ、賢いココちゃんのために、お豆腐を買っちゃおう！」

いなりは豆腐を揚げたもの。そう言えば、きつねが好きな油揚げつてもとはネズミ油揚げなんだっけ。どうやったら、そういう料理を口にする機会があるのかわかないけど。

「じゃあ、あーちゃんお願いね」

と、僕が持つてるカゴに揚げ出し豆腐をいれた。チンして作れる簡単メニューだ。

ちなみに僕がカゴ役なのは、じゃんけんに負けたからだ。より正

確には、僕は勝ったけどココが負けたから。それ以上でもそれ以下でもなく。

未咲の家に泊めてもらう条件だった、買い物荷物持ちなんてのは、ココの乱入で忘れ去られていた。

お菓子売り場に行けば、あれもおいしそうだこれもおいしそうだと、あっちこっち、ふらふら落ち着かないココ。どう見ても子供だ。「おねえちゃん、こっちもおいしいよお？」

なんて年下の子に勧められる姿は、もうなんていうか。

そして、周囲のお母さん方の微笑ましい視線。とつても田舎クオリティでした。（未咲は買い忘れとか言って逃げた。絶対逃げた）で、結局買ったのは、みかんやぶどうのアメの詰め合わせ。

そしてやつとのこととで、少なくとも顔見知りのおばさん方（同級生の親。田舎コミュニティこわい）から声をかけられつつも、レジに辿り着いた。

「……………」
と思ったら、ココが動かなくなった。視線がレジ横の棚に注がれていた。

「花火やりたいの？」

「う……………」

いやいやするように首をふる彼女。

「やりたいのなら買ってもいいよ」

「で、でも別にどうしてもやりたいってわけじゃなくってだな、いやあつたらとつてもめちゃくちや楽しそうだしきれいそうであれしいけど、だからって買うかどうかって言われても……………」

ということとで、視線の先にあった花火セットをカゴに入れる。

「あ、あかる？」

「今日だけだからね」

そのやりとりを見ていたらしいレジのパートさんが、花火にシールをつけてココに持たせてあげたのは、微笑ましい限りだ。
が。

「はじめてのお買い物、おつかれさま」

途中から姿が見えなくなった未咲が店先で待っていた。

「みさきっ。あかるがこれ買ってくれたんだっ」

「そっかあよかったね」

「うん！」

相変わらず楽しい性格している未咲だった。

肆 小さな七色流れ星(2)

……ココの短い人生が終わった。

肉じゃがに入っていたにんじんによって。

「に、にんじんはだめなんだ」

まあ例によつて、「ココはいい子だもんね」で完食させたけど。

そして、食後はスイカだった。ココも復活。二度目の「いただきます」を言つてから、三角形の先っぽを咀嚼。

が、すぐにきらきらした目が固まった。

「? どうかした?」

「……このスイカ、種がある」

顔をしかめていくつか種を吐き出す。未咲が用意したスプーンを手にして、黒いのを一個一個取り出し始めた。掘る動作の度に、金色耳がぴこぴこ動く。でも本人は全く気づく様子もなく。

結果、微妙に穴空きになった赤三角が残った。満足したらしい。耳をぴんと立てたまま、かぶり、しゃく、と頬張った。

「おいしい?」

「うん。とつてもおいしい!」

「あー、ほら口元」

台拭きでごめんだけど、と拭つてやる。

「ココは種食べないんだね」

「あかるは食べるのか?」

ココが自分の人差し指をぺろりと舐めた。

「まあ」

「……あかる。種を食べないのが子供っぽいとかそんなの思つてないか?」

「まあ」

思つてなくもない。でもまあ食べててつかえることも否定はない。

「みさきい。あかるがあんなこと言ってるぞ?」

「うん? ごめん、ちょっと忙しい」

「ほら! 未咲もやってるぞ!」

どうだ見てみる、と言わんばかりにココが言った。だから、僕は訊ねた。

「……ココ。未咲が子供っぽくないように見える?」

果たしてかみさまは即答できなかった。

「お皿洗いならまかせろっ」

花火を控えて絶好調なココの姿が……いや、喜んでいるしなにも言わないことにする。楽しみながらやることは悪くない。

さて、お待ちかね。バケツを準備して、前庭に出た。

前庭というのは、居間のすぐ外、縁側のところだ。例によって、ココは縁側から飛び出した。裸足だったから未咲に注意されてたけ
じ。

セットに付属していたろうそくを地面に立てて、火を灯す。

「……? ココ、どうしたの?」

ココがじいと見てきた。目元に小さく浮かんだ涙。

「あかない……」

「……」

受け取って開けてから返す。

「ほら。暗いから落とさないようにね」

一応注意すると、素直にうなずいた。それから、開いた方を僕に差し出してくる。

「あかるが買ってくれたから、あかるが一番最初だ」

「……。うん」

一本、取りやすかったものを取る。未咲も同じように選んで、最後にココが手に取った。

そわそわしたココに、とりあえず首から下げたお守りを、服の中に入れるよう注意しておく。

「よおし。じゃあ、せーの、にしよう」

未咲が言って、三人でろうそくの灯りに花火を向ける。

「せーのっ」

えい、と火に先っぽを入れる。

皆が黙りこむ。一瞬の静寂。

そして。

夜空の下に光があふれた。赤、橙、黄、緑　色とりどりの線が夜の冷たい地面に降り注ぐ。シューウ、パチパチパチ、と音に合わせて影が揺れる。

懐かしい匂いだ。

僕の顔がほころんだからか、ココと未咲が顔を見合わせてくすりと笑った。

そんな時間は驚くほどに、光の速さくらいで過ぎていった。

「あかる、なくなったぞ？」

ココが袋をふってみせる。

「そんなことないよ。ほら」

下に溜まっていた線香花火を取り出す。けれど、ココは初めてらしく、ひらひらした方を下にした。

「逆だよ？　ココちゃん、こっち向き」

「こっち向きなのか？　……変なやつだな。それになんかちっこいし」

「でもとつてもきれいなんだよ？」

「そうだね。とりあえず、やってみたら？」

線香花火こそが花火だと言う人がいるくらいだし。なんか落ちつくし。

ココは小さくうなずいて、身を引きながら花火の先っぽを火に近づけて、

「おおー！」

小さな火が散り始める。パチ、パチ……。薄い桜色の花が咲いた。「……なんだこんなものか」そう言いたげな視線でココがじいに見つめていた。

しん。一瞬の間。

「終わったか」とココが息をついた。

パチ、

「！？」

「あ……」

突然闇に走った光に驚いて腕を引く。しっぽと耳がぴくりと跳ねあがって。先にたまっていった小さなオレンジ色が、ぽとりと落ちた。地面の闇に溶けて消える。

「むむ……こいつ小さいくせになかなかがんばるな」
「気にいったらしい。」

ぱたぱたとしっぽをふって、僕らにも手渡してくる。

「あかる、勝負だ！」

ということ、どっちが長く咲かせていられるかを競うことになった。しゃがんで、同じタイミングで火を灯す。

ぱちぱちぱち。

最初は控え目に。一瞬の間を乗り越えて、少し強く光が散り始める。小さな珠を中心に闇の中に光が現れる。ココも一瞬ぴくりとしたものの、今度は耐えた。

けれど時間が経つにつれて、しっぽがゆらゆら。落ちつかないに揺れ始めた。じっとしているのが苦手らしい。

「うう、あかる」

呼ばれる。けれど答えない。勝負の世界は非情なのだと教えないといけないからだ。

やがて、二つの珠が地面に吸いこまれていった。ほぼ同時だった。「もう少しだったのに」

「まあ、まだあるしね。でも今度は、花火を楽しんでみたら？」

「……。うん！ そうだな」

小さくうなずいた。

そんな中、

「……あれ？ 二人とも、終わっちゃってる」

と、未だ持ち続けている未咲。

ココが彼女と競争しなかったのは賢明な判断だった。僕も当然、誘わなかった。

なぜか未咲はこういう我慢ごとにとても強かったからだ。女の子っぽい(?)意外な一面。そういうところも含めて未咲は未咲なのだから、なにかが変わるといってもないのだけ。

そう思ったら、自分も同じように思われているのかもしれない、と。

『えー。でもあーちゃんはあるーちゃんって感じだし、今だってやっぱりずっとともあーちゃんだから、あーちゃんはあるーちゃんじゃないと、じゃない?』

僕のことをあーちゃんと呼ぶ理由。彼女の目から見ても、僕はちっとも変わっていないようだ。僕は あっちに引っ越して変わってしまった、そう思って帰って来たというのに。そんな簡単には変わらない、変わらないのか。

「どうしたの?」

「あかる?」

未咲とココが僕に顔を向けていた。

なんでもない そう答えようとして。

「ちよつと、考えごとをね」

正直に答えてしまった。二人そろって怪訝な顔を向けてくる。

なんとというか失礼だな。

「あかるも悩んでるのか?」

僕も。そう、ココも悩んでいる風だった。それが喧嘩に関係しているのかはわからないけど、きっと、真剣に悩んでいる。未咲も、言わないだけで悩んでいるのかも知れなかった。

「なあ、みさき」

「だめだめ。あたしは答えられないよ」
そう笑った。

「あたしは、悩んでる二人にあつたかい寢床とおいしいご飯を作る
しかできないから。といつても、少しくらいなら聞けるかもしれない
いけどさ。まずは焦らずに歩み寄ってみたらいいんじゃないかな？」
なんて。全部見透かしたように言うのだから。いたずらっぽい笑
みは、最近使つてこない「ね？」と同じくらいの力を持っているよ
うに感じられて。僕もココも、素直にうなずいただけだった。

歩み寄る　僕らが探している答えは、そこにあるような気がし
た。昨夜も感じたこと。

それは紛れもない、予感だった。

そしてその予感が、雨雲のように僕らののしかかってくることを、
このときの僕らは誰ひとりとして気づいていなかった。

壹 雨降りの記憶と今

雨。

夏のそれは、冬の雨ほど冷たいものじゃないけれど、寒いものだ。冬の雨が突きささるような寒さなら、夏の雨は浸み入るような寒さ。濡れたところからじわじわと体温が奪われていくような。

さあさあと降りしきる細い線を、部屋の窓から上下逆さまに眺めていた。

未だ布団の上で仰向け。まだ七時になっていなくて、ココも起こしに来ていない。

耳を澄ませば、下の階から楽しげな声が聞こえる。歩み寄ってみればいいんじゃないかな。昨夜の未咲の言葉が蘇った。歩み寄るの主語はだれか？　ココだけじゃ、ない。そんなことわかっていた。

子供みたいな反抗心がわき上がって、タオルケットを頭までかぶる。外の音が遮断された。

……夏の雨には、一つだけ思い出がある。

誰かと二人で、どこかの建物の下で、雨宿りをしていたという思い出だ。

思い出というには曖昧すぎる。多分、小学生くらいだろう。遊びに行ったときに突然の雨に見舞われて、近くにあった屋根に飛びこんだ。屋根がすぐ高かった気がするのは、自分が低かったからだろうか。そんなに高い位置に屋根がある建物なんて、この街にはほとんどないはずだから。それこそ、神社くらいのものだ。……神社？　ぼんやりとした風景が頭の中に蘇り始めて、

「あかるあかるあかる　　あーさーだ、ぞっ！」

タオルケットと一緒にはぎ取られてしまった。

「あ、起きてる………のか？」

「起きてるよ」

「……怪しいな」

いや別に怪しくなんてない。なんで僕が寝たふりなんてする必要がある？

「だって昨日も」

「あれは寝てただけ」

「寝てたのかつ」

「起きてたけど……」

「どっちっ」

うーん。

「ココが起こしてくれるのがつい嬉しくて、ちょっと寝たふりをしてしまっただけ？」

「えっ」

ぴくりと跳ねる耳しっぽ。そして笑顔。どうやら言葉の選択を失敗したらしい。

「今日もわたしが着替えさせてやるっ」

そしてココは襲いかかってきた。

もちろん抵抗した。

二日続けて同じ失敗を繰り返すようなことはない。断じてない。

……はずだったのに。

「……今日も朝から楽しそうだったね」

居間のテーブルに食器を運ぶ未咲に開口一番で言われた。未咲の目には、同じ動作で後頭部をさする僕とココが映っていることだろう。

明日こそはココに起こされる前に起きよう。寝起きの頭でぼんやりと思った。

それでももって、朝食後。

「おおっあかる！ この掃除機わたしの後ろにくっついてくるぞっ？
なんだか可愛いやつだなあっこいつ」

雨にも負けず、かみさまは元気だ。

その後。

丸くなってお昼寝中のココの顔をくすぐる長い髪をのけたり、約束だったブラッシング改め毛づくろいをするために二人で昼シャワーを浴びたり、ドライヤーで髪を乾かすとほわんとした目になるココに癒されたり、自分のしっぽがうまく拭けないのを見て和んだり、髪としっぽをくしけずると気持ちよさそうに目を細めるココをちょっといじめたりしていたら、

あつ、という間に夕方になった。

雨の止み間を見て、買い物へ行く。

ココと手をつなぐ未咲。飛び出すな、飛び出すな、飛び出すな、と重ねて念押しもした。

オレンジの夕焼けを一身に浴びるココ。前面に実用性皆無な飾り木製ボタンが並んだ若葉色のワンピース姿。お守りが胸のあたりで揺れている。髪は一部をリボンで左右に分けたツーサイドアップとかいうやつになっていた。これも捨てがたいが、下ろし髪の方が好きかもしれない。

未咲は、セーラー服みたいな半袖に半ズボン姿で、ポニーテールをびこぴこ跳ねさせていた。

「ココちゃん、ひっぱってくれるのはいいけど、道覚えてるの？」

今日も元気なココが先頭だった。未咲は手をつないで、ついていだけで。僕にいたっては、後ろから眺めるだけだ。

「あつたりまえだ。昨日行ったところと一緒にだろ？」

ふり返った頬が膨らんでいた。夕日が丸いそれに色をつけると、赤色の風船が頭に浮かんだ。

「ココって道とか覚えるの得意なんだ」

意外な一面もあるものだと、ちよつと関心した。僕も方向音痴というわけじゃないけれど、一度行っただけだとわずかに不安が残る。未咲はまあ、ノリだ。

「うん。だって匂いで覚えたもん！」

ココが、えっへんと胸を張った。

「……いぬ？」

「きつねだっ！」

未咲の手を離して、両手を空に突き出す。同時に耳としっぽも天を衝いた。

「いや、匂いって言うから」

「きつねだって動物なんだから匂いくらいわかるものなの!!」

「……それって、僕とか未咲のもわかるの？」

「うん！ もちろんだ」

至極当然といった風にうなずく。

「冗談とかじゃなくて？」

「なんで嘘つかないといけないんだ。あかるじゃあるまいし」

それを言われると苦しい。

「ココちゃん」

と、未咲がしょうがないなもう、の顔で言った。

「あーちゃんはひねくれてるから嘘ついちゃうだけなんだよ」

「……？ そうなのか？」

「うん。不器用でぶつきらぼつでそのくせ下手くそに優しくったりするからよく勘違いされるし、親しい人に対してだと、案外いじわるというかとつてもいじわるなところがあつたりするからさ。だから、あーちゃんはあーちゃんなのです！」

「なるほどっ！」

満面の笑みで納得するかみさま。結論がよくわからないけど、それでいいのだろうか。

「って、あれ？」

未咲が、人差し指を口元にあて小さく首を傾げた。

「あーちゃんって、あたしのことどれくらい好きなの？」

「……。……。……。はい？ なに？ 藪から棒に。」

「あ、ううん。ちょっと気になっただけ。ごめん、忘れてくれてい

いよ」

なんて、未咲は言ったのだけど。即答できなかった僕をまっすぐに捕える瞳があった。ココだ。夕日の残り日を灯したそれが、強い光で僕を見つめてきた。

「あかるはみさきのが好きじゃないのか？」

「はい？」

「だ、だって、好きだったらすぐに答えられるだろ？」

「いや、でもさ。ココだって即答できないんじゃないかな？」

「そんなことないぞっ？」

自信満々に言い切った。どれどれ。

「たまご焼き」

「っ！」「（嬉しそうな顔）

「……いなり」

「つつ！」「（目がきらきら）

「にんじん」

「う……」（世界の終わり）

即答はなかった。というか顔に出過ぎだ。素直すぎる……。

「あれ？」

と、ココが人差し指をほっぺに当てて、小首を傾げた。目玉がくりくり。

「即答できないっていうのは、あかるがそのとっても不器用でとてつもなくぶっきらぼうでめっちゃくちゃ下手くそに勘違いするからで、結局いじわるというかそんなので即答しただけなのか？」

あの……なんか副詞が増えたり、唯一の褒め（？）ポイントが削られたりしてるんだけど。あと、結局の前後に関連がない。

でも、勝手に改造した本人、ココはどこ吹く風で、

「あかるは素直じゃないんだな。だから、好きだって言えないんだ」
なんて、自分なりの結論を口にしていた。

「ココちゃん」

未咲が、うんうんとうなずいているココの肩に手を置いた。

「素直じゃないところが可愛いんだよっ！」
「フォローになってません。」

そんな騒がしい空気を伴いながら、スーパーアマリへ。余りではない。

「ということで本日はおすしです」

いつものごとく脈絡もない言葉に、慣れた僕も、適応したココもスルーだった。

「なんだけど、あーちゃん。おすしってなに食べればいいのか？」

「おにぎりでも食べとけば？」

一貫ごとにビニル包装されたお寿司を、透明パックに詰めるタイプの売り場。その前でしようもない会話を繰り返す少女たち。しかも一匹はどうみても人外。

「ココちゃんも欲しいのをこれに詰めていいよ？」

「おお！」

「食べられるだけ入れるんだよ？」

「う……それくらいわかってるっ」

とは言うものの、ココの類はおすしを前にして緩みきっている。そこはかとなく不安だ。

「おすしー」

などとおすしの歌(?)を口ずさみながら選定する未咲。こっちもこっちで不安だった。

「あかる、こんなのでいい？」

ココが手の中のパックを見せてきた。

いなり、たまご、たまご、いなり、いなり、いなり、甘えび、いなり。

黄色と白ときつね色、かるうじて桜色ひとつ。というか魚はどこ行った。日本人の特筆すべき食文化の一つである刺身はどこへ行きなされた。きつとココは、回転ずしだとデザートだけでお腹がいっ

ばいになるタイプだ。

「あれ？」

ココの後ろから未咲が覗きこんで、首を傾げる。

「どうかした？」

訊いてあげた。

未咲のパックも、たまごといなりが占有していた。

「……いただきます」「」

いなりを食べるココ。いなりを食べる未咲。テーブルの真ん中には巻きずし。僕だけ魚。少数派はいつだって異端扱いだ。

「どうしたんだ、あかる？ これはあげないぞ。ぼーっとして」

「落ちて着ころう？」

「わ、わたしは落ちついてるぞっ？ あと、これはあげないからなっ」

「じゃあそのしっぱは？」

座布団の上にきちんと正座したココ。しっぱはさっきからずっと畳の上を掃き続けている。

「こ、これはあげられないからなっ。わたしの自慢のしっぱなんだからな！」

「というかあーちゃん、おすしにお醤油使うんだね」

「普通は使うと思うよ」

「そんなことないよ。使っちゃったら本来の味がわかんないし」

「だまれいなり」

「あっっ」「うっ……」

面倒だから同時攻撃しておいた。

「うっ、つまりあかるはいなりずしを馬鹿にしてるってことだな」

「いや、誰もしてないから」

「あかる、おすしというのは和が作り出した、すばらしい伝統料理なんだぞ？」

訊いてもいないのに語り出した。とりあえずそれはお刺身文化に
対しても使ってほしい。

「つまり、ただおすしを食べるだけじゃなくて、ちゃんと温かいお
茶をだな あつつ」

「……だいじょうぶ？」

「あひゆい」

べっと、ココが舌を出した。ほんとに熱かったらしく、うっすら
と涙が浮かんでいる。きつねは猫舌かどうかは知らないけど、あま
り強そうには見えない。ちなみに未咲は猫舌だ。

「あつつ」

言ってる傍から。そんなお互い見合って、笑い出す二人。似た者
同士で波長が合ってて。今さらながらにちょっとうらやましくなっ
てみたり。

「んん、あーちゃんから嫉妬の気配が」

「そ、そんなことないよ？」

「嘘だね」「嘘だね」

「全くもう、仲がいいのはいいことなんだから」

未咲の見透かしたような物言いに言葉が返せない。だから誤魔化
すためにお茶を飲んだ。

「熱っ」

……。

その後は未咲がお茶を零して慌てたり、ココが巻きずしのたまご
を自分のお皿に集めてから最後に食べたり、結局あーんされたり、
しかえしたり。

なにも変わることもなく、滞りもなく、時間は流れていった。

貳 雨の中、三人の

夜。再び雨が降り始めた。

天気予報では夜の間に大降りになると言っていた。気温も下がるらしい。寝相が危うい未咲とお腹を出して寝そうなココ。予備軍に二匹も心当たりがあった。後で注意しておこう。

着替えて洗面所兼脱衣所を出ると、廊下でココが待っていた。畳まれた着替えをぎゅっと抱いて僕を見上げてくる。

「どうしたの？」

「あかると入りたい」

「……。昼に一緒に入ったよね？」

「あ、あれはシャワーだけだった。わたしは一緒にお湯に浸かりたいのっ」

と言われても。今入ったばかりだ。お風呂は好きな方とはいえ、二度風呂したい気分でもない。ココには悪いけれど今日は諦めてもらおう。

「明日ならいいよ」

「……約束か？」

なぜか赤らめた頬を着替えて隠しながらつぶやいた。

「うん、約束だよ。ほら」

小指を差し出す。するとココが嬉しそうに、指をからめてきて。

少しだけ心が温かくなる笑みを交わし合った。

「今日は寒いかもしれないから」

そう言って、未咲は掛け布団を用意してくれた。

ココと少し間を開けて（主にココが転がるからだ）置いた布団に横になる。ココの返事を待ってから電気を消すと、真っ暗に。目が慣れていなくて、ココの存在はおぼろげに感じるけれど、ほとんど見えない。

その代わりに、聴覚が今まで以上に冴え始めてきた。ざあざあと、強い雨音が頭の中にまで侵入してくる。

「……あかる」

うん？

「……あかる」

「どうしたの？」

「お、起きてる？」

「起きてるよ」

一昨日と昨日の夜でわかったことだけど、ココは真っ暗なのが苦手らしい。でも、オレンジの小さな灯りを残すと眠れない難儀な体質だから、我慢しているのだとか。

そんなわけで、昨晚も何度か呼びかけられた。もちろん、しばらくすると眠っていた。まだまだ子供ということだ。

「あ、あかる？」

「はいはい」

時間は九時半で、正直まだ眠くない。未咲が早寝な人だからそれに合わせて消灯してるだけだ。まあ、ココも眠そうだからというものもあるけど。

呼ばれて返事して。

そんなやりとりをまた数度繰り返せば、すう、くう、と小さな息遣いが聞こえ始めた。眠ったらしい。

雨はまだ止まない。瓦屋根にちよつとだけ楽しげな音を弾かせる。

ッ

閉じたまぶたの向こう、窓の方から一瞬の光を感じた。

遅れて、ゴロゴロと鳴り響く。山が近いから、鉄塔に落ちたりするのかもしれない。

そんなことを思っていると、また光と雷鳴。さつきよりも近かったらしく、低音が鈍い尾を引いて残った。

「……あ、あかる」

ココが起きた。なぜか泣きそうな声をしていた。

「どっした」

の言おうとしたところで、三度、雷が轟いた。びくっとしっぽが避雷針のように伸びた、気がした。

「うっ……」

「……隣くる？」

「い、いいの……か？」

「僕は構わないよ。別にココがだいじょうぶならそれでいいけど」

「う、え、えっと」

四度目。

「うっうっ」

と、頭からタオルケットに潜りこんでくる。でもすぐにずれてしまう。

それで、未咲が用意してくれた掛け布団を使うことにした。暑くなったらその辺に放り出すことにしよう。ついでに明かりを一番小さいやつ（オレンジの小灯）にして、雷の光がわかりにくいようにした。

「ほら、風邪ひくよ」

ココを引っ張り寄せて、ちゃんと布団をかけてやる。怯えて縮こまった身体。ぎゅうっと枕を抱いて、耳はぺったり髪に張りつき、しっぽもくるりと丸まっていた。

「あーちゃん？」

ドアの隙間から控え目な声。未咲だった。目が合うと、彼女は弱々しい笑みを浮かべながら、部屋に入ってくる。枕を手にして。

「……未咲も苦手だっけ」

「に、苦手じゃないあーちゃんが変なんだよ」

「そ。なんでもいいけど。ほら風邪ひくから」

促すと、ココとは反対側、僕の背中側に彼女は潜りこんだ。背中に未咲の背中が当たる。温かい。

「あーちゃん」

「うん？」

「昔もさ、こんなことあったよね」

「……あのときも雨だったっけ」

「二人で遊びに行った帰り、あーちゃんがあたしを送ってくれたんだけどどびしょぬれになっちゃったの。それで一日だけお泊りするこ
とになった」

それは 小学生の中学年くらい。夏休みで毎日、未咲と遊んで
いたときのことだろう。

「やっぱり背中合わせだったっけ」

「うん。あーちゃんが向かい合ったら顔が近くて恥ずかしいって言
うから」

「そうだったかな」

そんなことを言った気もするけど、いまいち覚えていない。あの
頃の日々は、一部と大まかなところは鮮明な思い出であるけれど、
部分部分、それこそどんな話をしたかなんてというのはおぼろげな夢
のような記憶でしかない。

「あたしは覚えてるよ」

と。未咲の小さな笑い声が零れた。

「おやすみ、あーちゃん」

「おやすみ、未咲」

夏の夜、雨の音を聞きながら眠る。こうやってみんなで眠ること
に、ちよっとだけわくわくしたことは内緒だ。

内緒。

約束。

夢の中、遠い昔へ。

雨が降っていた。天気雨だった。

幼い僕と幼い未咲が軒下でそれをずっと見つめていた。場所は…
…神社だ。雨どいがなくて、突き出した瓦の端から、ぴちゃん、ぴ
ちゃん、と絶えず雫が落ちていく。

「やまないね」

未咲が言った。僕は無言でうなずいたと思う。

夏休み。二人で山の中を駆けまわっていると、突然、雨が降ってきた。慌てて下っていくと、ちょうどそこに神社があった。

狛犬の代わりにきつねの石像が置かれた変な神社。このときの僕はそう思っただろう。神さまが違うからそれも変わるなんてことは知らなくて、ただ変わってるなあ、と。

屋根の下は暗くても、外は明るい。天気雨だったからだろうか。とにかく、明るかった。それで、神社の建物の中がかえって暗く感じられて少し怖かった覚えがある。

そのときの建物（あれは拝殿だった）の下、行儀は悪いと思ったけれど、賽銭箱の後ろの石段に腰を下ろさせてもらった。

「やまないよ？」

再び未咲。ただ待っていることがじれったくなつたのか、ぴよんと立ちあがって、賽銭箱の下の隙間を覗いた。

「取れない……」

さっき僕が落としてしまった五円玉のことを言っているのだった。当時の僕らにとっての五円は大金で、神さまにお供えできないなら手元に戻しておきたいと、そう思ったのだろう。

結局、雨の止み間に急いで未咲の家まで走ったから、五円玉はそのまま。今はどうなったかわからないけれど、数年も経ってるんだからどうにかなっているだろう。

後ろ髪を引かれる思いで走っていたのが原因か、着くぎりぎりのところで再び雨に降られてしまった。結果、未咲の家で一夜を明かさせてもらうことになったわけだ。

その夜、雷に怯える未咲の温もりを感じながら、だけど僕の頭にあったことは別のことだった。よくに思う。

確信がない。

いや、確信はある。

自身がない。

不確かな確信しかない。

あの場所に、あの屋根の下に、僕と未咲以外の誰かがいたように思う。

それが誰なのか、それを思い出せない。

神社のお姉さんじゃなくて。猫？ だったか。

曖昧であやふやな記憶。

でも、なんだろう、ひとつだけ。

その誰かは、とてもきれいだった。それだけがはっきりと、僕の脳裏に焼きついている。

参 雨明けの川と零れたもの(1)

一晩中降り続いた雨は夏の色をすっかり洗い流してしまった。朝。天里川の方に歩いていく途中で感じた。

セミの声は少なく、空の青色は薄雲によってすっかり身をひそめてしまっている。日差しも幾分か控え目だ。道路のアスファルトの上には、ぼつぼつと水たまりが広がり、空色の鏡が落ちていているように見えた。

その鏡面を、ココの髪が横切つて、きらきらと光が踊った。

「くっ」

後ろでまとめてポニーテールにして、しっぽがふたつに増えたみたいだ。青のカットソーにスパッツという出で立ちは、雨上がりの朝だと少し寒そうに見える。もっとも、ココは相変わらず元気だ。

「こけないようにね」

「あーもー、わかってるってばっ」

湿気が残った朝の空気を吹き飛ばすような声で、ココが口をとがらせた。

「あーちゃん、心配し過ぎだよ。家出てから何回目なのさ」

こちらは、白の半そでブラウスにキュロットの未咲。髪はいつも通りポニーテールだから、ココとおそろいだ。

「三回くらいだっけ？」

「八回ね。いくら七以上の数字を認識できない動物だからって、三回はないでしょ」

それは一度に認識できる数の上限じゃなかっただろうか。わざと間違えた僕もあれだけど、未咲の返事も適当だった。

「じゃあ、水たまりが八個あったんだ」

「なっ、それじゃわたしが水たまりのたびにぴよんぴよん駆け寄ってるみたいじゃないか！」

全くもってその通りだった。見つけるたびにわざわざ近寄る。

そろそろ放し飼い……じゃなくて、手をつないでなくても大丈夫だろうということ、好きに歩かせていたのだけ。その結果がこれ。はらはらどきどきものだった。もう少し落ちついてほしい。

「なんだか機嫌がいいけど、嬉しいことでもあったの？」

「あーちゃんが心配してくれるからじゃない？」

「にやにやと、未咲。」

僕と未咲の間では、僕がココの飼い主（一時的保護者）ってことになってるから、なにかあれば責任を僕に押しつけるつもりらしい。非常にうらやましい身分だ。恨めしい。

「なんかみさきが勝手なこと言ってるっ」

と、ふり返って後ろ歩きなココの顔は、ほんのちよっぴり赤くなっていた。

「ココ」

「だからだいじょうぶだつてばっ」

ぷい、と背を向けてしまう。ポニテールとしっぽの二つが大きく揺れた。それらの隙間から一瞬覗いたココの頬は、少し赤かった。怒ってるんじゃない、照れ隠しらしい。

同じことを思ったのか、未咲が忍び笑いを漏らした。

「……なに？」

「ううん。ほんつとくに、ココちゃんはあーちゃんが好きで、あーちゃんはココちゃんが好きなんだな」とか、思っないよ？ 思ってるけど」

どっちだ。

「思ってる」

「思ってるんだ」

「照れ隠しで、思っないって言ったただだよ！ それくらい悟れっ」

ふんっだ、とふくれてそっぽを向く未咲。やっぱりいつものポニテールが、歩みに合わせてぴこぴこ揺れるから、膨らんだ頬がなんだかおもしろ

「あーちゃん」

訂正、可愛く見えた。ということはない。決してない。別にそんな可愛いだとか思っていない。

というのも、やっぱり照れ隠しかもしれない。

そんな感じで朝散歩の目的地(？)、天里川へとやってきた。

土手を上って、左、上流側へと歩いていく。

蛍が見られるくらい澄んだ流れは、しかし、

「濁ってるね」

「雨降ったからでしょ？」

「こんなになるのか」

激流や濁流とまではいかないものの、泥色をした強い流れになっていた。未咲が落ちてた枝を投げ入れてみたら、瞬く間に見えなくなる。

「あーちゃんでも危なそうだね」

普段呑気な未咲も、ちよっとだけ真面目な表情で言った。

「ココ、落ちたら流されるから気をつけなよ？」

「う、うん」

うるさがられるかと思っただけど、ココは大人しくうなずいた。

土手道の左側、僕を挟んで川と反対側に回って、おずおすと右手を出してくる。

握る。すると、控え目に握り返してきた。

でも川も気になるみたいで、ココはちよんちよんと一歩踏み出しでは背伸び、また歩いて背伸び、を繰り返して、しきりに様子をつかがっていた。

「う……」

嫌なものを見た、と言いたげな顔が前髪に隠れる。

「どうかしたの？」「」

なんだかいつもと様子が違った。でも、ココはふるふると首をふるだけ。へにゃっとしぼんだ耳としっぽは、怯えているようにも見

える。

「……な、なんでもない」

ふいっとそっぽを向いてしまった。

が、

びくり

耳が跳ねあがった。それから、ぴくぴくと動く。

まるで、なにかを聞きとろうとしているようだ。なにか　なに
を？

「っ
」

突然、手を離して川側へ。スパッツが汚れるのも気にせず、砂の道の上に四つん這いになった。川へと顔を突き出し、緑の斜面の下を流れる荒れた水面に視線を這わせる。

「ココ？」

声をかけたけれど答えはなかった。ココは顔を左右にふって、流れを追っていた。

不安を表すように、しっぽが力なく、けれどせわしく右へ左へ。

「あーちゃん」

未咲もしゃがんで、同じように流れに視線を向けた。

少ししてから、未咲は僕に向かって首をふった。わからないようだ。

僕もココの隣に並んで、ひざを折った。ココの瞳は見たことないくらいに真剣なもの。

「ココ」

「黙ってて」

ぴしゃり、と返事。

ココの顔に焦りが見え始めた。一体なにを？
と、

「あかるっ」

ココの右手が左前、上流の水面を指差した。辿る。

泥色の流れの中、真っ白な点が見えた。しだいに大きくなる。ス

「パーの袋？」

「いや……ぬいぐるみ、か？」

「違う。」

「ねこっ!？」

「未咲の声。」

「っ」

「だめココちゃんっ!」

ココが飛び出した。慌てて手を伸ばしたけれど、空をつかんだだけだった。

金色の髪が跳ねる。着水。二つのしっぽが川面に突き出す。

「う」

必死に向こう岸に向かって進もうとするが、手間取っている。

その間にも、白ねこはだんだんと大きくなって。

「ココちゃんっ!！」

未咲の声に、はっとして視線をココに戻す。

「うあ」

小さい悲鳴とともに、ココの小さな身体が流され始めた。髪をまとめていたりボンが外れたのか金色が川面に散らばる。それでもなお、子ねこに向かおうとする。

「未咲はなんか探してきて!！」

言つと同時に僕は地を蹴った。

着水。予想以上に流れが強い。下流に流される。

それでも、足を擦るように少しずつ前に進んだ。

そうしている間に、ココはほぼ向こう岸へ。白い塊をやつとつか

んだ。その安心が油断を生んだのか、

「っ」

言葉にならない鳴き声。本能が祟ったか丸くなる。それじゃ浮かない。けれど伝わらない。言葉が届かない。ココは溺れる典型例でただひたすらに息継ぎをしようとする顔を出そうともがく。そんなじゃ駄目だ。

「ココ」

「」

大きく息を吸った。

流される覚悟で水底を蹴る。下手くそな飛びこみみたいに跳ぶ。少しだけ近づく。けれどそれは一度しか使えなくて、足をつくことすら難しい体勢に。

それでもなんとかココの身体をつかんだ。

耐えて、少しずつ向こうの川岸に押ししていく。たったの五メートルが遠い。

考える余裕もなく、ただ身体を動かした。

ココを川辺に押し上げ、僕も上がる。橋からまわりこんでくれた未咲が手を差し伸べてきた。

熱いくらいの手の平だった。

足を滑らせながら、土手道まで這い上がる。そこでやっと一息。

隣では、未咲がココの身体を揺すっていた。

僕は力なくそれを見ていた。

よくある話だけど、跳びこんでからどれだけの時間が経ったのかわからなかった。

永遠のようで一瞬のようで、ただひたすらに必死だった。

こういう状況で、自分の命を手放さないことですら難しいのに。だから、運がよかったと言っしかない。迷惑も心配もたくさんかけてしまった。

ココの耳が小さく動いた。僕はそれを見て、また息をついた。

未咲も同じように息をついて、僕に向き直る。泣きそうなくらいに怖い顔だった。

平手が飛んできた。

避けるすべもなく叩かれる。乾いた音は水のぐしゃりという音でどろどろになった。

それから、散歩の途中だったららしい老夫妻がタオルをくれた。

「ん、う……………あ、あかる？」

「ココ」

呼びかける。うつすらと開いた目。次の瞬間にははっと見開かれ

て、身体を起こそうとした。

が、「　　なお」と、自分の胸で小さく鳴いた声を聞いて、力なく崩れた。

「ココ、よかったね」

言いたいことはたくさんあるし、叱らなければならぬこともあった。けれど、今はただ、ココへの言葉だけ。

小さな命を守ろうとした、ちいさなかみさまを、褒めること。それだけで。確かに僕は甘いだろう。ココは、ココ自身の命だけでなく、僕の命も危険にさらした。勇敢ではあったが、決して賢明ではなかった。いや、勇敢なんてのは無事だったから言えること。それは無謀以外のなにものでもない。

それでも、僕はココに微笑みかける。

それは多分、心優しい友人が誇らしかったからだろう。「よくやったね」の言葉とともに、どこかにいるだろう幸運のかみさまに、感謝した。

その後、親切な老夫婦にはたつぷりこっぴり叱られたことは言うまでもない。

家に帰るやいなや、未咲は僕とココの服を問答無用ではぎ取った。そのままお風呂に叩きこんで、湯気のわくシャワーを全開でかけ始めた。

「み、みさきっ」

「だまれ！」

彼女は怒っていた。僕にも、ココにも。隠さない。彼女はこういう怒りを隠さない。

「風邪ひかないようにちゃんと温まってからあがってきて。着替えとタオルは出してく」

しばらくかけ続けて、不機嫌さ丸出しの言葉を残して出ていった。「……あかる。みさきが怒ってる」

緩めたシャワーの音にすらかき消されてしまう声だった。ココの濡れた、まだ少し冷たい髪を撫でると、しゅんとした目が僕に向いた。なお、とココの腕の中の子ねこも小さく鳴いた。

「怒るよ。でもそれは心配してるってことだから。ちゃんと身体を温めて、着替えてから、一緒に怒られよう？」

そう言つと、ココの顔にちょっとだけ明るさが戻ったように見えた。

けれどこの世界には怒られる以上に恐ろしいことが存在する。つまり。

未咲は泣いた。

最初はちゃんとしたお説教だった。けれど途中から感情が先走り始めて、ついには言葉にすらならなく、後はもう泣くだけ。正座の僕に腕をまわして、ただ嗚咽だけ。

かける言葉がない。撫でようとすると腕に力が入らない。

痛いほどに彼女に抱きつかれ、胸元は少しずつ濡れていく。冷たい。

温もりと呼ぶには、あまりに重い涙だった。このことを、僕は決して忘れない。

参 雨明けの川と零れたもの(2)

夕食前。昨日約束した通り、僕はココとお風呂に入った。

あがつて、白ねこを拭く。それから未咲が用意してくれた服に目をやった。

僕は自分で持ってきたやつだったのだけど、

「……これ、着るのか？」

ココのはワンピースだった。冗談とも思えるほどにひらひらがついている。

……どこかで見た覚えが。そう思ったら、ふと思いついた。

僕が引越す前の最後の年、だから中学三年のときだ。

未咲が全然おしとやかじゃないから、誕生日プレゼントとして僕が送ったのだった。別々の高校になるのだから、と未咲へのお願いも込めて渡したのだったか。

もちろん、分け隔てなく人と接せる未咲にとっては余計なお世話だとわかっていたし、プレゼントとしてもただのネタにしかならないとわかつてはいた。でも、

「なんだかお姫様みたいだね」

と、それを着て女の子っぽくはにかんだ未咲の、普段とのあまりのギャップに面食らった。

とても似合っていた。わずかに染まった顔が魅力的だった。

未咲のポテンシャルを見せつけられただけ、という自爆になったのが悔しくて、携帯の待ち受けにしてやった。ここまではよかったのだけ。

高校のクラスメイトに見られてネタにされる(というより未咲を紹介しろと迫られる)結果になって、自爆第二弾という未咲に内緒にするしかないオチがついたのだった。

そんな微妙過ぎる思い出のつまったワンピース。

これは多分、未咲の仕返しだ。

僕に対して。

そして、おしとやかでいられるようにと、ココに対して。

「二重の意味での仕返し。」

もちろん、ココは気づくすべもなくして。

「な、なんか動きにくいぞ……」

でも似合ってる。美少女って感じじゃないけど、十分に可愛い。

うちの高校に持って行ったら、女子たちにぎゅうぎゅうされるだろう。永久的マスコットにされるかもしれない。足元にすり寄るねこをセットにすればもう確実に。

「ココがおしとやかになるようにってことだよ」

「む……いじわる言っただろ」

「どうだろうね」

タオルを肩にかけてやって、濡れたままの髪が服につかないようにしてやる。

すでに少し濡れてしまっていたが、ドライヤーを当てたら乾く程度だろう。

「自分で当ててみる？」

次にどうされるか覚えたらしく、ココの手にはすでにドライヤーがあった。

「むずかしそうだし……」

耳がしおれる。

「そんなことないけどね。自分でできると、気になるところにできるから楽だと思っけど」

「うー、でもでもっあかるとかみさきにやってもらったほうがいい！」

上目遣い。そんなこと言われたら断れない。

さっと着替えて、それから先にドライヤーを使わせてもらった。短いからすぐに終わる。

ココの潤った髪を手にとりながら乾かして、最後にブラシ。

ワンピースの背中ボタンを留めれば、着飾ったきつね人形ので

きあがりだ。

そのまま部屋に置きたいくらいだった。もちろん、アンティークなイスの上に。

でも、楽しいのもそこまで。脱衣所を兼ねた洗面所を出るのに、息を飲む。ドアを開ければ、台所が目に入るからだ。そっちにもドアはあるけど、未咲は閉めない。

「開けるよ」

「う、うん」

がらり。

そつと開けたつもりだったのに。

音に気づいてか、未咲の顔がこっちを向いた。

「気まずい……」

でも、

「もつすぐできるからあつちでゆっくりしてよ」

と、今までとなんら変わらない未咲。人懐こい笑みに、目頭あたりがきゅっとなった。誤魔化すように口を開いて、

「手伝うよ」

そう言えば、

「みさき。わたしも手伝うぞっ」

ココも名乗りを上げたのだけど。

「だーめっ」

なんて、満面の笑みを浮かべられたら……どうしようもないじゃないか。

翌日から、ココの様子がおかしくなった。ふさぎこんでいるといった感じだ。

普段通りに装っているように見えて、ふと気づけば暗い顔でぼつととしている。未咲の「おやつだよ」の声にも数度呼びかけるまで気づかないあたり、かなり深刻だろう。

果てには、

「ココちゃん。ちょっと横になってきたらいいよ」

未咲の言葉に、大人しくうなずいた。とぼとぼと居間を出ていく後ろ姿を見送る。最後に見えたしっぽのひと揺れがさびしく、居間には静寂が残った。

「なあ」

子ねこが腕の中で鳴いた。力なくその毛並みに指を流す。「ごろごろごろ、と喉を鳴らすのが聞こえた。未咲は無言のまま、視線をココが出ていったふすまの方に向けていた。

「元気、ないね」

「うん」

「なああ？」

疲れたんだろうか？ でも、ココなら「つかれた」と身体をべったり投げ出しそうだ。

「ちよつと様子見てくるね、あーちゃん」

ぱたぱたと出ていく。取り残される僕とねこ。

「早く元気になって、ココを喜ばせるんだよ？」

語りかければ、なあ、とわかつているのかわかっていないのか、僕には判別できない声が返ってきた。

「夕ご飯もうすぐだから、呼んできてくれる？」

未咲に頼まれて、暗い階段を上っていく。

未咲が熱を計ったらしいけど、なかったと言っていた。風邪じゃないようだ。

「ココ？ 入るね」

ノックを三回。細く開けた隙間から覗く。暗かった。カーテンも閉じられていた。廊下の明かりが長細い光を差しこませて、その中に、僕の影と重なるようにしてこんもりとした影が眠っていた。掛け布団をかぶっているらしい。

「……ココ」

びくり。山が震えた。少し待ってみただ、顔は出てこない。

「ご飯だよ？」

中に入る。引き戸を薄く開けたままにして、少しの明かりだけが入るようにしておく。

「調子わるい？」

頭があるだろう方に座って、布団をめくってみる。

が、中からココが押さえているのか、めくれなかった。

仕方がない　と、少しだけ開いていた隙間に手を入れて一気に取り去った。

「っ
」

丸くなったココ。びくりと震えた。

「どうしたのさ」

身体を乗り出して、おでこに手を近づけた。もう一方の手が敷布団に触れた。

「……ん？」

ぺたぺたと触れてみる。見えないけれど……濡れていた。

「ココ」

膝立ちになって、腰からココを抱きかかえる。明かりにさらされて顔を、ココは背けた。

抵抗しているわけじゃないけれど、顔だけは見せないように、と。

「っく
」

肩が震えた。

「っく、……っん」

「どこか痛いのか？」

「……っ、違うっ」

ココがもがいて、腕からずりりと抜けた。少し離れたところに背を向けて座る。

「ずず……」。こしこしと腕が動いたのが見えた。

「ほら、ティッシュ」

器用に鼻をかんだ。

「……………」

「どれで、どうしたの？」

沈黙に耐えられなくて、丸まった背中に声をかけた。

「……………」

「黙ってたらわからないよ……………。どこか痛いところがあるなら」

「ちがうっ」

強い否定だった。返す言葉につまった。

「そんなんじゃない」

「…………。じゃあ、どうしたのさ。言ってくれないと、僕にはどうもできない」

未咲の言うお人よしも、相手の拒絶を受けては役目を果たせない。歩み寄ろうとしても、ココが拒んだら先には進めない。

「……………」

それでもやっぱり言葉はなくて、だったら、僕はここにいるしかできなかった。正直なところ、動ける自信がなかった。逃げ出したいと身体が訴えても、絶対に逃げたら駄目だと思った。

じつと黙ったままで、時間が過ぎた。

どれくらい経ったのかわからない。時計という存在は認識の外だった。

「…………わたしはだめなやつだ」

小さな声で、ココが口を開いた。

でも、返す言葉がなかった。

「わたしは目の前のねこを助けたと思って思ったんだ。なんにも役に立ってないけど、それくらいならできるかもって思って。ううん、あのときはそんなこと考える余裕もなかった。周りが見えなくなって飛びこんで、それであるまで危ない目に合わせた。怒られることしたし、怒られることさせた自分が…………やだ」

嫌い、そんな言葉よりも鋭く胸をえぐった。ココの「やだ」は感情の刃だった。

「それに、わたしは……こんなでもかみさまだから。逃げてはつきりじゃだめなのに」

どういうこと？ そう訊こうと思ったけど、やめた。

そんなことない。励まそうと思ったけど、やめた。

ココの悩みを聞けるのは、僕一人じゃないからだ。下に、未咲がいる。

だから、

「ありがとう」

僕は、そう言った。

「え？」

ココがふり返る。影が落ちた顔の中で、廊下の明かりに照らされた瞳は、不安の色。

何度か見た、瞳だった。ココが独りを感じているときのもの。

「ココは優しいよ。ほんとに、優しい子だ」

周りの心配ができている。反省もしていた。ココはちゃんとできている。

傍に寄って、その身体を包みこんだ。優しいという言葉を刷りこむようにささやく。

大丈夫だとか、少なくともあのねこの命は守れたよとか、そんなこと言えなかった。

かみさまだから、と痛ましく言葉を吐いたココに軽々しく言えなかった。

僕独りじゃどうにもできない。

でも、僕は独りじゃないし、ココだって独りじゃない。自分独りの、何倍、何十倍も安心できるもの。

もし、心を支えてくれていた感情が本物だったのなら、これは小さな家族だった。

僕と未咲とココ。

ひと夏に出会い、一緒に過ごした短い時間は、それでも小さな奇跡みたいだ、僕らを繋いでいた。

肆 雨が連れてきた決意（1）

夕食を取りながら、僕らは話し合った。

「とりあえず、ココちゃんの抱える問題をはっきりさせて、解決するにはどうすればいいかをみんなで考えるってことだね」

オムレツを口に運びながら未咲がまとめた。

まずはココがどうして落ちこんだのか、そして泣いたのか、それをはっきりさせることだ。

「うん」

ココもうなずいた。ちよっと感心した顔。

こういうところでしたっかり者の未咲は頼もしい。

「ココちゃん、温かいうちに食べてほしいな」

湯気が立っているオムライスと味噌汁に白ご飯。

場を和ませる言葉に、ココはわかってかわからずか、おずおずとスプーンを手に取った。隅っこをすくって、口元へ。こくん、と飲みこむ。すると、ぱあと顔に色が戻った。ちよつとだけぎこちない笑顔だったけど、いつものココの一端が見えて、僕はほっとした。

そのまま、ぱくぱくと二口、三口。合わせて、しつぽが上下する。眺めつつ、未咲に目配せすると、未咲は小さくうなずいた。僕から話せということらしい。

「ココ。ココは……えっと、なにが原因だと思ってる？」

訊く。スプーンを飲みこんだ状態でココが固まった。

しばし悩んで、はっきりとココは答えた。

「かみさまなことだ」

「ざんねん、解決できなさそうだね」

「う……」

「いや、う……じゃなくてさ。かみさまなのが悲しいんなら別に今になって泣いたりしないんじゃない？」

「そ、それはそうなんだが。でもかみさまなのがいけないんだっ」

「つまり？」

「かみさまなのに、ねこを一人で救えなかった」

「……かみさまは安全に救える力持ってるの？」

想像上のかみさまだと持ってそうだけど。

「う……も、もってないこともないぞ？」

「……。ココは持ってるの？」

「う……」

「持っていないんだね」

わかりやすすぎるココの表情が答えた。でも、ココの言い方だと普通のかみさま（どんなのか知らないけど）なら持ってるみたいに見える。言い方だった。

「なにか使えない理由とかあるの？」

「それはっ」

目をそらす。心当たりがあるらしい。

……そう言えば、この街のかみさまは竜神だと聞いた。ココも一応、雨のかみさまだと言っていた。なら、ココじゃない方のもう一人のかみさまが竜神さまなのだろう。

つまり、ココは竜神さまと喧嘩したということか。

で、喧嘩して、かみさまがココから力を取り上げた？

「……あ、あの子は関係ないっ」

僕の考えてることを見透かしたのか、ココが慌てて否定した。あの子、というのをもう少し追求したかったけれど、関係ないそうだからやめておいた。

かみさまが関係ないということは、ココ自身に問題があるのだろう。

ココ。雨のかみさま。雨が降らせられるかみさま。

なにかが引つ掛かった。

左に座るココを見る。

視線をそらすのが耐えられなくなったのか、ちらりとこっちを見た。視線が合わさる。

またそらした。

「なあ」

白ねこが僕の足にじゃれついてきた。さっきまで、お皿に入ったミルクを飲んでいたので。

ねこ。ねこを助けたココ。川。……水？

一つの可能性に思い至った。

「もしかしてさ」

こしょこしょと、ココの、頭の上についた耳にささやいた。すると、あからさまな反応が返ってきた。未咲が身体を乗り出してきたから、同じことを耳打つ。

「ほうほう。つまり、ココちゃんは水が苦手なんだね！」

「っ」

ココが倒れた。「かみさまなのに」と自虐的なひとりごとを呪いのようにつぶやき始めた。

「未咲、発言には注意しましょう」

「ごめんなさい」

「でもさ、ココ」

「ん……、なんだあかる。わたしはいま、畳だけが友だちなんだ」
めちゃくら。めちゃめちゃ暗くなっていた。というか、ねこを忘れてやるな。

「んー。ねえ、あーちゃん」

「なに？」

「きつねってさ、犬みたいに泳ぎそうじゃない？」

「僕も思った」

実際どうなのだろうと、二人して注目すると、身体を起こしたココは、

「だ、だってあれめちゃくちゃ冷たいんだぞっ！？ 冷たいのがくっついてきてどれだけがばって身体をふるふるしても取れないんだから！ ふーふーしても全然乾かないし、なんだか身体も重くなるし。いいところなんてないんだからなっあれは全けものの敵なのっ」

非常にわかりやすい返事をしてくれた。

ということで、ココが水嫌いだと判明した。

さて、彼女が泣いてたのがどうしてなのかはわかった。

いや、待て。全然わかってない。

「ココは別に、僕がココを助けたことを申し訳なく思って泣いてたわけじゃないよね?」

「え、そんなことないぞ?」

まあ、そんなことも言ってたけど。

「それはいいとして、逃げてたら駄目なのにかかって言ってたけど、あれはどういうこと?」

「その、だな」

「うん」「うん」

「わたしはきつねのかみさまなんだ」

「知ってる」

「あ、いやそうじゃなくて」

しばし沈黙。それから、小さくうなずいて。

「わたしって水がその……あんまりよろしくなくて
うん。」

「で、雨降らせたりするのが上手にできない」

「かみさまの力が、って話だね」

「それがいやで喧嘩して逃げてきたのに、でもやっぱりここに来て
も、それが苦手なことからは逃げられなくて、みさきやあかるたち
にも悪いことして」

つまり、かみさまとして非力な自分が情けなくなつたと。

「そっか。じゃあ、ココちゃんにはちょっとがんばってもらわない
といけないかな」

未咲が言った。ちょっと怖い笑みが浮かんでいたことを、多分コ
コは、僕以上に感じていただろう。

「うきゅあつ!? や、やあつやだつやめ、やめるみさきいつ後生だからあ」

「もんどむよおっ」

夕食後。お風呂から、かみさま虐待の声が聞こえてきた。

水シャワーをかけられるココを想像した。ちよつと可愛そうな気もするけど……。

「あ、あれっ? これってあたしも、あうつつめたいっ。あ、あーちゃんっ助けて」

……。風邪ひかない程度に頑張ってもらうことにした。

翌朝。昨夜のシャワー攻撃が堪えたのかココはぐっすり眠ってしまつて起きなかった。

「ということ、デートに行こう!」

未咲の提案で、久々に二人きりで散歩することにした。時間は七時。

ココはまあ、寝かせておこうということで。精神的に疲れたのもあるだろうけど、夜更かしも原因だろう。

布団に入ってからのことだ。僕がココの苦手を知ったのだから、僕はココに苦手なものを話すべきだという平等な情報交換(?)を訴えられた。結局それが十二時くらいまで続いたのだった。

まあ、最後の方になると、ココは船を漕いでいたから半分も頭に入っていないだろうけど。

「それで、未咲は僕になんの話?」

「あう……あーちゃんは用事がないとあたしとデートしてくれないの? あたしとあーちゃんの仲なのに!」

どんな仲だよ! とはつつこまないでおいだ。

「別にそうでもないけど。今日はそういうのじゃないんですよ」

「おお、やっぱりよくわかるね。話が楽だよ」

「でっ」

「うん、今日は暑くなるんだってさ」
そうして僕は、ココの水嫌いを克服させる二つ目の作戦について話し合った。

というところまではよかったのだけど……。

「あかるあかるあかるみさきいっく」

家に戻りドアを開けた瞬間、金色の毛並みが跳びついてきた。いや、人の姿だったけど。

「わ、わたしが駄目な子だからいなくなっちゃったのかと思ったじゃないかあっ」

半泣きだった。袖と裾を幾重にも折り曲げたパジャマは乱れ、少し濡れていた。

「そんなことしないからさ。ほら、泣きやんで」

責めるように叩いてくるしっぽ。避けることもせず、寝ぐせがついたままの髪の毛に腕を回す。朝日のように柔らかい。

「泣いてないっ」

「そうだね。一人にさせてごめん。だから」

「だから泣いてないってば!」

身体を離して、ごしごしと腕で目元をこすった。少しだけ赤くなった瞳には、だけど僕らの知ってる明るいお日様の色が浮かんでいた。

「みさき、お腹すいた」

「うん、すぐにできるよ。だからそれまであーちゃんと仲良ししててね」

「まかせろ」

午後を待っているものを知らず、無邪気にココは微笑んだ。

肆 雨が連れてきた決意(2)

「やだ」

ココに即答された。

「知ってるぞ！ これは水着だろっ！ そうやってみさきはわたしをいじめるんだっ」

涼しい服、という嘘で水着を着せようとした未咲の作戦は完全に失敗していた。最初から成功するとも思ってたけど。

「べつに川に投げこまれるってわけじゃないからさ。ちよっと水に触れてみるだけ。それで下着が濡れたりしたらココもいやでしょ？」

未咲を裏切るわけにもいかず、フォローする。

「う、それはちよっといやだ。ぐしょぐしょなので歩きたくない」
想像してしまったのか、しっぱの毛が逆立っていた。

「それにもうしっぱ用の穴開けちゃったよ？」
未咲が手元のそれを示す。普通にスクール水着。おしりの部分に開けられた穴。

でもなお、しぶるココ。だから、いつもの手段を使うことにした。
ココは可愛いから、これを着てもとっても似合うんだろうね。と。
「でもやっぱりはずかしいぞ」

夏の照りつける日差しの下。ワンピースの中に水着を着たココが何度目かの言葉を漏らした。お守りはなくすといけないから、タオールと一緒に小さい鞆に入れて僕が持っている。

「だいじょうぶ。昨日の川と違って、これから行くのは人がいなくて浅いところだから」

未咲の説明通り、僕らが向かっているのは昨日とは反対の方向だ。方角だと西。旧住宅街より向こうにある川で、名前は小来川。ココと同じ名前の川だ。その上流は、子供がほとんど行かない隠れた名所で、探険好きだった未咲と見つけた、とっておきとも言える場所。

それがこんなときに役立つとは。

「はい、とうちゃーく」

予想通り人の姿は見当たらなかった。

下流よりもどがった石の河原。澄んだ水の流れは水底の石を隠すこともなく、泳ぐ小さな魚が作る影もくつきりと見せる。太陽の光をきらきらと跳ね返す水面はこの上なく気持ちよさそうだ。

「ということが一番良かった」

遊ぶ気まんまんだっいたらしい未咲は半ズボンにシャツという出で立ち。サンダルを脱いで、すぐに川に入ってしまった。ぱちやぱちやと弾ける水音はとても涼しげだった。

「う……」

それを見て、ぱたぱたと駆け出すココ。けれど、河原と水の境界でぴたりと足を止めた。しゃがんで、ちょんちょんと水面をつつき始める。

「ううう」

行こうかやめようか、しっばが右に左に迷い、耳はもどかしげに小さく震える。しかし、手元で跳ねた水が顔の辺りまで跳んで、慌てて近くの岩に上ってしまった。

「最初は足だけつけてみたらどう？」

靴を脱いで、ひざ下までズボンの裾を折り返してから、ココの正面に立つ。足元をみると抜けていく水は少し冷たいけれど、慣れてしまえば気にならない。

「じゃ、じゃあちよつとだけだからな？」

ココもサンダルを脱いで、おそろおそろ右足を近づけた。ふるふると震えるつま先が水面に近づく。

が、そこで足が止まった。

「……？」

ココは目をぎゅつと閉じていた。

「ココ。それじゃいつまでたっても水に届かないよ？」

「えっ？ あ、あれ、冷たくないと思ったらまだついてなかったの

「かつ？」

「……」

「う、そんな目で見るなあっ」

やけになって右足をざばんと入れた。しつぽが跳ねあがる。それに応じてワンピースの裾が大きく浮いた。真つ白な足の先、裾で影になったつけ根まではつきりと見えた。もちろんそこにあるのはスクール水着の紺色であるわけなのだけど。

「べ、べつに冷たくないぞ？」

「そう？」

伸ばした右足、その膝辺りに水を垂らしてみた。ふひゅあっ、なんて悲鳴が上がったけれど、ココも耐えている。しつぽはもう逆立ちまくりで、ワンピースの裾はテント状態だ。

「この程度とは川もまだまだだな」

勝ち誇ったように言う。というかそういうのは、両足を入れてから言いましょう。

「こ、これくらい楽勝だっ」

(勝手に)勢いづいたらしく、ぴよんと岩の上から飛び下りた。

ぱちゃりと小気味いい音を立てて、水がきらきらと跳ねる。

「あっっ」

とバランスを崩してふらつく。

「ほら」

と、ふわりと浮いた下ろし髪を包みこむようにして背中から抱きよせた。

「あ、あかる……急にいなくなったり離したりしたら駄目だからなっ
っそんないじわるは禁止なんだからなっ」

「わかってるよ」

ちよつとあわあわしているのが可愛い。

「笑い話じゃないのっ」

抗議の声が飛んできた。でも言葉尻がいつもより弱めだ。勇気づけるように髪を撫でる。

「て」

「うん？」

「服が塗れちゃうから、脱がしてって言ったの！」

はいはい。ばんざいしたココのワンピースを脱がす。ふあさつと髪が流れて、いい匂いが漂った。スクール水着の彼女。左の腰上あたりに小さな名札があつて、未咲のフルネームが二重線で消されていた。

「それ未咲のやつだったんだね」

「そうだよ。あたしが中学で使ってたやつ」

未咲が寄ってきた。手伝いに来たらしい。小さな家族が助け合つて、克服していくつてなかなかいいかもしれない。

「いやー、なんていうかめっちゃかわだよねっ。めちゃん可愛い」

……もしかなくても、水着姿のココを堪能したいだけか。

「だってだって、こんなにちっちゃい子があたしの水着着てるんだよっ？ というかあたしが着せちゃってるんだよっ？」

うわー。家族とか感動とか言った僕のこの気持ちを返せ。というかこっちくんな。

ということ、恒例のいじわるでも言うことにした。

「未咲もこの頃はこんなにちっちゃかつたんだね」

「そーかも。あーちゃんもいうほど大きくなかったのにね」

失敗した。水着ココ効果で器が大きくなっているみたいだ。作戦変更。

「ココ、水着は苦しくない？」

「うん？ だいじょうぶだぞ？」

立っているだけならだいじょうぶ慣れたらしい。今は僕の右手を持つだけで、この腕にもほとんど力がかかっていない。

「ねえあーちゃん。それってどういう意味かな？」

「いや、その頃の未咲はココと同じくらいの大きさだったという話」

「おお、ということはわたしもおっきくなるのかっ？」

ナイス、ココ。

「未咲くらいにはなるんじゃないかな？」

そしてもう一度ココにトスを上げた。

予想通り、

「……」

「い、いやココちゃんっそこで無言とかやめてよおっ」

見事なアタックを決めてくれる。

ココはかみさまだから自由に姿変えられるなんていう話は………多分、下流に流れていった。

太陽が山の端にかかり始めた頃には、ココは頭からぐっしょりと濡れていた。

はしやぎすぎたか狩猟動物の本能か、魚を追いかけて自分で滑ったのが原因だ。

まあ、その程度には水に慣れたということだから、よかったということにしよう。

帰るよ、と言えば、もう少し遊びたいという不満顔も見せるようになっていた。ずいぶんな変わりようだ。

結局は、こういう風に楽しんで水に触れるという経験がなかっただけなのだろう。生きてきた時間に対して、こんな時間があまりにも少ない。……かみさまなら仕方ないのか。

いや。

それでも、ココは僕らといて、ときどき文句を言いつつも笑っている。そんなココは、一人の女の子としてとても生き生きしていた。なら、ココにとっても、こういう時間は必要だったのだろう。その時間の中で、ココ自身がなにかを見つけられていたなら、それで十分だ。

もうほとんど時間が残っていないことを、僕は知っている。帰らなければならない。

未咲はそのこと口にしない。ココは気づいているのかわからない。でも、それでいい。その時になって、やっと気づいたふりをすればいい。

泣いても、笑っても、未来を望んでも、過去を悔やんでも、最後の最後には笑顔でいられるように。たとえそれが、不器用な笑みだつて。

僕らはこうやって小さな思い出を積み重ねていく。悔いを残さないひとつの道として。その先に願うことは、笑っていることだ。

『笑えなかつたら、つまらないよ』

それは、かつて未咲が僕に投げかけた言葉だった。

そして、不器用だった僕の背を押した意志は、今度はココの背中を押していた。ココと触れ合う中で、ずっとこの言葉が心の中をめぐっていた。

その結果、ココが笑顔でいられたのなら、僕には、なんにも言うことがない。

結局。

僕の探し物は見つかった。実際はとっくの前に見つかったのかもしれない。

なににせよ、もう語ることはない。

だから、あとは彼女　あの小さなかみさまに頼もう。

僕らの日常の終わりと、そして新しい始まりを物語ることを。

壹 朝の光（1）

自分にとっての日常へと変わった日々は、まぶしいくらいに明るくて、思い出の中の天気雨みたいにきらきらと輝いていた。

顔に当たる明るさを感じて、わたしはうつすらと目を開いた。でも、目の前は真っ暗。やわらかなものが顔に当たっているみたいだ。背中にもなにかがまわされてる。……なんだろ。

頭をふれば、髪が頬をくすぐってきた。もう少し短くしておけばよかったかもしれないけど、今となっては愛着がわいてしまっている。

あると面倒だけど、ないと寂しい。いつの間にか、かけがえのない自分の一部になったみたいだった。

あかるや、特にみさきなんかは女の子なのに短い。お風呂あがって乾かすのは楽そうだけど、わたしはドライヤーでほわーっとされるのが気持ちよくて好きだ。

こんなことを考えていたら頭がだんだんと目覚めてきた。

なんだか温かいから嫌じゃないけど、そろそろ起きないとだめだ。みさきが用意してくれるあったかご飯の楽しみが減っちゃう。あと、わたしは猫舌じゃない。

「すぐ戻ってくるからな、あかる」

身体にまわされていたあかるの腕から抜け出して、自分のふとんに戻る。

きちんとたたまれた服。昨夜、納得いくまで何度もたたみ直したやつだ。

それからパジャマを脱ぐ。ふとんが素肌を撫でるのがちよつとだけ気持ちいい。

昨日はズボンが膝くらいまでずれててすごく恥ずかしかった（運よくあかるはいなかった）けど、今日はそんなことなかった。ちよ

つと安心だ。

この前も着た若葉色のワンピースを頭からかぶって、お守りも首にかけてから、長い髪を掻き出す。この瞬間だけは、普段柔らかい髪がちくちくして苦手だ。仕上げで顔をふると、ほわり、と髪が丸めた背中にかぶさってきた。

背中のボタンを留めるのに苦戦していると、あかるが寝返りをうつてあつちを向いてしまった。

パジャマは一回でたためて、ふともほこりが立たないように静かにたたんでおいた。

最後にあかるの気持ちよさそうな寝顔を覗いてから、そつと部屋を後にした。

踏むときいきい鳴る階段には、最初の夜に驚かされた。今も夜はちよつと怖いけど、朝なら問題ない。一人で何往復だってできる。

「おはよう、ココちゃん」

一階に下りたところで、みさきがふり返ることなく言葉をかけてきた。

わたしとあかるとでは足音が違うからわかるらしい。わたしも耳はいい方なのに、あかるとみさきの違いはわからない。

音の前に匂いでわかってしまうから不便はないけど、ちよつとさみしい。

「おはよーだな、みさき。なに手伝ったらいい？」

顔を洗ってから、みさきに声をかけた。

わたしも居候の身だから、手伝いは進んでやる。もちろん、あかるには内緒だ。知られたら頭なでてくれそうだけど、そうしてほしくてやってるんじゃない。

「ふふ、ご機嫌だねココちゃん」

「そうかな」

みさきはとつても話しやすい。いつつもにこにこ笑ってて、一緒にいるだけで心が楽しくなる。ときどき、どきりとするように鋭いんだけど、それも含めて大好きだ。

「じゃあ、これ運んでくれるかな」

「うんっ」

おいしそうな目玉焼きが載ったお皿を一個ずつ運ぶ。歩きたびにぶるぶると揺れて、意味もないのにお皿を小刻みに動かしてしまう。一個、二個、三個。三人分のお皿を運び終えて、それから今度はお箸。

キッチンに戻って、お味噌汁のお椀を準備して、いつもの言葉を言う。

「あかる起こしてくるっ」

「うん。お願いね」

数日しか過ごしていないけど、意思疎通がうまくできてる気がする。それが嬉しくて、楽しくて、ほんとに居心地のいい居場所だった。

「あかるっ。朝だぞっ！」

みさきと違って、あかるはお寝坊さんだ。普段は大人って感じで頼りになるのに、朝だけは弱い。でも、こんな欠点もあるんだなって、そんなところがよかつたりする。

「あーかるっ」

肩を揺らしてみても、いやいやするように身体を小さく動かすだけ。全然起きる気配がない。

「起きろおっ！ 朝ご飯食べるのっ」

起きてくれないとわたしもみさきもご飯にありつけない。生死に関わることだ。最初はいつだってやさしく起こそうとしてるのに、だんだんと激しくなってくる。

あかるの寝顔が香気だからとか、そんなんじゃないと思う。

でも、あかるがわたしにいじわるするのも、実はこんな気持ちからなのかもしれなかった。

「あかるあかるあかるあかるあかる……！」

耳元で呼ぶ。

「ん……」

「お、起きた？」

「うん……ちょっと眠い」

□ではそう言ったものの、実際はかなり眠そうだ。目がほとんど開いてない。寝不足とかじゃなくて、顔さえ洗えばずっと目が覚めるらしい。

でも夏ですらこんな状態なんだから、ふとんがぬくぬくな冬はどうなるんだろう。わたしだって、あまりのふかふかほかほかに出たくなくなるのに。

「あれ？ ココだ。おはよ……」

「おはよ、じゃないってば！ さっきからずっと起こしてる」

あかるはどうしてすっと起きてくれないんだ！ と抗議してみる。

「だって、眠いし。それに夢の中のココがあまりに可愛すぎて」

えっ？ 勝手にしっぽが反応した。でも、わかってる。これはあかるの嘘だ。

「現実のわたしとどっちが可愛いんだ？」

だけど気になって、ちょっと訊いてみた。すると。

「夢の中のココは、好き嫌いしないいい子だったね」

なんだか負けた気分になった。

「いつまで寝ぼけてるんだっ。早く起きて下りるの。」はん！

だから、子供のようになぐられてみせる。

「はいはい、わかったよ。おはよう、ココ」

「うん。おはよう、あかる」

あくびしながら、わたしの髪を優しくすいてくれる手の温もりを感じて、わたしは少し温かくなった心を隠すことなく答えた。

壹 朝の光（2）

川に行くのは午後からだと言われたから、午前中は暇をもらうことにした。

人の足でこの村を見てまわる。何回かやったことはあったけど、今なら新しいなにかを見つけられる気がした。

朝の光を受けた景色は、それくらい違って見えた。

わたしが変わったんだろうか。わたしは、変わったんだろうか。

……わからない。

自分じゃわかるはずもない。

でも、なんだろう。なんだか不器用になった気がする。自分の言葉で感情を伝えること。素直に思ったままを見せること。自然にできていたそれらが、少し恥ずかしくなった。

精神面の成長なのか退行なのかわからない。でもちよつとだけさびしかった。

このことに、あかるを見ていたら気がついた。

あかるはとっても優しくて面倒見がいい。でもそれを上手く伝えるのが苦手で。いや、苦手とかじゃなくて、意図的に避けているような感じでもあった。自分の優しさを隠すようにぶつぶつと言いながら、それでもきちんと助けてくれる。

優しいことは悪いことじゃないし、弱いことでもないのに、だ。

「人間ってむずかしいんだな」

かみさまだってよくわかんないけど。

「だったら、わたしにできることなんてほとんどないのに……」

実際、あかるにもみさきにもたくさん迷惑をかけてしまってる。

ご飯も温かいふとんももらってる。……でも、そういうことは、あの場所でも同じだった。

だけど。

今は。

かみさまだった自分の環境で、当たり前だったことを、ただの当たり前前のご飯を作ってくれなくなるようになっていた。

「ご飯を作ってくれなくなる。彼女、あの子が、なんの言葉もなく当然のようにわたしに与えてくれていたもの。」

気づけない。

気づけなかった。

あの頃には、数日前までは、気づけなかったことにも、今ならわかる。

あの場所に閉じこもって、一つの見方しかできなかった自分。偏った価値観の自分。

それを責めなかった彼女。

どうして、責めなかったのか。どうして怒らなかったのか。今ならわかる。怒られて当然のことばかりをしていた。

わたしは……どうしようもなく子供だったんだ。

「謝りに……行こうか」

赤色の鳥居が目に入った。

でも、まだちょっと自信がない。

わたしは頭の奥にぼんやりとしたものを押しこめたまま、歩き続けた。

鳥居をくぐらず、右手に山の木々を見ながら歩いていくと、川に突き当たった。

小来川。昨日、遊びにきた川だ。

今日も午後から行くらしい。ほんとはちょっと嬉しいんだけど、あれだけ嫌がってた自分を思い出すと、恥ずかしくて口にできない。でも、ほんとに楽しんだ。だから、たくさん暑くなってほしい。

河原には下りないで、流れに沿って歩いていく。方角だと南。左手の空に太陽が見えた。

川の対岸の深い緑をしげらせた木々の中に、ぼつんと赤色屋根を

見つけた。確か小学校だ。こっちの街にはここしかないから、あかるとみさきも通ったんだろう。

二人の小さい姿を思い浮かべる。

想像できた二人は、今となんにも変わってなくて。突拍子もないみさきに、ため息をつきながら付き合うあかる。それでいて、どっちも楽しげな顔をしていた。なんだかおかしくなった。

線路のフェンスが見えて、その手前に茶色の可愛い橋があった。渡れば小学校に行けるのだろうけど、わたしは駅舎がある左手方向に曲がった。

左右に広がる田んぼに挟まれたあぜ道を進む。左の方に見える家のどれかがあかるの実家なのだろう。家　心がじんと絞まった。駅に着く。

ちようど電車が入ってきて、キキイと甲高い音が耳の奥まで伸びてきた。新しいなにかがやってきた嬉しさ。それから、どこかへ行ってしまふ寂しさ。それらがないまぜになる。

そのまま線路に沿ってまっすぐ行けば、また川に突き当たった。あの子ねこを助けようとして溺れた川だ。あときの恐怖が湧きあがる。冷たいものが背筋を駆け上った。

そんなとき。

川沿いの道の先から、風に乗って温かな匂いがやってきた。

「あっ」

手を大きくふって駆け寄ってくる姿。

「みさきっ」

ぎゅっと抱きつくと、ひざを折って頬ずりしてきた。いつものみさきだ。その後ろから、ゆっくりした足取りであかるもやってくる。みさきは半袖半ズボンで、いつも動きやすそうな服装だ。わたしのは下がひらひらしてて、ちよつと動きにくい。あかるは半袖シャツに長いズボン。暑くないんだろうかと、ずっと気になっている。

「面白い物？」

わたしが訊くと、みさきはこくりとうなずいた。

「ココちゃんも来る？ 疲れてるなら、あーちゃんの背中でもいいよ」

「あのね……」

苦笑するあかる。

「だいじょうぶ。わたしも行く」

言って、あかるの左手を握る。

「ふふ、ココちゃんはあーちゃんの手が好きだね」

「うんっ。だって」

「ん？ だって」

だって、

「内緒だっ」

やっぱり、口にするのは恥ずかしい。だから、ぎゅっと腕に抱きつくようにした。

「歩きにくいよ」

顔を上げて、瞳を見つめる。うん、いつものあかるだ。

わたしはそれを確認して、半歩だけ離れる。

それでも十分なほどに、繋いだ手は温かった。

貳 温もりのなか

お昼ご飯は川べりで食べることになった。

みさきとあかるが作って、わたしはあかるに手伝ってもらいながら、お弁当箱に詰めた。

太陽が真上に届いた頃、川に到着した。

石があんまりとがってない場所を探して、空色のシートを広げる。その上に、お弁当を広げていく。河原に花が咲いたみたいだった。

そろっていただきますをする。

お箸はみさきの家で使ってるやつと同じで、黄色いプラスチックのやつだ。本当の家にあるお箸と似た形で使いやすい。甘い金時豆だって上手につまめる。

それから、あかるが作ってくれたたまご焼。きれいなきつね色をしていて、口に放りこむとふわりととろける。ひと噛みすれば、たまごと砂糖、ミルクが交じった甘い香りに包まれた。舌までとろけちゃいそうだ。

そんなことを口にするよ、

「これくらい練習すればできるようになるよ」

と、あかるはおにぎりをぱくりと口に含んだ。照れ隠しだ。もう覚えた。

「あーちゃんも花嫁修業してるんだね」

「……」

みさきがくすりと言えば、なんとも言えない、そんな目でみさきを見返した。でも、えへへとにつこり笑いが返ってきたのを見て、小さくため息をついた。

「未咲は意外と料理上手だからね」

あかるの反撃。

「そりゃもうあーちゃんとココちゃんに食べてもらうことを思ったら頑張らないと！ 愛の力ってやつだよ！……」

よくわからないけど、すごいと思った！

その後は昨日と一緒に、川で水と戦った。

昨日より少し冷たく感じたけど、慣れたのかもしれない。怖くなかった。

お昼まで外で干してた水着は少し温かくて、でも水に入るとべったりと肌に張りついてきた。昨日はその感触がちょっといやだったけど、今日はそれほどでもなくて。

「ココもだいたい慣れたかな？」

あかるの微笑みが嬉しかった。

夜になった。

ぐっしょり濡れた後に、お湯のシャワーで身体を洗い流すと気持ちいい。昨日知ったことだ。

このときの温かさは、自分の家がある安心感とか、タオルケットにくるまった温かさには似ている。

ご飯が終わった後、あかるがもう一度入ると言ったからついて行ったら、髪を洗ってくれた。

「長くてきれいな髪だね」

そんな言葉があれば、やっぱり長くてよかったなって思えた。

あかるの妹になれたらなと思った瞬間、だけど冷たく胸が痛んだ。真冬の雪の冷たさだ。しんしんと降る雪の中、無感情な白さの上に素足をのせたときとか、早朝の、刃みたいにするどく張りつめた空気を吸ったときとか、気持ちよさの一方にある突き刺さる痛みと同じもの。

軋んだ心の奥で、今朝、頭の奥に無理やり押しこんだあの想いが浸み出してきた。

彼女は、一人で寒くないだろうか……。

「悲しい目、してる」

指摘されて、誤魔化すように湯船に逃げた。口をお湯につけて、

ぶくぶくと泡を出す。鼻がくすぐったくなった。

「なんでもない」

自分の心に嘘をついた。

ドライヤーで乾かしてくれた髪は、しっとりとしていて、でも羽のように軽かった。こんな気持ちを知ることができるのなら、もっとがんばるから、一緒にいさせてほしい。

そんなことを思う気持ちもあったけど。

だけど。

それでもわたしは……………。

みさきがお風呂に入ってる間、居間で白ねこの相手をしていた。

あかるは壁際で読書。

小難しそうな顔をしてるなと思ったら、子ねこがわたしの手をすり抜けてしまった。

掃き出し窓のところまで行って、にあ、とふり返った。

「あ、こらガラスひっかいたらだめっ」

この家の先輩としてちゃんと注意した。

「外に出たそうだね」

「帰りたいってことか？」

「どうだろうね。ねこのことはわからないよ。ココならわかるんじゃないの？」

肩をすくめて、また本に戻った。

わたしは黙って、ねこのところに行って抱え上げる。

「お前も帰りたいのか？」

なあ。答えがあった。

「そっか。そうだよな。帰る場所があるんだな」

自分がどんな顔をしてたかわからないけど、上手く笑えてたらしいと思った。

窓を開けて、縁側に下ろしてやる。

にあ、また鳴いて、音もなく闇の中にもぐりこんでしまった。最後に小さく、白いしっぽが揺れたのが、ちょっとだけ心を撫でてくれた。

「えらいね、ココちゃん」

いつから見てたのかわからないけど、パジャマ姿のみさきが立っていた。控え目な微笑みを浮かべて、おいでおいでしてくれる。

腰を下ろしたみさきの胸に鼻をおしつけて、つん、とするのをこらえた。

いつの間にかあかるはいなくなっていた。

「逃げたんだよ」

「照れ屋さんなんだな」

くすりと笑い合った。

二階の部屋に行くと、でもあかるの姿はなかった。目を閉じれば、夏の夜の香りがして、その中にわずかにあかるの匂いが交じっていた。カーテンをめくると窓が少し開いていた。

「あかる？」

その向こうにベランダがある。服や水着が干してあった。

顔を出して、上を見る。闇の中、つぶらな星々が浮かぶ天幕が広がっていた。

吸いこまれるようにベランダに出る。屋根を見上げれば、一つの影があった。

手すりに足を乗せて、右手にあった雨どいを支える金属を使って屋根に上る。

「ココ」

あかるはちょっと驚いてるみたいだった。

隣に行きたい そう思っ

でも、思ったより屋根の瓦は冷たくて、素足に浸みるように絡みついてきた。ふらついてしまう。

「ほら、気をつけて」

手を差し出してくれた。導かれるように三角屋根の頂点まで上っ

て、左右に下る黒瓦を挟むようにして座る。

「ちよつと寒い」

「そんな薄着で来るからだよ」

後ろからわたしに腕をまわしてきた。だから、ひざを抱えて小さくなる。

「……………」

「うん？」

「あかるは……………あつたかいな」

優しいなと言ってても素直に受け取るうとしないから、わたしは違うことを言った。でもこの場合は同じ。伝える言葉はいくつもあつた。

「温かい、ね。そうだったらいいけど」

「……………」

「なんだか元気がなかった。」

「耳、おさえてくれたら聞こえなくなるけど」

普段あんまり意識していない三角なきつね耳。

あかるの手が触れる。すこしくすぐりたい。でも、その手はわたしの髪を撫でるだけだった。

「ココは……………」

長い沈黙。

「ううん、なんでもない」

もう一度、なんでもない。髪を揺らす手の動きは止まらない。ほふほふと二回、優しく手をおいた。

「あ、あのさっ」

ずっと前から訊きたかったこと、言いたかったことを口にしようと思った。声の上擦ってしまう。

「どうしたの？」

「……………あかるには、家族っているんだよな」

「うん？ いるよ。両親に、あともう一人」

「仲良しか？」

「どつだろつね。正直に言ったら、学校のこととか訊ねてくるのは面倒だつて思うときもあるけど、多分僕は、あの家のあの部屋なら、自分でいられるのかもしれない」

「わたしが知ってるあかるは本当のあかるじゃないのか？」

「まあ、だいぶ自分には近いと思うけど。それでも素ってわけじゃないよね。べつに息苦しいってわけじゃないし、息苦しいかったらしんどいわけでもない。少し気が楽かもしれないって、それくらいだよ」

「……それは、わたしが他人だからか」

「え？」

「あかるがあかるでいられないのは、ほんとのあかるを知らないわたしがいるからなのか？」

「それは」

「少しだけ間があつた。」

「違うよ」

「あかるでも、悩むことがあるんだな」

「……。そりゃあるさ。悩まない人なんて、いないでしょ。かみさ

まだつて、悩んでる」

「……」

今度はわたしが無言になる番だつた。

「僕は悩んでるわけでもないんだけどね」

と、あかるの吐息が髪へと落ちてきた。

「悩まないことが怖くて、無理に悩んでる。悩むだけ時間の無駄だとわかつてても、悩まない人間でいるの事を恐れてる」

不自由で不器用で不格好だね、と。

「そんなことないっ」

「っ……」

「そんなこと、ない。言葉が上手くなくても、優しさが不器用でも、生きてるのが不格好でも、それでも、わたしが知ってるあかるはちゃんと考えてた」

「……」
「全然、かつこ悪くなんてなかった。朝が少し弱くて、甘えるとため息をつきながら頭を撫でてくれて、散歩に行きたいって言ったらなにかと言い訳しながら一緒に来てくれて、お風呂に入ったらあったかいシャワーを顔に向かってかけてきて、髪を丁寧に乾かしてくれて、寝るときに傍にいたら柔らかく抱きよせてくれた。手を握ってほしくなったら、いつだって差し伸べてくれた。わたしはそんなあかるしか知らないけど、でも、わたしにとってのあかるはそんな人だった」

「……」
「あとは、ちょっとだけ不器用で、少しだけ一生懸命じゃない、そんなところ」

多分、わたしは今ふり返れない。

なんだか、顔が熱い。雨上がりの水たまりを覗きこんだら、真っ赤な花が咲いているように見えるだろう。そのくらい。

これが恥ずかしい、なのか。ううん、違う。

恥ずかしいよりも、

「一生懸命なんだね」

「うっ」

いい当てられて、言葉に詰まった。

「べ、べつにそんなんじゃない」

ない　とは言えなかった。

「だって、わたしはあかるが好きだつ。あかるに会えたのが嬉しくて、みさきだって大好きだけど、あかるも大好きだから」

だからわたしは、あかるが悩んでしまうことを止めたりしない。

その代わりに。

「あかる、もう少し、夜風に当たっててもいい？」

そうお願いをした。

「寒いでしょ？　僕もここにいるよ。あと、寝ちゃったりしないよ
うにね。落ちるから」

最後に一言つけ加えるところが、あかるらしい。

「ココ」

「ん」

「訊かない方がいいことだったらごめんだけど……ココにもいるんだよね」

なんのこともかはずぐにわかった。

家族だ。

「お父さんとお母さんは、覚えていない。でも、優しくしてくれたお姉ちゃんはいたよ？」

「それって」

「あ、ううん。そうじゃなくて。かみさまのあの子とは別の人。天使で悪魔みたいなお姉ちゃんがいる、小さかったわたしに色々教えてくれた」

その人の前で同じこと言ったらきつと怒るだろうけど。怒って、激辛食事週間になるだろう。

「そっか」

「それに、さっきあかるが訊こうとした子。……友だちがいるんだ」「友だち？」

口にしたけど、ちょっと違う。彼女は、わたしがわたしになっからずつと一緒だったから。

多分 家族。

「うん。大切な友だち、家族だ。ずっとずっと前からの知り合いで、多分わたしが生まれたときから一緒だった」

「へえ。どんな子？」

「えっと感情表現が控え目な可愛い子だ」

「……そっか。ココが可愛いって言うんだから、きつととっても可愛いんだろうね」

「もちろんだ。きつねの姿で丸くなって抱き枕になってやっやうくらしいに可愛いんだぞ」

「なんだか楽しそうだね」

「……。うん。そんなときが……あつたんだ」

誤魔化す。誤魔化して誤魔化した。でも、わたしは……。

「だいじょうぶ」

声が降ってきた。

「僕が知ってるココなら、だいじょうぶだよ」

あのとき、わたしがねこを一人で救えなくて泣いたときには、聞かなかつた言葉。

「今のココなら、ちゃんと取り戻せるよ」と。

そんな嬉しさを思えば、でもやっぱり、つららが胸をつついてきた。それは、そう……喧嘩して気まづくなった、そんな痛みに似ている。ちくちくと、何度も夜風が、肌と肌のすきまから刺してきた。あかるが遠くへ行ってしまふ予感、だった。それが、わたしにはさびしかつたんだ。

参 雨

この日も、いつもと同じ一日が始まるのだと思っていた。
でも、違った。

「あ、あかるは明日帰っちゃうのか……?」

朝食のときのこと。あかるがわたしたちに、明日家に帰ることを切りだした。一瞬、手の力が抜けて、持っていたお茶碗がかちゃんとテーブルを叩いた。

「だいぶ長くお世話になったからね。夏休みだからって、帰らないわけにもいかないし」

「そっか。なら仕方ないよね。また来てくれる?」

「そうだね、でも冬だと雪降るし」

「あーちゃん寒いのが苦手だもんねー」

「わたしも寒いのは……うっ」

「じゃあ、今度はあたしとココちゃんであーちゃんの家遊びに行こうかな?」

名案とばかりにみさきが手を打った。確かにそれは面白そうだ。

「いいなそれっ。わたしもあかるの家でぬくぬくしたい」

「……みさき以上に危ないのがあるけど、いいの?」

「え……い、犬とかいるのか? 負けないぞ!」

「あー、いや。とりあえずココじゃ勝てない相手かな?」

みさきも知っているのか、なんとも言えない顔をしていた。

「まあ、それでもいいなら遊びに来なよ。できれば親がないときの方が楽だね」

「じゃあ連絡よろしく」

こんな話をしている間も、やっぱり、どこか胸の奥が痛んでいた。きしきしと。

長く生きれば、心が古くなれば、鈍くなるものだと思っていたのに。別れるということが、日常が変わるとということが、こんなにも

痛くて悲しく感じるのはどうしてなんだろう。

昼間には最後の川遊びをした。

そして最後の一緒の夜ご飯はカレーだった。

前は食べるだけだったから、今回は手伝った。一生懸命だ。あかるがむいたじゃがいもを、同じ大きさになるように切ったりした。

なんだけど……。

「め、目がっ」

「たまねぎは涙出るから気をつけてね、ココちゃん」

「言つの遅いぞ……みさきい」

わざとに違いない。未咲がなんだか楽しそうな顔をしていた。あかるも心配しているようなそぶりを見せながら、笑いをこらえていた。

「もう。ほら、包丁置いてじっとして」

それでも、あかるが濡らしたハンカチを目もとに当ててくれる。

「っ、次こそはっ」

でも十秒くらいしかもたなかった。

「いただきますだね」

「いただきます」 「いただきますっ」

夕食と片づけが終わって、縁側から空を眺めていた。

涼しい風、虫の音。犬の遠吠えが聞こえた。夜色に溢れるほどに浮かぶのは、何光年も離れているらしい星たちの光。遠い。温もりが届かないくらいに冷たい色をしている。あんなにたくさん星があるのに、お互いは、涙が出つくすほどに遠い遠い隔たりを持っている。

「ココ、お風呂入らないの？」
みさきがお風呂をわかしてくれたのだけど、わたしは動けず
いた。

訊いてきたあかるもそうだったし、みさきも。

無言で、静か。みんな、居間から動きたくないと思っていた。

「うん、入る……」

みんなで入ろうって言おう 思った、そのとき。

びっくり と。

知らない力が勝手にわたしの耳を跳ね上げさせた。

「ココ？」

なんだろう 嫌な感じだ。よくわからない焦燥感。しっぽが逆

立つ。ぶわりと毛が広がった気がした。届かないところを弱く引
かかれてるような、もどかしい感じだ。

「ん」

「っ」

「ココっ」「ココちゃん!？」

ふたりがわたしを呼んだ。でも身体は止まらなかった。縁側から
地面に着地、小さな砂粒が足裏のやわ肌を刺した。構わない。もう
ひと跳び。

庭の垣根を超える。かみさまのちよつとした力。

なのに、間に合う気がしなかった。

全然、間に合わない。

道路に出て右手の方を見た。

真っ黒な山の影を見上げた。

その一部に、赤色が見えた。

夜なのに、真っ赤な。

「火事だ」

どこかから声が聞こえた。わたしが見た光景を、紛れもない事実

だと突きつける言葉。

火事。言葉は聞こえていた。なのに、わたしの身体はもう言うことを聞いてくれなかった。

わたしは、夜の中、冷たいアルファルトの上にただ茫然と立ち尽くしていた。

神社が、わたしの家が燃えてしまう。

どうして、どうしてかみさまは

「ココっ！」

声が聞こえた。わたしの知ってる声。

「……………あかる」

「ココ」

「あかる、わたし、わたしはどうしたらっ」

「ココは、どうしたいの？」

「わたしは……………やだ」

あの場所が消えるのは、いやだ！ そんなの嫌だっ。

「でも、やだけど。でもおっ」

「だったら　でもじゃないよっ！…！」

腕が掴まれた。痛いほどに強くて、熱い。ふわりと心が広がったように感じた。

「あかる」

うなずき返してきたあかる。

「行くよ。行かないと駄目だ」

それだけ。言葉少なに、わたしの手を引く。

最初はゆっくり、すぐに速くなって。あかるは背が高いから、一歩が大きい。わたしはがむしゃらと言っていていくらいの走りだった。水の中をもがくように、ただ目的だけがわかっていて。それを悟っても、息苦しさは消えない。

「でも、あかる　わたしじゃ、着いたってなにもできない」

「どうして？」

「だって、だって」

わたしは嘘をついていた。

「わたしはかみさまなんかじゃないからっ」

ほら、嘘ついてたって、逃げていたって。わたしはこんなにもみじめだ。ただ自分のことばかり考えて、その場のことだけを考えて、隠したままでここまで来た。

「……………」

あかるはなにも返してこなかった。怒りもしないし、呆れもしなかった。

「あかる……………」

「知ってたよ」

と。ただそれだけだった。

「え？」

「稲荷神社のかみさまはきつねじゃない。きつねは、かみさまの使いでしょ？」

知ってたよ、と。

じゃあ、ずっと隠せてたって思ってたのは……………わたしだけ？

あかるは、もっと前から、知っていたの？

「でも、力があるって言ってたのは嘘じゃないでしょ？」

「ちから」

「『雨降らせたりするのが上手にできない』って言ってたよね。あれも、嘘だったの？」

「違う」

降らせる方法は知ってた。知ってるけど、できないんだ。したくても……………」

「ココ、川遊び、楽しかった？」

「えっ？」

「少しでも楽しいって思ったんなら、それを思い出してみるのもいいかもね」

あかるが、笑ってる気がした。顔は見えなかったけど、そう思った。

「……………」
「……………」
……………。

「あかる」

「うん」

「わたし、行かないと」

「うん」

「その……………」

「うん。いいから。帰ってきてからでいいから、ほら」

帰ってきてから　それはわたしの居場所がまだあるということ。
でもそれは、ちょっとの甘え。

わたしには、ちゃんとした家がある。守りたい場所があった。だから、やるんだ。

地を蹴った。

最後の最後まで、ぎりぎりのところまであかるの手を握り返していた。

温かった。

温かった。

でもわたしは。

、あかる。

嬉しかった。悲しかった。それでもいい。笑える未来のためなら、それでよかったんだ。

悲しみだって、痛みだって、乗り越えられるはず。

涙は、雨になって流れてしまえばいいんだ。

その夜、静かな雨が街を包んだ。

泣いてなんかない。

守れたのだから、この手で守れたのだから、泣く必要なんてなかったのに。

わたしはやっぱり……。

神社が無事なのを確かめた。彼女が無事なのは、鼓動が教えてくれた。でも、姿を見に行くことは怖かった。そしたら、わたしの身体はまた逃げ出してしまった。

どこへ？

わからない。強くなったって、成長したんだって　そう思っていたけど、全部、わたしの思い込みだったのかもしれない。

そう思ったら、また悲しくなってきた。

鼻の奥がつんとして、降り続く雨は容赦なくわたしの心を苛んだ。ただ形だけの力であることをつきつけるかのように。

どうしよう　わたし、どうしたら。

そう思ったら、

「ココ」

と、わたしの新しい名前を呼ぶ声が聞こえた。顔を上げれば、夜色の中に、紺色の傘と空色の傘が浮かんでいた。

「.....あかる.....みさき」

「風邪、ひくよ」

「帰って、お風呂入ろう？」

「ココ」「ココちゃん」

その言葉を聞いた瞬間、わたしはまた、どうしようもなく泣けてきた。抑えられなくなった。

でも、でも、

「これは泣いてるとかじゃない。悲しいんでもない。ただ、雨が」「うん。わかってるよ。だから、ほら」

差し出された左手。

最後になるかもしれない　よぎる思い。

だけどわたしは、くしゃくしゃになっっているだろう顔で精一杯笑

って その手を取った。

誰も認めてくれなくても、自分の単なる思い込みでも、よかった。ただ、そうできたという一瞬の心の明るさだけが、いつか強さに変わるはずだって。

わたしの背を追う雨音を聞きながら、今の家路を歩き始めた。

肆 さよならの刻

翌朝は快晴だった。色を塗ったみたいな青色が広がり、わたがしみたいな白雲がぼつんと迷子になっていた。気持ちいいほどの青空なのに、どこかよそよそしい色合いに見えた。

カーテンを全開にして窓も開けば、空虚な風が部屋に流れこんできた。

「うん」

誤魔化すように、たくさん吸いこむ。身体の中がすうと麻痺したみたいになつて。

「あかる！ 起きろ朝だぞっ！！」

わたしの日課になつた朝のお仕事。相変わらずあかるは幸せそうに眠っている。

「…………ん」

「ん、じゃないの！ 朝！ 起きるのっ」

「んー、あ、おはよ。」

「起きた？」

「うん」

「そうかつ。おはよう、あかる」

あかるの着替えを待つて、わたしたちは二人、みさきの待つ階下へと向かった。近づくにつれて鼻を刺激する、温かな匂いにしつぽを揺らして。

くすんだ青色の屋根を構える駅舎に入ると、両手で数えられるほどの人が待ち合い室にいた。一時間に一本しか電車が来ないから、ぎりぎりの時間まではホームに出られないらしい。

ホームに行つて、通過電車を近くで見たかつたのに……。ちよつと残念だ。

「未咲とココは入場券いるよね？」

券売機の前であるがふり返った。自分の切符はもう買ったらしい。

「……入場券がいるのか？」

「それがないとホームに出られないんだよ。ココちゃんもホームで見送るでしょ？」

「うん！」

「じゃあ、二枚だね」

小銭がかちやかちやと機械に飲みこまれていった。

「あ、待って」

「どうしたの、ココ？」

「ボタン押したい」

前々から一度でいいから押してみたいと思っていた。

「入場券って光ってるボタンだよ」

「うん」

あかるが場所を譲ってくれた。えいっと押すと、ピツと鳴いて、細長い銀色の口（お札入れらしい）がかしゃんと閉じた。

ややあつて切符が出てきた。ちゃんと二枚。「天が丘」「入場券」と記されている。

「ありがとう、あかる！ はい、みさきっ」

「ありがとう、ココちゃん」

少し黄色くなった蛍光灯に向かって切符を掲げてみた。

記念に持って帰りたくなつたけど、そんなわけにもいかないからお守りと一緒に胸元で握ってることにした。

そのままじっと待っていると音楽が鳴って、並んだ人たちに続いてホームに出た。駅員さんに切符を見せるのが、少しだけ恥ずかしい。屋根を避けて空を見上げれば、まだ完全に目覚めていないらしい柔らかな日が輝いていた。

「ほら、いくよ」

わたしの手を取って歩き出した。電車が来るのは反対側みたいで、

ホームの途中にある階段（跨線橋というらしい）を上り下りした。
屋根があるのは階段近くだけだったから、ホームの端に向かつて歩いていくと、すぐに空の下に晒された。ふり返れば、まばらな人がぼつぼつと立っている。出かけるらしい人もいるけど、寂しげな顔をする家族の姿もあった。

「……………」
「……………」
「……………」

まだまだ話したいことはあったし、言っておきたいこともあった。今しか言えないような気がしたのに、口は小さくしか開かなくて、出そうと思っただ言葉も形にならず、かすれた音にしかならなかった。「どうしたの？」

あかるが声をかけてくれたのだけど、やっぱりなにも言えなかった。首をふるだけ。

そうこうしているうちに時間は来てしまった。暴力的な金属音を響かせながら、冷たい車体が右から目の前に滑りこんできた。

さびれたねずみ色に、緑の横線が入っている。

開いたドアが、あかるを連れ去ってしまう怪物みたくに見えた。

「ココちゃん」

みさきに言われるまで、あかるの手をぎゅっと握りしめていたことにも気づかなかった。

「……………」

力を抜くと、するりと手が離れていった。密着していた表面を風が通り抜けていって、無性に冷たく感じた。「あ」「待つて、と声を掛けようとしたのに、あかるの手が、わたしの頭に載せられた。そのせいでなにも言えなくなる。ゆっくりと、丁寧で優しい手つきで、なでてくる。顔を上げれば、あかるはどうしようもなく優しい笑みをわたしに向けて、手はそのままに未咲に向き直った。

「じゃあ、行くね」

「うん。今度遊びに行くから」

「着いたら電話するよ」

「了解」

仲良しの二人はあっさりと言葉を交わしただけだった。

「ほら、ココちゃんもあーちゃんにお別れしないと」

みさきがわたしの隣にしゃがんで、「ね？」と微笑みかけてくれた。ちよつとだけ、勇気がわいたけど、力はでない。

「……ココ。お別れって言っても、もう会えなくなるわけじゃないんだしさ、ココが会いに来たくなったら来てもいいんだよ？ みさきに頼んで電話してくれてもいいし」

「でも」

うつむいてしまう。あかるの顔をちゃんと見られない。

だって、わたしは人じゃないから、いつだって会いに行けるわけじゃない。

あかるにも都合があるだろうし、多分、とつても遠い。

その事実を思ったら、簡単にさよならなんて言えなかった。

ぎゅっと目をつぶろうとしたら、足元に大きな影が落ちた。顔を上げると、わたしの目の前に、あかるがしゃがんでいた。温かい色をした瞳がちよつとだけ緊張している。それがわかるくらいに、あかるたちと仲良くなって、わたしも成長したみたいだった。でも今は、そのことが悲しかった。

「ありがとう、ココ」

「えっ？」

突然の言葉。あかるの手が、わたしの肩に置かれ、それから両手を握ってきた。

「僕は、ココと過ごせて楽しかった。色々あったし、大変なこともあったけど」

「ココ、笑ってよ」

「う」

そんなこと言われたって、上手く笑える自信がなかった。きつとぼろぼろの顔になる。

「ココちゃん、笑わないと、あーちゃんが泣いちゃうよ?」

あかるはなにも言わなかった。

階段の方を見て、一瞬だけ悲しげな顔をしてから、電車に乗り込んでしまった。ドアのところ立って、わたしたちを見ていた。ホームよりもわずかに高い車体が、とてつもない高さだった。

みさきがわたしの肩に両手を置いた。

あかるはなにも言わず、待っていていた。

だから、わたしは言わないと。伝えないと。

「あかる」

「うん」

「あかる」

「うん」

「あ、あのだなっわたし、わたしはっ」

「うん」

「
」

果たして、その言葉がちゃんと伝わったかは、わからなかった。

閉じたドアに遮られて、届かなかったかもしれない。車掌さんの声で聞こえなかったかもしれない。わたしの声は、言葉になっっていなかったのかもしれない。

でも、でも、

あかるは、確かに笑ってくれた。

わたしが知ってる中で、一番の笑顔。あるとき、あの雨の日、あの屋根の下で、わたしを撫でたあかるの顔と 同じ笑顔だった。

電車はホームに滑りこんで来たときとは違ってかわって、鈍く静かに出ていった。

まだ、電車は見える。でも、手をふっても届かない。そんな距離。

あかるは、この街を去ったんだ。

「行っちゃったか」

「そうだね」

「……………みさき」

「うん？」

「あかるがさ、言ってたんだ。探し物をしにきたって」

わたしが川でおぼれた翌日の夜だ。あかるの話を教えてもらって
いたときに、ぽつりと漏らした。わたしが「まだ見つかってないの
か？」と訊いたら、あかるは曖昧な笑みでわたしの頭をなでただけ
だった。

「見つかったのかな」

「見つかったから、じゃないかな？」

その通りだと思った。見つかったから、あかるは笑って離れるこ
とができたんだろう。

「なら、もしかた見失っても、だいじょうぶなんだよな？」

「そうだよ。あーちゃんには、この街があるんだから」

「なら、この街を、あかるの知ってるままの街を 守ってかない
と」

「うん。いつ来てもいいように、残していかないかね」

と、みさきは、わたしの顔を見て言った。

「？ なんか顔についてるか？」

「ううん、そうじゃないよ。街っていうのは、景色だけじゃないっ
てこと」

「……………。……………わ、わかんないぞっ」

「ココちゃんもきつとわかるようになるよ」

「ああつみさきまでいじわるするのかつあかるの代わりにみさきが
いじめるのかつ？」

「まあまあ、これは照れ隠しなんだよ」

なんて、みさきは言う。

そんなあかるみたいなこと言われたら、わたしには返す言葉がな

いというのに。

でも、言葉じゃなくても、伝えられる方法はある。
見上げた空は透き通って、きらきらと輝いていた。

やっぱり、どこことなくものさびしい一面の青だったけど、遠くの方には雲があった。

あかる。

心の中で、小さくつぶやいた。

「あ
」

みさきが声をもらした。

駅の人々が顔を上げた。

音もなく、雨が降り出した。

天気雨。

太陽の光が、いくつもの光の柱になって地上に伸びる。天使の階段だ。

電車が去った方向にも、同じように雨が降っている。

そして線路をまたぐように、大きな虹が架かっていた。

家路へと続く幻のトンネル。

雨はやわらかに降り続く。

だけど、今降る雨は、決して悲しみの涙なんかじゃない。

それは、

ただ一人へと届けるために、静かに静かに、小さな想いの代わりに流される雨だ。

終　　ゝ物語の始まりゝ

そうして僕は、最後のページをめくり終えた。

あの幼かった日、突然の雨に見舞われて神社で雨宿りさせてもらったとき、僕と未咲以外の誰かがそこにいた。

『アメたべるかなあ？』

『変なもの食べさせたらだめだよ』

広げたアメの包み紙の上に、みかん色の丸いアメを載せた未咲。

ややあつて、鼻先を近づけてきた、その子。

綺麗な金色の毛並みをした、子ぎつねだった。

このことを帰りの電車の中で思い出した。突然降り出した天気雨によつてだ。綺麗な虹を見て、その中の黄色とか、窓の外の雨粒が、多分記憶を刺激したんだろう。

あの日も天気雨だった。

だとしたら、あの日落としてしまった五円玉は、きっと、僕の知っている誰かの手に渡っていることだろう。

ずっと持っていたんだ。

コンコン、とノックの音があつた。

「はい」

返事をすれば、カチャリとドアが鳴つて、薄く開けた隙間から少女が顔を覗かせた。妹の咲ひかりだ。中学三年、受験生としての義務である夏期講習から帰ってきたらしい。

「どうしたの？」

「読みたい」

「はい？」

訊き返すと、いきなりずかずかと侵入してきた。鞆は持っていないが、制服のままだった。ココより少し高いくらいの小柄だが、僕よりも伸びた髪は、僕以上に女の子っぽい。

勝ち気な目が、出会ったばかりのココよりもつり上がっているが、これはいつものことだ。

この妹が優しい目をするのは未咲と二人きりのときくらいだ。本人はそれを隠せてるつもりらしいが、僕は知っていた。

「だから、手紙が読みたいの!」

ぶくうとふくれて、偉そうに腰に手を当てる。とりあえず人に物を頼む態度じゃない。

「なにか言う言葉があるでしょ?」

「う……」

言葉に詰まる仕草は、ココとよく似ていた。

「お、おねがいします」

頭も下げず、棒読みだった。

「うん。やだ」

「っ　だ、だましたっ!」

いや、だって恥ずかしいし。それに見せる義務もない。素直に訊いてくるなら、少しくらいは話を聞かせてもいいと思っていたのだけれど……。

「べつにいいじゃないそれくらい。お姉ちゃんの記事にケチつける気もないし、かみさまが書き加えたところも気になるし」

「……なんで知ってるのさ」

「みーちゃんと電話するときのお姉ちゃん、楽しそうだし。声だつてダダ漏れ」

気づいてないの? 微妙にばかにしたニュアンス。咄はいつだってそうだ。もつと姉に対して敬意を抱いてもいいと思う。まあ、そこまで胸張れる姉でもないけど。

「でもだめ」

「ケチんぼ」

「まあ今回は内緒だよ。というか、未咲に直接訊けばいいでしょ」「みーちゃんでもいいけど……お姉ちゃんから聞きたいの!」

いや、聞きたいの! とか言われても。駄々っ子には甘くない僕だ。

「ふん、だ。お姉ちゃんのけちっ」

「それさつきも言ったよ」

「うっ……」

とりあえず、悪口言うにも語彙力はつけるべきだと思った。

「いいもん。みーちゃんからコピ―を送ってもらってるからそっち見る!」

「え」

「というのは嘘。それに冬休みに、かみさまが来るんでしょ?」

「まあ、ね。あ、でも、あの子がかみさまじゃないよ」

「へ?」

なに言ってるのこいつ、みたいな顔をする。だから、せめてもうちょっと女の子らしくしなさい。これと比べたら未咲が十分に女の子で、なんだか泣けてきた。咲も未咲が好きなら、もっと見習えばいいのと思う。

まったく誰に似たんだろうか……というのは自分の首を絞めるだけ。

「かみさまじゃなくて、ココっていう可愛い、女の子だよ」

「きつね耳ときつねしっぽの生えた?」

「うん」

女の子という部分を強調したつもりなのだけど、咲は完全にスルーしてくれた。未咲ならスルーしつつも、気まぐれにつっこみを入れるだろう。

「ふーん。かまない?」

「咲の方がかみつきそうで心配なんだけど」

「……どゆ意味?」

沸点の低いところとか。

「まあ、まだまだ勉強中だし、仲良くなつて色々話してみたい
と思うよ」

どっちにとつても勉強ということだ。

「そ。じゃあせいぜい楽しみにしようかな」

「素直じゃないね。なんでそこで、せいぜいなんて言葉が出てくる
のさ」

「誰かに似たの!」

それくらいわかれ! と。鏡には意地でも目をやらないことにし
た。

「つて、ココが来るって言ったけ?」

未咲との電話じゃ話してないし。なんで知ってんだらう。

「さつきみーちゃんから電話あつたもん」

「……僕に代わらずに切つたの?」

「呼んだけどお姉ちゃん返事しなかつたし!」

……そういうときこそ部屋をノックしてくれ。

「二人でおじやまするからよろしくお願いしますだつてさ」

「はいはい。あとでメールしとくよ」

「うん。ちょっと残念だけど、とっても楽しみだね。ちっちゃい子
が二人」

「え?」

「あ、ううん。なんでもない」

ぱたぱたと両手を振る。でも目は僕を直視してこなかった。下手
くそな嘘をつくときはまだ可愛いというのに。口を開けばあーだこ
ーだ、と。

……まあ、いいか。口を開かない不器用なものもあるんだし。

「なんだかお姉ちゃん楽しそう。……ずるい」

「いやずるいとか言われても」

返答に困ると、にやりと笑った。小悪魔的な笑みだ。

「行って正解だった?」

光るが投げかけてきたのは答えを見透かした問いだったから、

「内緒」

やっぱりそう答えておいた。

ずるい、ケチんぼ！ 最後にそう笑って、昉は部屋を出ていった。部屋が、台風が去ったあとみたいに静かになる。この場所だけでは、素の自分でいられると、僕はココに言った。

確かに、昉と接するときの自分は、結構考えなしに話している。でもそれは、部屋にいるからとか、そんなんじゃないのだと気づいていた。大切なのは、場所じゃない。

昉が出ていくと、見計らったように携帯電話が鳴った。

未咲だった。

『やつほー、あーちゃん。昉ちゃんは戻ったかな？』

さすが昉が懐いているだけはある。僕以上に昉の行動をお見通しだ。

「お察しの通りね。というかさ」

『なにかなー？』

電話の向こうから、未咲の忍び笑いが漏れてきた。

「昉をけしかけたよね？」

昉が僕に電話を渡さなかったのも、昉が僕の部屋にやってきたのも、きつと未咲の企みだ。どうせ、僕と昉が会話する機会を作ろうとしたとか、そんなのだ。

『姉妹のコミュニケーションを助けようと思ってねー』

「姉妹のコミュニケーションを助けようと思った」

『どうせ、こっちでのこと話さないだろうし』

「どうせ、昉にこっちでのこと話さないだろうし」

『……………』

「……………」

『あーちゃんのいじわるー』

棒読みで言われた。微妙に傷ついたから、ごめんと謝っておいた。「でさ、なにを話せて言うのさ。未咲の胸は相変わらずだったよ、

とか？」

でも、次の言葉はすぐにいじわるなもの。自分でいうのもあれだけど懲りない性格らしい。

『う……ふ、ふーん、だ！ 晁ちゃんには、「ちつさくてもいい。むしろちつさいのがいい」って刷りこんであるもん』

「……。で、なんの用件？」

『あう……あーちゃんは用事がないとあたしと電話してくれないの？ あたしとあーちゃんの仲なのに！』

「どんな仲だよ！」

つつこんでおいた。

『ふふっ』

嬉しそうだった。

「冬休みのこと？」

『あ、うん。それもあるんだけど……。あの夜のこと』
「どの夜？」

『えっと、神社が火事になった夜。ココちゃんが飛び出して、あーちゃんが追っかけていった』

「あれね」

今になって思い返すと恥ずかしいばかりだ。ココのを読むのも死にそうだった。それ以上に、自分が書いたやつを読み返すのがきつかったのだけだ。

『それぞれ。でさ』

「なに。実は火事なんて起こってませんでした、とか」
『…………』

返事がなかった。……え？

「未咲？」

『うん。……あの夜の火事を見た人はたくさんいたんだけど、神社に行ったらなんともなかったし、神主さんも、あの巫女さんも「なんの話？」って首を傾げたみたい』

「なにそれ」

『いやー、かみさまってすごいね』

隠すことなく未咲が笑った。こっちだって笑いたくなってきた。きつねにつままれた気分だ。

「じゃあ、ココが喧嘩したとかいうかみさまが見せたってこと？」

『かなー？ よくわかんないけど』

「……いい性格だね」

そのかみさまがここにいたら、思わず頭をぐりぐりしてしまいそうだ。

『そだね。それにかわいいし』

「へ？ 会ったの？」

『え？ あ……ううん。会ってないですよ』

「そ。まあいいけど。それで、冬休みのことは？」

『あ、うん。えっとね』

電話の向こう側。

そこは天が丘であることは確かで、僕には、なぜだか未咲が神社にいるように思えた。幼い日の天気雨のときみたいに、賽銭箱のところに腰掛けて。その隣には、ココがいる。

そのココが、お日様のようにまぶしい笑顔で、小さな手を差し出してきた。

僕は無意識に、左手を握っていた。

結局、僕もココも似た者同士だったわけだ。

僕はココをうらやましいと思っていた。

素直に感情を表に出せなくなっていた自分。新しい土地、転校先で、上手くコミュニケーションが取れなかった。そんな自分が嫌になって、ものさびしさを感じて、あの街に帰った。

そこで出会ったココの素直さに、僕の心は揺さぶられた。誰にも言わないけど、だ。

忘れていたなにかを思い出した気がした。

それはただ、あの雨の日の記憶を思い出したただだったのかもされないし、昔の自分を思い出したのかもしれない。でも、忘れていたあの頃の気持ちをふり返ることができた、それだけで十分だった。たぶん夏休み明けからはもう少しだけ素直になれる、そんな気がした。

そして、ココは同時に不器用だった。

僕の前ではそれなりに感情を表に出していたし、言葉にもしていた。でも、多分本質的にはかなり不器用なんだろう。

圧倒的に経験不足で、気づかないふりをしていたんじゃないかと、実際に気づけなかったんだろう。ココの言った通り、わからなかったのだろう。

でもココは変わった。短い間に、きちんと成長して、ココなりの答えを見つけたようだった。

それを僕は知っている。

ちゃんと、確認した。

あの手紙で、だ。

あの手紙。もしくは一つの物語。

僕が「3」まで書いて、ココが「4」をつけ加えた。語り手が「4」だけココになっているのは、それが理由だ。

最初の登場人（神）物のところは、三人それぞれの手書きだった。りしたのだけど……。

僕が「3」までを印刷して未咲に送り、彼女たちが「4」を加えて送り返してきた。それは物語であり日記でもあった。

僕が、幼馴染の少女と不思議な少女との三人で過ごした数日間の思い出の欠片は、集まり、一つとなって、再び僕の前に形をなしたわけだ。

最後の章をココに頼んだから、僕は『彼女の物語』だと表現したけれど、正しくは僕らの物語だったのかもしれない。

もしくは、僕も未咲も知らない、『ココと彼女の物語』^{だれか}なのかも。

もう一度、一緒にゆうパックに入れられていた手紙を読み直す。

未咲の案外に几帳面な字が、向こうでのその後を教えてくれた。

ココは一度、神社に帰ったけれど、その後もときどき遊びに来るようになったこと。

僕に最後の章を届けるために、必死にパソコンで打つことを覚えたこと。ローマ字は勉強したとかで知っていたらしい。

あとは漢字の間違いとかで、未咲が手助けしたこと。

その光景を思い浮かべれば、なんだろう……パソコン使うかみさまの使いつていうのはなんとも言えなかったけど、どことなく微笑ましかった。

同時にちよつとだけうらやましいなって思ったことは、だけど内緒だ。

分かれ際の駅のホームで、

「ありがとう、あかる」

と、ココは確かにそう言ったのだけど、その部分は書かれていなかった。

その言葉の後に、

「うん。どういたしまして、ココ」

「わ、わたしも どういたしました、あかるっ」

そんなやり取りも実際はあったのだけど、それはそれ、僕らだけの記憶に留めておこう。

絶対に、忘れない。

もし忘れても、これを読めば思い出すから。

だから僕は、この物語を、今、この手で閉じよう。
。本当に消えないものは、いつだって心の中にあるのだから。

終り ― 物語の始まりの頃 ―

あかるが帰ってしまった日の夕方。わたしは、みさきにもさよならを言った。

本当はもつと一緒にいたかったけど、そういうわけにもいかないから。

「ありがとう」

手をふって、笑顔を浮かべて、わたしはあの家を後にした。

人の姿のまま、神社の鳥居をくぐった。いくつも並ぶ朱色の鳥居を通り抜けて、長い長い階段を上って、本当の家に、辿り着いた。文字通り、辿り着いたといった感じで、何度か引き返そうと思ったほどだった。でも、背中を押してくれた人がいたから。未咲の笑顔を思い浮かべて、首からかけたお守りを握って、わたしは歩いた。拝殿のさらに向こう、本殿へと向かう。

わたしと彼女しか知らない秘密の道を通って、二人の家に入る。家というよりは部屋だ。小さな畳の間。

その真ん中で、彼女はわたしに背中を向けて座っていた。真っ白な、雪みたいにきらきらした髪を畳に垂らし、身につけた白の和服は少しも揺れることなくわたしを迎えた。

無言。入ってきたわたしをふり返ることもしない。

「…………た、ただいま」

わずかに、髪が揺れた。

「…………」

「あ、あのね」

「…………」

「…………聞ってる？」

「…………い」

「え？」

「おそい」

ふり返ることなく、彼女はぼつりと言った。怒っていた。平坦な調子の声に、確かに感情がこもっていた。

あの日、ちよつとしたことで、口喧嘩になってしまった。そのときと同じ口調だった。

あときはただの、ぶつきらぼうで無感情な言葉にしか聞こえなかったのに。それに腹が立って逃げ出したというのに、いま思えば……。

そして、その変化を覚えてくれた時間は、わたしにとっては短かったけど、一人でいた彼女には長い時間だったんだろう。

「ごめんっ」

頭を下げた。どれだけ謝っても足りない気がしたけど、謝るしかできなかった。

「勝手にいなくなつて、急に帰ってきて。わるいこ」

「う……」

「……」

それきり、口を開かない。彼女はどんな顔をしているんだろう。いつもは感情が顔に出ないのだけど、なぜかわたしには、彼女が優しい目をしているように感じられた。

「も、もしかして、その……心配して、くれた？」

「……ばか」

彼女はふり返った。怒っていた。全然優しい目じゃなかった。いつも横線な眉は若干つり上がって、雪のような銀色の瞳の奥は吹雪いていた。

でも、やわらかな雪色の髪は、たしかなあつたかさをもっていることを、わたしは知っている。ぎゅつとしてくれたときは、わたしもぎゅつとし返したのだから。

そんな無言の優しさと温かさをわたしは知っていたはずだった。きゅ、と引き結んだ口が小さく開かれる。

「小恋はずっといつしよって言ったのに、約束やぶった。約束、こ
うちは守ってたのに。ずっと守ってて、だからずっと心配してた」
小恋、と。彼女はわたしを本当の名前で呼ぶ。

「ご、ごめん。ほんとに、……ごめんなさい」

「……いい」

あつさりと、彼女は言った。緩められた口元は、春を迎えた花の
ような色だった。

「無事に帰ってきたんなら、それでいい」

「あ、ありが」

「でも」

と。

「小恋がいないせいで上手に仕事ができなかった。これから大変。
寒い冬だっってくるから、小恋には今まで以上にたくさん働いてもら
う」

わ、わたしのせいなのか？

ん、あれ？ 仕事？ ……仕事って。

「小恋はちゃんと雨が降らせられるようになった。だから、ちゃん
と手伝ってもらおう」

「あ、あの」

「……いつまでそこに立ってるの」

「えっ？」

「ここは小恋の家なんだから、なにも心配しなくていい」

ほんとに、小恋はわるい。そうつけ加えてきた。

「あ、あのさ」

「なに」

いつも通りのぶつきらぼうで、不器用な物言。わたしが不器用
だったのも、彼女の影響なんじゃないだろうか、そう思ったらな
んだか笑えてきて。

「もう一回、ただいまって、言っていていい？」

「……だから好きにしたらいい」

訊けば、やっぱりそんな言葉しか返ってこなかった。
でも、それでもいい。

「うん。ただいま」
「そう言えば、」

「おかえり、小恋。ちゃんとただいまが言える小恋は、いいこ」
ほんとにちよつとだけ、目が優しくなった。

その小さな変化に、わたしは気づけるようになった。

きっと、彼女はいつだって気持ちを込めていたんだろう。

気づいていなかったのは、わたし。気づこうともしなかったのも
わたし。

でも、もうだいじょうぶ。

もうだいじょうぶだ。

今のわたしにはわかるから、ちゃんと、伝わってるから。
だから。

ただいま、と。

もう一度だけ、心の中でつぶやいたんだ。

了

あとがきのようなもの

まずは、ここまで読んでいただきありがとうございますとございました。ここから読んでいる方、ネタバレはありませんので、最初に読んでもらって大丈夫です。

ほとんどの方、はじめまして。

碧月あおつきと言います。よろしく願います。

本作は、「ちよつとだけ不思議な日常もの」です。

恋愛でもないし、青春でもないし、学園でもないの、困ったジャンルになってますが、読んでいただければ、なんとなくわかっていただけるかもしれませ

ん。

簡単に言ってしまうえば、

「きつねみみ、きつねしっぽのちみっこい女の子って可愛いかもしれない」

という話です（本当）

可愛い、と少しでも思ってもらえたなら嬉しい限りです。

けものみみ好きなけもーさんも、

ほんわりと読みたいあなたも、

幽霊キヤラはまだですかの皆さんも、

よくわからんあとがきだなと思った読者さんも、宜しければ、読んでやって下さい。

今回は未定ですが、ゆっくりと進んでいきたいと思っています。
それでは、失礼します。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5829w/>

きつねとアメと探し物。

2011年10月3日03時25分発行